

八尾市文化財調査報告36
平成8年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅰ

1997.3

八尾市教育委員会



正誤表（八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書I）

| | 誤 | 正 |
|-------------|------------------|--------------------|
| P 1 - L 8 | 暗淡褐色細砂混粘砂 | 暗淡褐色細砂混粘砂 |
| P 3 - L 15 | 第Ⅲ層暗黃灰色砂質土～ | 第Ⅲ層暗黃褐色砂質土～ |
| P 3 - L 19 | 5区の北側でみられる第2造構面 | 5区の南側でみられる第1造構面 |
| P 6 - L 39 | ・・前後の黃灰色粘砂上面で | ・・前後の灰黃色粘砂上面で |
| 第10図 | 9. 灰褐色粘砂 | 9. 灰白色粘土混細砂 |
| P 12 - L 3 | 暗黃褐色微砂シルト上面 | 暗褐色砂質土上面 |
| P 16 - L 16 | ・・異なる城山遺跡では | ・・異なる城山遺跡では |
| 第22図 | 12. 暗灰色シルト混粘質 | 12. 暗灰色シルト混粘質土 |
| P 21 - L 3 | 2～17は土坑から・・・ | 3～18は土坑から・・・ |
| P 32 - L 13 | ・そして、古墳時代庄内～布留・ | ・・そして、庄内～布留式期・・ |
| P 36 - L 11 | ・・試掘を行がでて・・ | ・・試掘を行うことができて・・ |
| 第52図 | 5. 淡茶灰色粘質土 | 5. 淡茶灰色粘土 |
| P 46 - L 2 | ・及び淡茶灰色微砂質土を・・ | ・及び暗茶黄色微砂質土を・・ |
| P 49 - L 15 | ・・、暗褐色粗砂混粘砂層 | ・・、暗茶灰色粗砂混粘砂層 |
| P 50 - L 5 | ・・にある灰色粗砂混粘土より | ・・にある灰色粗砂混粘質土より |
| 第68図 | I 黑灰色粘砂 | I 黑灰色砂粒混粘砂 |
| P 52 - L 2 | 8.3 m) の暗褐色粘砂は・・ | 8.3 m) の暗褐色砂混粘砂は・・ |
| P 54 - L 19 | 縁部は内傾してのび、・・ | 縁部は内傾してのび、・・ |
| P 62 - L 13 | ピット3は灰色粘砂 | ピット3は暗灰色粘砂 |
| P 64 - L 28 | ・、暗黃褐色砂混シルト質粘土層 | ・、黄褐色粘性シルト層 |
| P 64 - L 32 | に暗黃褐色砂混シルト質粘土層 | に黄褐色粘性シルト層 |
| P 66 - L 13 | ・・、第88図のように・・ | ・・、第86図のように・・ |
| 第86図 | 第86図 調査圧割図 | 第86図 調査区割図 |
| P 70 - L 21 | ・・北白川C式属する・・ | ・・北白川C式に属する・・ |
| P 89 表2 | b d 土師器 | b d 土師里 |

はじめに

八尾市は、広く生駒山西麓から大阪平野にかけての範囲に市域を有しております。古くは河内湖、河内潟に面し、多くの河川が流れ、肥沃な平野が形成されてきました。ここには旧石器時代から連縄と遺跡が形成されており、全国的にも有数な遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

さて、本市におきましても近年開発事業が急増しておりますが、本書にはこの開発事業にさきだつ遺構確認調査の成果の一部を収めております。平野部の遺跡では、太田遺跡の弥生時代の焼失住居や、中田遺跡の古墳時代の土坑状遺構、山麓部の遺跡では、八尾市内ではじめての遺構に伴った縄文時代中期の土器群、さらには高安古墳群での新たな古墳の確認など、小規模な調査ながら、非常に貴重な成果を得られました。

しかしながら、これらの調査はすべて、開発を前提とした記録保存のための発掘調査の事前の遺構確認調査であり、これらの成果は遺跡の破壊という大きな代償のうえに得られたものであることは言うまでもありません。

今後、八尾市の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれるかたちで、保存・活用がなされいくことが、緊急かつ重要な課題となっております。本書が微力ながらもその役割の一端を担うことができれば、幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にご協力、ご助力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成九年三月

八尾市教育委員会

教育長 西谷信次

例　　言

1. 本書は、平成8年度に八尾市教育委員会が国庫補助事業として、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 調査は八尾市教育委員会文化財課（課長 寺島正男）が実施した。
3. 調査は八尾市教育委員会文化財課技師 米田敏幸、道斎、吉田野乃、藤井淳弘が担当し調査にあたった。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査について、その概要を収録した。
5. 調査一覧表及び報告書抄録の作成は本課技師 藤井淳弘、吉田珠己が行なった。
6. 本書の作成にあたっては、米田、道、吉田、藤井が執筆・編集を行い、文責は文末に記した。
7. 久宝寺遺跡・水越遺跡その他の土器の胎土について、市立曙川小学校教諭 奥田尚先生に鑑定して頂き、付論「縄文式土器の表面に見られる砂礫」・「土器表面に見られる砂礫」の2編の玉稿を頂いた。記して、感謝いたします。

本文目次

| | |
|----------------------------|----|
| 1. 跡部遺跡（96-580）の調査 | 1 |
| 2. 老原遺跡（95-319）の調査 | 3 |
| 3. 太田遺跡（96-266）の調査 | 10 |
| 4. 恩智遺跡（96-408）の調査 | 17 |
| 5. 久宝寺遺跡（95-719）の調査 | 19 |
| 6. 郡川遺跡（96-275）の調査 | 23 |
| 7. 郡川遺跡（96-497）の調査 | 25 |
| 8. 小阪合遺跡（95-735）の調査 | 27 |
| 9. 小阪合遺跡（96-407）の調査 | 29 |
| 10. 高安古墳群（95-586）の調査 | 33 |
| 11. 高安古墳群（95-622）の調査 | 38 |
| 12. 東郷遺跡（95-683）の調査 | 40 |
| 13. 東郷遺跡（96-153）の調査 | 43 |
| 14. 東郷遺跡（96-451）の調査 | 45 |
| 15. 東郷遺跡（96-186）の調査 | 47 |
| 16. 中田遺跡（95-470）の調査 | 49 |
| 17. 中田遺跡（96-510）の調査 | 62 |
| 18. 中田遺跡（96-487）の調査 | 66 |
| 19. 水越遺跡（95-582）の調査 | 68 |
| 付論1 「縄文式土器の表面に見られる砂礫」 奥田 尚 | 78 |
| 20. 矢作遺跡（95-739）の調査 | 83 |
| 付論2 「土器表面に見られる砂礫」 奥田 尚 | 85 |

図版目次

| | |
|--------------------|---|
| 図版1 老原遺跡 (95-319) | 第4区 井戸検出状況 |
| 小阪合遺跡 (96-407) | 第5区 溝及び土坑土層断面 |
| 図版2 太田遺跡 (96-266) | 土器出土状況 焼失材検出状況 (北より) 焼失材・茅部分 |
| 久宝寺遺跡 (95-719) | 遺構検出状況 (東より) |
| 図版3 郡川遺跡 (96-275) | 遺物出土状況 |
| 東郷遺跡 (95-683) | 遺物出土状況 (南より) |
| 東郷遺跡 (96-451) | 第2遺構面 (西より) |
| 図版4 東郷遺跡 (96-153) | 第1調査区 土器包含状況・第2調査区 断面状況 第3調査区 遺構検出状況 |
| 図版5 高安古墳群 (95-622) | 第1トレンチ全景・第3トレンチ全景 第4トレンチ全景 |
| 図版6 高安古墳群 (95-622) | 第2トレンチ全景・甕棺検出状況 甕棺断面状況 |
| 図版7 高安古墳群 (95-586) | 石室部分断面 (北東より)・石室部分近景 石室部分 出土状況 |
| 図版8 中田遺跡 (95-470) | 第5調査区 第1遺構面 (北より)・馬歯出土状況 製塙土器出土状況 |
| 図版9 中田遺跡 (95-470) | 土器出土状況 |
| 中田遺跡 (96-487) | 甕出土状況 |
| 中田遺跡 (96-510) | 台付壺出土状況 |
| 図版10 水越遺跡 (96-582) | 遺構検出状況 (北より)・土坑状遺構1 (北東より) 土坑状遺構2・土層断面 (南より) |
| 図版11 太田遺跡 (96-266) | ・久宝寺遺跡 (95-719)・高安古墳群 (95-586) |
| 小阪合遺跡 (96-407) | ・中田遺跡 (96-487) 出土遺物 |
| 図版12 中田遺跡 (95-470) | 出土遺物 |
| 図版13 中田遺跡 (95-470) | 出土遺物 須恵器甕・土師器 |
| 図版14 中田遺跡 (95-470) | 出土遺物 製塙土器・製塙土器 |
| 図版15 中田遺跡 (95-470) | 出土遺物 馬歯及び骨片・粘土塊 |
| 図版16 中田遺跡 (95-470) | 出土遺物 製塙土器 |
| 中田遺跡 (96-510) | 出土遺物 |
| 図版17 水越遺跡 (95-582) | 出土遺物 Iグループ |
| 図版18 水越遺跡 (95-582) | 出土遺物 II・IIIグループ・IV-Vグループ及びIXグループの一部 |
| 図版19 水越遺跡 (95-582) | 出土遺物 VI・IXグループ・X・XIグループ |
| 図版20 水越遺跡 (95-582) | 出土遺物 石鎌・石錐・石器剥片 |

1. 跡部遺跡（96-580）の調査

1. 調査地 春日町4丁目4番
2. 調査期間 平成8年12月12日
3. 調査方法 事業計画地に3.3m×3.3mの調査区を2カ所設定し、重機と人力を併用して遺構・遺物の有無を確認した。
4. 調査概要 現況は水田として利用されており、東に接する道路より約45~50cm低くなっている。

第1調査区……遺構面は2面検出できた。第1遺構面は地表下0.8m前後（TP + 7.82m）の暗淡褐色細砂混粘砂で、溝と土坑を検出した。遺構の時期は出土遺物から9~10世紀に比定できる。第2遺構面は包含層を確認したのみで、遺構そのものは検出できなかったが、出土遺物量や土層に含まれる炭化物の存在などから遺構が調査区周辺に遺存しているものと考えられる。包含層は地表下1.3~1.35m（TP + 7.32m）の茶褐色粘砂とその下部の暗茶褐色砂質土、そして暗灰色粘質シルトである。この3層の層厚は約0.5mを測り、最下層の暗灰色粘シルト層状面では炭化物がみられた。弥生時代後期から庄内式期にかけての遺物が多く出土している。

第2調査区……現水田面直下、地表下0.35mより近世の耕作面があり、さらに地表下0.75m（TP + 7.75m）の淡褐色砂質土層に中世ごろの遺構面が存在する。さらに、地表下1.1m（TP + 7.4m）において灰褐色粗砂層が層厚約0.15mで調査区全体に堆積している。

そして、粗砂層の直下に淡灰色シルト質粘土層を間にはさみ、地表下1.4m（TP + 7.1m）から地表下2.25m（TP + 6.25m）の暗灰色粘土層・暗青灰色粘土層の



第1図 調査区周辺図（1/5000）

間に弥生時代後期の土器を中心とした土器集積を検出した。遺構の性格は不明であるが、おそらく溝内の土器集積であると考えられる。地表下2.25m～地表下2.55m (TP+5.95m) の間は暗灰色細砂層が続き、遺物は確認できなかった。

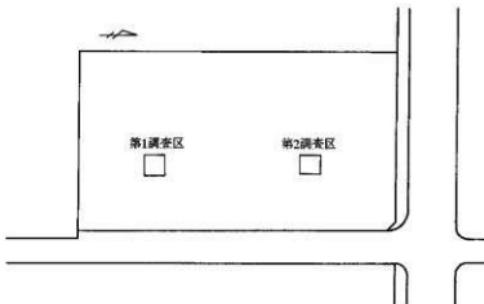
5. まとめ

本調査地の東北約50mで平成元年に流水紋銅鐸が見つかっている。銅鐸埋納坑検出層のレベルはTP+6.75～6.9mで、土層は灰色～緑灰色シルト～細砂混じり粘土とされている。今回確認した弥生後期から庄内式期の遺物を含んだ層位がまさにこのレベルであり、暗緑灰色粘質シルト・暗灰色微砂混粘土が堆積しており、その関連が窺われよう。

(第1調査区-消 第2調査区-藤井)

参考文献

(財)八尾市文化財調査研究会 1992「跡部遺跡発掘調査報告書」 八尾市文化財調査研究会報告31



第2図 調査区位置図 (1/800)



第3図 土層断面柱状図 (1/40)

2. 老原遺跡（95-319）の調査

1. 調査地 東老原1丁目2-4の一部、2-5
2. 調査期間 平成7年10月27・30・31日
3. 調査方法 当初開発工事に伴う下水管人孔部分（2m×2m）を対象に調査を実施したが、中世の遺構が確認されたため、管路部分の掘削についても立会い、土層の観察をおこなった。なお、調査区番号については人孔部分の調査区1～3、管路部分の掘削の調査区を4・5とした。
4. 基本層序 事業計画地は全城におよそ0.9～1mの盛土がされているが、3区、4区などのように西側では浅く0.5～0.6mである。これは道路を挟んで西にある耕作地でも同様なレベルであることから、元来西側がやや高地になっていたと思われる。
以下、遺構が顕著にみられた第2・5調査区を中心に旧耕作土以下の基本層序を述べていこう。
- 第I層旧耕作土（層厚約15～20cm）・・現代の耕作面である。4区は畑作地。
- 第II層淡灰茶色砂質土～粘砂（層厚約23cm）・・3・4区など、調査地西側ではみられない層で、土師器・瓦器を僅かに含む。
- 第III層暗黄灰色砂質土～灰茶色小礫混粘質土（層厚12～25cm）・・第1遺構面のベース層となっており、また第2遺構面の包含層ともなっている。
- 第IV層灰黄色粘砂～暗黄灰色微砂質土（層厚12～17cm）・・第2遺構面のベース層となる。
- 第IV'層暗褐色粗砂混粘砂（層厚約17cm）・・5区の北側でみられる第2遺構面のベース層である。



第4図 調査地周辺図（1/5000）



第5図 調査地位置図 (1/1200)

第V層暗灰褐色粗砂混粘質土～茶灰色砂（層厚10cm）5区の両端で僅かに確認できる。

第VI層灰白色～淡青灰色細砂（層厚70cm以上）・この層は全区でほぼ同レベルで堆積している。調査地の北側を流れている旧大和川による堆積層とみられる。

このように、近年までの耕作土と遺構面との間は40cm程度しかなく、本来の遺構構築面は削平されている可能性が高い。

5. 検出遺構

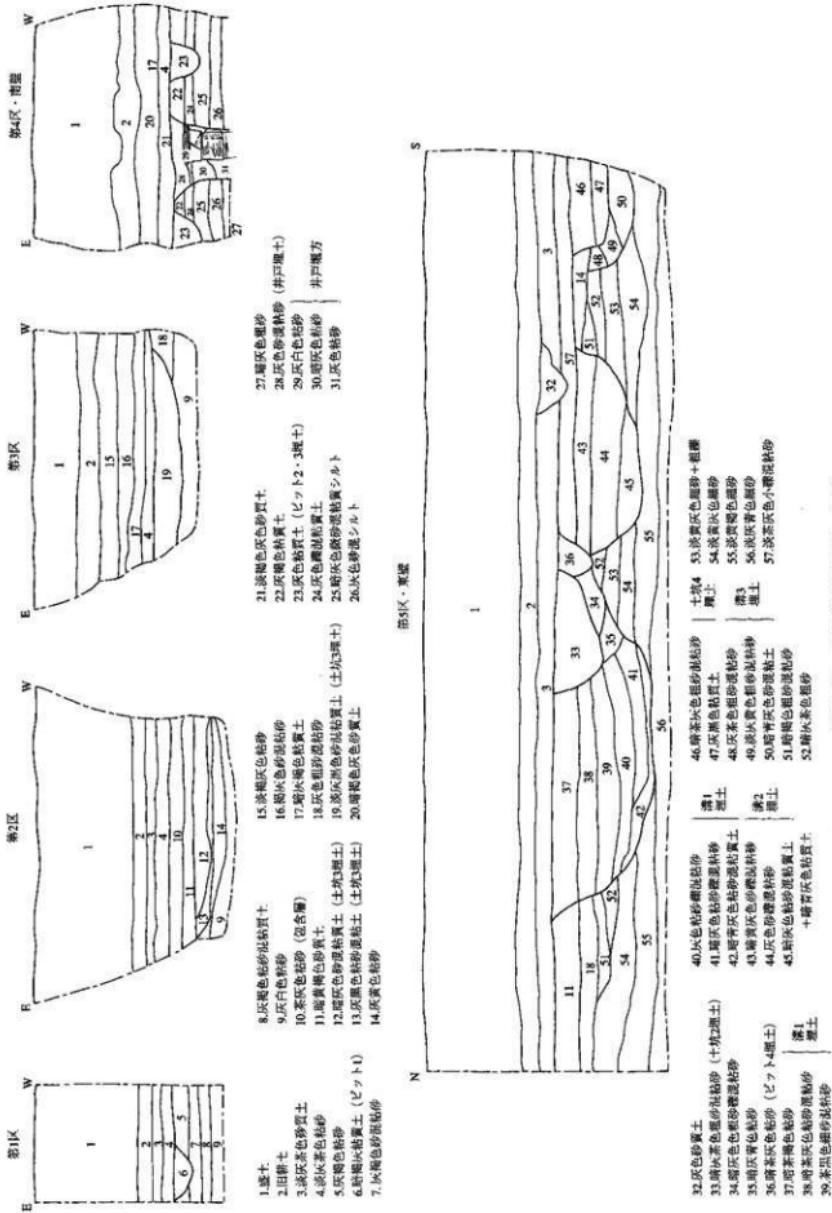
検出遺構については1区ではピット1基、2区では密に遺物を含む包含層と土坑、3区では土坑状遺構、4区ではピット2基と井戸1基、5区では溝3条、土坑1基、ピット1基である。なお時期の明確でない1区のピットを除いて他はすべて12世紀後葉から13世紀中葉の時期が考えられる。なお、ここでは最も多く出土した瓦器碗から時期を考えたいが、瓦器碗の編年については尾上（1984）を用い、その年代観については森島（1992）を参考とした。

遺構面は上層で確認したかぎりでは2面が遺存しており、上部の面を第1遺構面とし、下部の面を第2遺構面とした。

[第1遺構面検出遺構]

1区—ピット1 地表下1.43mの灰褐色粘砂をベース層とする。円形を呈し、径約58cm、埋土は灰褐色粘質土で、深さ17cmを測る。遺物は出土していない。

2区—包含層（茶灰色粘砂） 地表下1.4m前後に遺存しており、層厚約14cmを測る。多量の瓦器碗の破片を包蔵しているが、土師器片はまったくみられない。1区の遺構検出面と同レベルにあり、遺物出土状況からみても本來は土坑などの遺構と考えることができる。瓦器碗はIV-1～2期が主体であるが、わずかにIII-1～2期やIV-3期の瓦器碗が混在している。ここでは瓦器碗（1・2）と瓦器小皿（3～5）が図化できた。瓦器碗はいずれも内面に渦巻き状のヘラミガキを施し、高台は無調整の粘土紐が雜にめぐるものである。ただし、(2)については出土遺物のなかでは最も新しいところに位置づけられ、点数的にも1～2点と極僅かである。小皿は内外面のヘラミガキはみられず、外面についても(5)は底部は未調整である。



第6図 土層断面図(1/50)

3区-土坑1 地表下1.23mで検出した。灰色粗砂混粘砂をベースとする。不整円形を呈するところとみられるが、西側の肩を確認したのみで明確にはわからない。埋土は淡灰黒色砂混粘質土で、深さは29cmを測る。遺物はやはり小片ばかりでやや時期の確定に決め手を欠くが、Ⅲ-1～2期が主体とみられる。しかしⅣ-1期の遺物も含まれる。瓦器小皿(6・7)と瓦質の火鉢(8)を図化している。(6)は底部から上外方に立ち上がり器高2.9cmと深めのもので、外面下部と内面にヘラミガキを施す。(7)は底部から緩やかに立ち上がる器高2cmと浅いもので、内面に粗な平行線状のミガキを施す。(8)は口径47.4cm、器高12.6cmを測り、内外面ともナデ成形の後にヘラミガキを行っている。印花文等はみられない。

4区-ここでは地表下1.4mの灰褐色粘質土をベース層としている。

ピット2 西肩部分を検出した。埋土は灰色粘質土で深さは28cmを測る。遺物は出土していない。

ピット3 幅41cm。埋土は灰色粘質土で、深さ26cmを測る。

井戸1 堀方の東西幅86cm、深さ86cmを測る。井筒は3段に構築されており、1段目に土師質羽釜、2・3段目に曲物を使用していた。井筒内からはわずかな瓦器と土師器片等が出土している。また堀方からは瓦器片や径7.2cm～9cmの土師器小皿(9・10)に混じって玉縁状に肥厚する口縁部(11)をもつ土師質羽釜片が出土している。このような状況から堀方から出土した羽釜は以前に井筒として使用されていたものと考えられる。井戸使用の上限は瓦器からⅣ-2期と考えられる。井筒使用の土師質羽釜(12)は口径30.4cm残存高16.7cmで、口縁部は上方に肥厚する。胴部外面の強い板ナデを指ナデで消しており、指頭痕が残る。内面は丁寧なナデを行っている。

5区-地表下1.35m前後で遺構を検出している。ベース層は北側では暗黄灰色微砂質土、南側では淡茶灰色小礫混粘質土である。

溝1 南側の肩は土坑2とピット4に切られているが、南北幅は3.8m前後と推定される大溝である。深さは約1.05mで、埋土は基本的に6層に分けることができる。いずれも細砂の混じる粘砂層であり、水が帶水していたものと考えられる。遺物は暗茶灰色～茶黒色細砂混粘砂を中心として土師器小皿、瓦器の細片と丸瓦片等が出土している。時期はⅢ-2～3期である。

土坑2 溝1を切るかたちで構築されている。形態は不明であるが、南北幅は1.26m、深さ49cm。埋土は暗灰茶色粗砂混粘砂。遺物はみられない。

ピット4 土坑2に切られており、形状は不明。検出幅48cm、深さ34cm。

[第2遺構面検出遺構]

2区-土坑3 地表下1.62m前後の灰黄色粘砂上面で検出した。形態は円形で、径2.25m以上とみられる。埋土は2層に分けられ、上層は暗灰色砂混粘質土、下層は灰黒色砂混粘土である。出土は瓦器小皿(13)、須恵器杯(14)、瓦器碗(15～18)等である。量的にはややまとまっているが、細片のため図化できるものは極わずかである。Ⅳ-1期を主体としているが、Ⅲ-2～3期も含まれている。

5区-地表下1.55m前後の黄灰色粘砂上面で検出した。

溝2 上面の遺構に北側肩を切られているが南北の検出長2.02m、深さ56cmを測

る。埋土は3層に分けられ1層は暗黄灰色砂混粘土、2層は灰色砂礫混粘土質土、3層は暗灰色砂混粘土である。出土遺物は瓦器碗・小皿、土師器小皿、須恵器片に混じって白磁の極小片を含むが、いずれも量的には少ないうえに、細片ばかりであった。瓦器はII-2~3期を中心としてIII-1期もみられる。

土坑4 南肩より約1.03mを検出した。深さ約41cm。埋土は2層に分けられ、上層は暗茶灰色粗砂混粘土、下層は灰黒色粘土質土である。瓦器碗・小皿、土師器小皿の細片が出土している。II-2~3期に比定できよう。

溝3 土坑4が遺構を切っており、形状は明確ではない。北側の肩部が明確にできなかったため、遺構構築面を明確にできなかった。しかし、埋土下層の堆積層が溝2に類似していることから第2遺構面から構築されたと考えている。遺物は瓦器細片が少量出土している。

6. 遺構の時期について

本調査では2面の存在が考えられ、溝、土坑、ピット、井戸等の遺構が検出できた。ただ立会いを中心として調査であったため、遺物についても第2区を除いて遺構検出数の割りに少なく、さらに多くが細片であったことは遺構の時期判断について不安定な要素となっている。そのため、土器1個体からではなく、瓦器碗の見込みの暗文、高台の形態、外面のヘラミガキの状況等を個別に確認し判断した。

以下に、検出遺構と時期を表1にまとめておく。

| 調査区 | 遺構面 | 遺構名 | 時期(主体) | 調査区 | 遺構面 | 遺構名 | 時期(主体) |
|-----|-----|--------|----------|-----|-----|-----|----------|
| 第1区 | 第1面 | ピット1 | 不明 | 第5区 | 第1面 | 溝1 | III-2~3期 |
| 2区 | タ | 包含層土坑? | IV-1~2期 | | タ | 土坑2 | 不明 |
| 3区 | タ | 土坑1 | III-2~3期 | 第2区 | 第2面 | 土坑3 | IV-1期 |
| 4区 | タ | ピット2 | 不明 | | タ | 溝2 | II-2~3期 |
| タ | タ | ピット3 | 不明 | | タ | 土坑4 | II-2~3期 |
| タ | タ | 井戸 | IV-1期 | | タ | 溝3 | 不明 |

表1 検出遺構一覧表

表から第1面はおよそIII-2期からIV-2期にいたる遺構面で、第2面はII-2期からIV-1期にいたる遺構面と考えられる。ただし、2区については第1面と第2面の遺構はほぼ同時期であり、同一遺構の可能性もある。

このように第1面は13世紀前葉から中葉にかけての遺構であり、第2面は12世紀中葉から13世紀前葉にかけての遺構であり、ほぼ1世紀にわたって集落が営まれたことがわかった。

7. まとめ

最後に調査地周辺の既往調査で検出されている同時期の遺構との関連から集落の範囲について考えてみたい。

老原遺跡では当市教委と助八尾市文化財調査研究会（以下、助八文研）によって数次の調査が行われてきた。今回の調査と最も近いものは助八文研による4次調査で、同じ事業計画地内の西端を下水道立孔に伴い調査している。ここでは地表下0.7mで鎌倉時代の土坑と溝・小穴を、0.9mで平安時代末期の溝を検出している。平安末期の溝は幅1.3~2.1m、深さ0.25mで瓦器、土師器に混じって卒塔婆が出土している。

また、本調査地から南へ150~250mの地点で鉄塔建設のため3箇所で助八文研

による2次調査が行われている。ここでは平安時代末期の土坑と鎌倉時代の井戸3基、土坑6基の他溝・小穴と多数の遺物が出土している。このうち内部構造の判明している井戸では径0.25~0.4m、高さ0.3mの曲物を4段積み重ねており、内部から羽釜片が数点出土していることから曲物の上に羽釜が積み上げていたことが指摘されている。

さらに4次調査からさらに南へ100mの地点で、昭和56年に当市教委が行った調査では古墳時代後期の遺構と鎌倉時代の井戸・土器窓・柱穴が見つかっており、このうち井戸は径0.46m、高さ0.18mの曲物を2段重ね、下段に羽釜を据えるものであった。井戸内出土遺物は「狭山編年」のIV期に位置付けられている。

このように中世の遺構は南へ拡がる様相を示しているが、市教委昭和56年調査の西隣りで、財八文研が行った3次調査では鋤溝状の溝を4条検出したに留まり、一応集落の南端が確認されたといえよう。

また本調査地の南東約370m地点の財八文研1次調査では農耕に関連した溝を検出しておらず、やはり生産域と推定される。

平成7年には本調査地の西へ約170mの地点で財八文研による6次調査が行われ平安時代末期から鎌倉時代初頭の土坑、溝、小穴を検出しているが、ベース層が砂を多く含むものであり、今回のような粘質土あるいは砂質土となっていた。

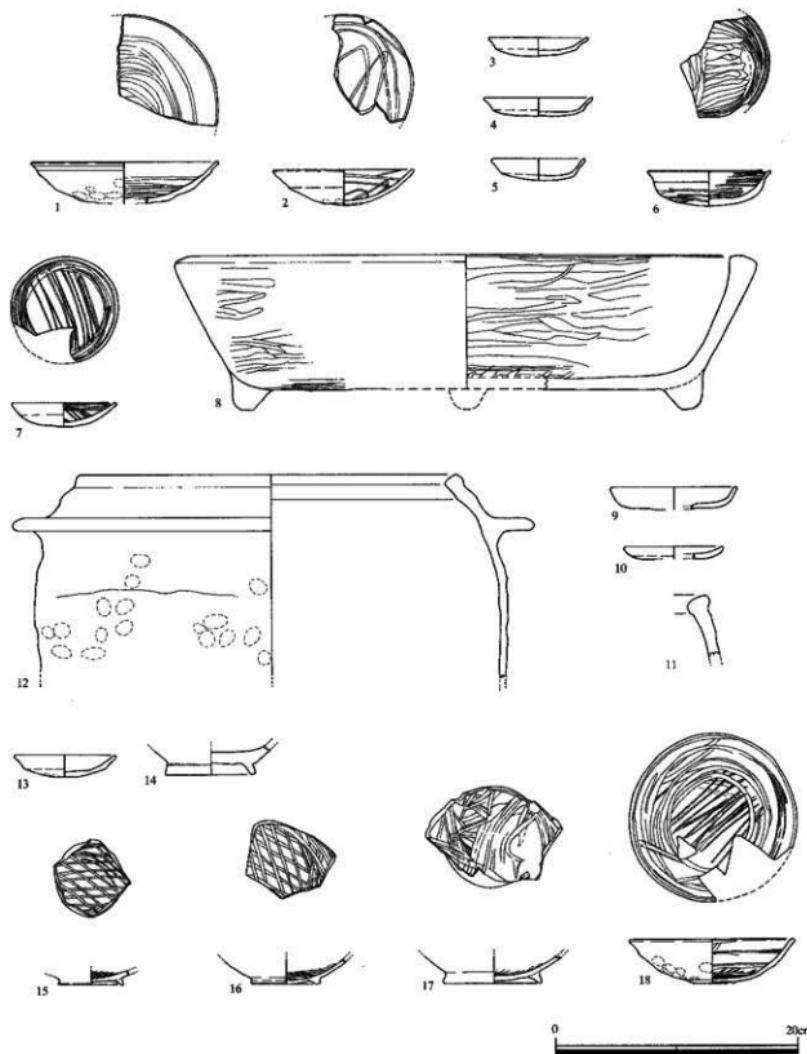
さらに西南約250mの地点での財八文研の5次調査では土坑、落ち込み、小穴、溝が検出され、溝を境に東側に生産域、西側に居住域と区画した状況を検出した。以上の状況をまとめてみると、今回の調査地から南へ約350mの間で集落が営まれていたことが窺える。また東側は調査例が少ないが、南東約350mまでの間で生産域に変化していることがわかる。また西側は7次・6次で溝を中心として、土坑や小穴が見つかっていることから、本集落とは別の集落が点在していたものと考えられる。また、井筒の構造をみると曲物と羽釜を使っていることは変わらないが、その組み方が異なっており、これを井戸を作った人による差異として捉えるならば集落の住居の軒数として考えることが可能である。

今回の調査は奈良時代の瓦が出土したと伝えられる五条の宮の東約80mを行ったものだが、残念ながら奈良時代の遺構は見つからなかった。それが中世に削平されたものであるか、あるいは限られた地点に位置する施設であったのかは今だ不明であるが、五条の宮そのものの調査が行えない現状では、周辺の調査を積み重ねて結果を導き出すしかなく、今後も慎重な調査が必要とされる。

(道)

参考文献

- 尾上実 1983 「南河内の瓦器窓」「藤沢一夫先生古希記念古文化論叢」
森島康夫 1992 「畿内瓦器窓の併行関係と曆年代」「大和の中世土器研究Ⅱ」
財八尾市文化財調査研究会 「老原遺跡(第4次調査)」・「老原遺跡(第3次調査)」
『八尾市文化財調査調査研究会年報 昭和63年度』 1989
『老原遺跡(第2次調査)』『八尾市文化財発掘調査概要 昭和61年度』 1987
『老原遺跡(第1次調査)』『昭和59年度事業報告』 1985
『老原遺跡(第6次調査)』『平成7年度財八尾市文化財調査研究会事業報告』
『老原遺跡(第5次調査)』『平成5年度財八尾市文化財調査研究会事業報告』
『老原遺跡発掘調査報告』『八尾市文化財発掘調査概要報告1980・1981年度』



第7図 出土遺物実測図 (1/4)

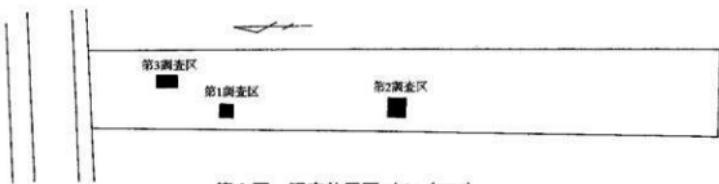
3. 太田遺跡（96-266）の調査

1. 調査地 太田3丁目156番地
2. 調査期間 平成8年9月27日・10月24日
3. 調査方法 事業計画地の浄化槽部分に2m×2mの調査区を、そして貯留層部分に3m×3mの調査区を設定し、各々掘削深度まで調査を行った。その結果、両調査区で遺構・遺物の遺存が確認された。特に、南側に設定した第2調査区では多く遺物が出土しており、また貯留槽の規模が大きいことから計画の変更を協議した。そして再度変更位置に3.2m×2mの第3調査区を設け、調査を行った。
4. 調査概要 現況は畑として利用されており、北側に接する道路とは0.5m前後の高低差がある。調査時点では畑に盛土を行っていた。
第1調査区—耕作土から地表下0.75m前後の褐灰色粘土上面で、検出長約1.4m幅約0.6m、深さ約0.08mの溝状遺構（SD1）を検出した。灰色粘質土を埋土としていたが遺物は出土しておらず、時期は不明である。さらに、この遺構面から0.3m前後下部にある灰白色粘土混細砂上面では東から南西方向の溝（SD2）を検出した。検出長約1.44m、幅約0.53mで、埋土は暗灰色粘土混細砂で、深さ0.12m～0.2mを測る。遺物が出土していないため、遺構の時期は明確ではないが、第1遺構面構築層である褐灰色粘土中に土師器甕口縁部や高杯片、須恵器杯蓋片など、古墳時代後期の遺物が含まれていたことから、この古墳時代後期以前の遺構面と考えられる。

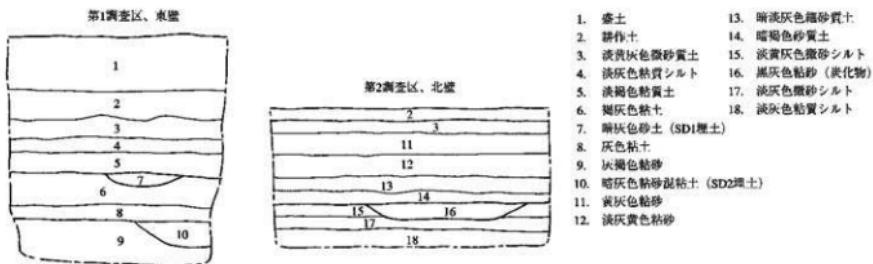
第2調査区—遺物は耕作土以下4層目から混じっているが明確な包含層と考えられるのは耕作土から0.51mにある5層目の暗淡灰色細砂質土（層厚0.15m前後）で



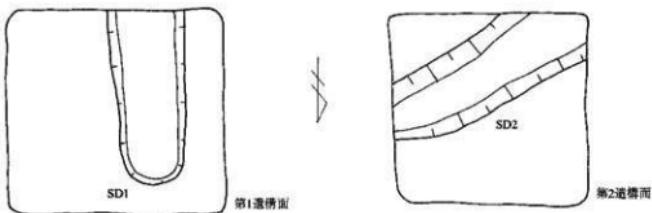
第8図 調査地周辺図（1/5000）



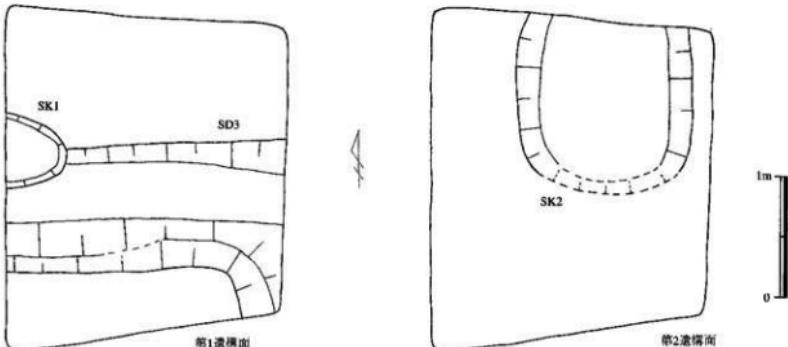
第9図 調査位置図 (1/800)



第10図 第1・2調査区土層断面図 (1/40)



第11図 第1調査区遺構平面図 (1/40)



第12図 第2調査区遺構平面図 (1/40)

ある。土師器の壺、高杯の破片とともに須恵器がいずれも小片であったが、多数出土した。須恵器の編年観からMT15型式併行期にあたる。そして、この包含層下部の暗黄褐色微砂シルト上面で東西方向の溝（SD3）と土坑（SK1）を検出した。溝（SD3）は西側の南肩が屈曲する形状をしており、検出長約2.25m、幅約1.01m、深さ約0.12mである。灰色粘質土～灰色砂混粘土を埋土とし、土師器杯片、須恵器壺片や杯身片が出土している。土坑（SK1）は東壁付近で検出したため、全容は不明である。半円形を呈し、直径約0.3mで、埋土である暗褐灰色粘質土からは遺物は出土していない。

第2遺構面は耕作土から0.8mの淡黄灰色微砂シルト上面で検出した。遺構は調査区北側で、直径約1.45mの不整円形を呈する焼土坑（SK2）が見つかっている。最深部で0.22mを測り、炭化物が詰まっていた。出土遺物は小片であったが、土師器片のみで製塙土器が混じっていた。このようなことから製塙炉の可能性が指摘できよう。遺構面上では口径10.4cmで、口縁がやや肥厚して段をもつ須恵器蓋杯（1）が出土しており、また、上部の包含層から口径10.2cmで底部が丸みを帯びている（2）や口径12.2cmで体部の浅い（3）等の須恵器杯身や高杯脚部（4）の他、外面ハケ調整で口径8.4cmの小型の土師器壺（5）が出土している。これらの須恵器はTK23～TK47型式に比定でき、遺構もこの時期に該当するものと考えられる。

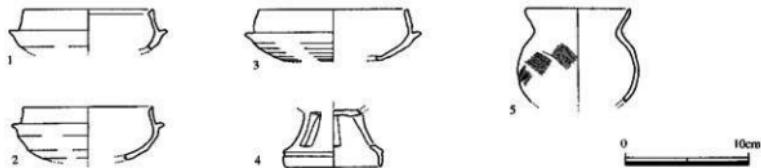
また、第2遺構面構築層からは布留期の壺片が見つかっていることから、同時期の遺構の存在が推定されるが、本調査区では検出されなかった。

第3調査区－ここでは住居跡と考えられる遺構を検出した。遺構は地表下2.45m前後（耕作土から1.68m前後）に遺存していた。ベースは暗灰色粗砂混粘質土であるが、トレチ西壁付近では暗灰色粘質土に灰白色粘土がブロック状に混じる様相を呈している。南から北にやや傾斜しており、高低差は約7cmある。そして、トレチ北側に溝状の落ちがみられた。深さは約7.3cmで、幅75cm以上を測る。

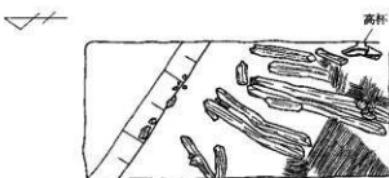
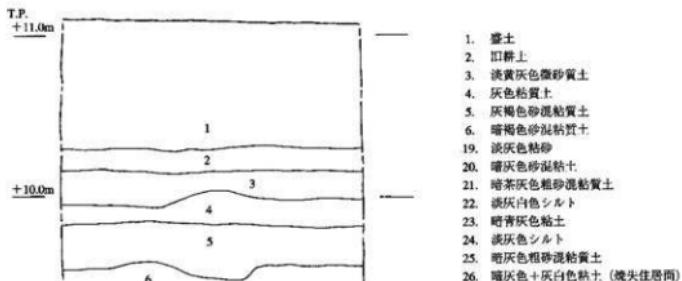
このベース上面で竪穴住居の建築部材と推定される炭化した木材が見つかった。木材はいずれも一辺が3.5cm～4cmの方形に近い形状の材で、2本が一对ともいえる状況であった。また、屋根を葺いたとみられる茅は灰になっていたが、非常に良好な状態であり、方形材に対して茅は横方向に使用されている様子が窺えた。さらに、一部に縦方向と横方向の茅を纏み込んでいる様子が確認できた。茅はトレチの南側にかたまっており、また方形材は溝状の落ちの肩部分を境にして南側にあることから住居跡は南に拡がっていることがわかる。

遺物はトレチの南東角で出土した完形の土師質の高杯1点だけである。高杯は横倒しの状態で見つかっており、倒れた際に地面と接触した杯部が内側に割れていたことは遺物が動いていないことを示している。全体に2次焼成をうけているが杯部よりも脚柱部に顕著である。

高杯は器高16.8cm、口径21.3cm、底径14.2cmを測る。2次焼成を受けており、色調は暗赤橙色である。口縁部長は受部長にはば匹敵し、脚柱部の中実化と脚裾部の広がりの進行が窺える。杯部は内外面をヘラミガキし、脚柱部から裾部にかけて外面はヘラミガキ、柱内面にシボリメ、裾内面にハケメを施している。また裾部に3



第13図 第1・2調査区出土遺物実測図（1／4）



第14図 第3調査区土層断面及び遺構検出状況（1/30）

穴を穿っている。このような特徴から上六万寺式併行期と考えられよう。

5. 焼失住居の可能性 第3調査区で見つかった遺構が明確に焼失住居跡と断定できないのは、遺構検出時点で調査区が約 2 m × 1 m と限られた範囲であったためである。そこで、周辺の同時期の焼失住居跡調査事例との比較からこの問題を考えたい。調査事例として次の3遺跡7住居跡を挙げておこう。

鬼塚遺跡は東大阪市の西麓の扇状地に立地する遺跡で、近辺には弥生時代の集落として知られる鬼虎川遺跡、西之辻遺跡があり、今回例として挙げた3遺跡の内では調査年代が最も古く1977年に実施されている。焼失状況を保存するため、一部を除いて床面まで掘り下げておらず、主柱穴や炉等の内部施設については不明な点が多い。



6

第15図 第3調査区出土高杯（1/4）

い。しかし、炭化部材については詳細な報告がされており、屋根部材が板葺きであったとする考えを述べている。また特筆すべき点としてベッド状遺構の検出と土器の素材と考えられている直径30cmの焼粘土塊が6個体出土していることである。時期は弥生後期後半である。

城山遺跡は大阪市の東端に位置し、八尾市と近接しており、周りを長原遺跡に囲まれている。焼失住居が検出されたのは1983~85年に行われた近畿自動車道建設に伴う調査で、幅が限られた調査であるが40~70mの間隔で径8m前後の住居跡が点在しており、弥生後期中葉1棟と後期前葉3棟の計4棟の焼失住居が見つかっている。なかでも後期前葉の3棟は規模が似通っていることから同時併存の可能性があるとされている。また、SB1001は建物の全容が検出されているうえに、住居内から45個体の完形土器が出土しており、住居で使用される土器の状況を示す一つのモデルとなっている。

萱振遺跡は八尾市の北側に位置し、一部東大阪市と接する。焼失住居は2棟検出されているが、柱痕の遺存している点や完形の土器が少なく、特に状態のよい壺形土器が見当たらない点等から偶発的な失火の後住居を廃棄したものと推定されている。また、このような状況に加えて2棟が同一遺構面で検出されていることから、同時併存していたする考えが提出されている。出土遺物に鬼塚遺跡と同様な焼粘土塊が4個体見つかっている。時期は弥生後期後半である。

以上3遺跡の各焼失住居と本調査地例（以下、太田遺跡例という）と比較し、検証を行ってみたい。なお、3遺跡の検出状況については表にまとめてあるので参照して頂きたい。

まず、太田遺跡例の状況をまとめておく。A) 3.5~4cmの方形状の炭化材が同一方向へ倒れていた。B) それらは2本一組といえるように近接しているものがある。C) 茅は炭化材に被さるような状態であった。また茅を編み込んだ様子が窺えた。D) トレンチ北側に幅75cm以上、深さ7.3cmの溝状の落ちがあり、これを境にして南側に炭化材が検出された。E) 遺物は1点ではあるが完形の高杯が出土している。以上A)~E)の4点である。順次検討しよう。

A)の炭化材については後期前葉から中葉の城山遺跡では棒状と板状のものがみられ、後期後半の萱振遺跡例では径5~7cmの丸木材が、鬼塚遺跡例では5cm以上の角材、3~6cmの割材と丸材、2cmの厚みの板材が検出されている。炭化材はいずれも放射線状に倒れていると報告されている。太田遺跡例では放射線状に倒れているかどうかは明確に判断できないが、同一の方向を向いていることは確かであり、他の遺跡例と同様なものであると推定される。こうしたことから方形状の炭化材は屋根の垂木材と考えるのが適切と判断される。ここで、問題となるのは垂木材の形状である。後期中葉と前葉の城山遺跡例ではこの垂木材は棒状のものが使用され、後半の萱振遺跡例でも5~7cmの丸木材が使用されている。しかし、もう一方の後半の鬼塚遺跡では角材と半割材といった加工材が使用されている。そして最も時代の下る末期に位置する太田遺跡例では前述のように方形状の材が使用されていた。以上の点から住居に用いられる垂木材は弥生後期という時間のなかで丸材→角材と半割り材の混合→方形状の材のみという変化が考えられる。

| 遺跡名 | プラン・板柵 | 時期 | 主柱穴・柱頭 | 出土遺物 | 炭化材の出土状況 | 特徴・備考 |
|---------------------------|--|--------|---|--|---|--|
| 鬼塚遺跡 竪穴式住居 | 長方形(面積25m ²) 長辺3.2m×短辺4.6m | 弥生後期後半 | 不明(焼失材保存のため、一部 倒壊して床面まで残らず)、 柱11、土鰐窓1、 平らな石と大きな石 (作業台) | 不明 | 薪4、高杯2 A 5cmの厚みの半円材 B 3~4cmの滑材・半円材・丸棒材 C 2cmの板材-25木束 Aとは逆面下で中央に丸棒材 横材とえらべられ、面積など上 にえらべられ、面積などは 作業台ではないかと考えら れている。 | 板材が壁面外にひっかけたり 張り出る形で受けている状況か ら張り出しを想定。土鰐窓を想定。 焼却土器は土器の形状を考 えられることより、面積などは 作業台ではないかと考えら れている。 |
| 城山遺跡 Dトレンチ S.B69001 | 長方形 長辺7m×短辺4.3m 深さ3.9m | 弥生後期中期 | 2本を検出・柱径1.1m ピット径50~65cm、深さ25cm 柱頭材 15~20cm | 円形 直径70cm 深さ35cm 横材に 接する 柱頭材 横材 | 壁5、窓6、器台2 矮柱3 矮杯1 大きな台石 | 周囲(幅40)×50cm、深さ20 cm・断面(下)等) = [標跡] まだ生れたままの外側への侵入を が、これは仕掛けへの侵入を 防ぐものと考えられている。 |
| SB1001 | 円形 東4.73m×南北7.6m 深さ0.15~0.2m | 弥生後期前葉 | 4本・正方形・柱頭1.3~3.4m ピット径50~65cm、深さ30~40cm 柱頭材 10cm 深さ30~40cm | 陶九方形 直径1.1~1.2m 深さ0.5m | 宋形窓がほぼ完形式。 器が4個(窓6、 脚4、脚15、脚12)、 板石 がある。 | 中央から外に向かって放射線状に広がる様子 腹材材(木材の特 徴)を組み合わせるものもある。 土器4つは整列に分けられ てある。柱頭材の存在から圓柱 状の窓が考えられている。 施設の手が考へられて いる。 |
| SB1002 | 東邊のみ検出 南径8m前後の円形を想 定 | 弥生後期前葉 | 検出されず | 検出されず | 完全窓がほぼ完形が 外見で窓3、器台 1、構造3、軸1) | 周囲(幅0.4~0.5m・深さ 0.1~0.15m・断面(合計)S.B 1001同様に遮蔽つきと想定。 |
| SB1004 | 円形(内張り穴壁) 東4.81m×南北6.0m以上、 深さ0.2m | 弥生後期前葉 | 4本・正方形・柱頭1.8~4m 柱頭材と柱円材のピット径 45cm、深さ45cm 断面三脚形 | 陶丸長方形 直径66cm、器頭 45cm、深さ45cm 断面三脚形 | 外見及び窓3、器台 1、器頭3、柱台 1、構造3、軸1) | 周囲(幅0.5~0.6m・深さ 0.15m・断面(台形)) の裏面に壁が現れる。柱頭材 があり、横木も組み合わ せた結果があことから盤剥材と考えている。 |
| 當佐遺跡 S 1-1 | 陶丸方形・簷元瓦節2km 東西幅3m×南北幅 5.4m、深さ0.05~0.1m | 弥生後期後半 | 4本・正方形・柱頭2.4m 柱頭材4~19cm、長さ8~17cm ノット8番検出 3基には柱沈下防止の水栓孔 | 長い棒円形 東西幅0.75m 15cm以下。下部面5cmある、こ とで柱沈下防止の水栓孔有 | 床面と下部床面間ま での隙の出し 窓があり、この 隙の裏面に壁が現 れており、横木 などが出土 | 床面は柱から床へ傾斜して おり、高張差10cm。 上部と下部床面で2基のピ ットを検出しており、横木か の施設が考へられている。 |
| S 1-2 | 匂1/4を検出 匂形とみられる、検出窓 西幅2.25m・検出清北幅 2.4m、深さ0.1m | 弥生後期後半 | 1本を検出 円形ピット(深さ40cm 柱頭材16.5~20cm、深さ90cm | 検出されず。 | 床面で窓3、高さ 2.2m、[1]の形状 したち、柱頭材が大き い柱頭材(60cm、深さ60cm、等々)を1枚含む。 柱頭材と柱沈下防止の水栓孔 がよく見られる事は炭化物が いたどみられ、壁紙を固定す る機能と考えられている。 | |

調査地周辺焼失居跡一覧表

B)についてはこのような状況を呈している例は他ではみられない。また、太田遺跡例では面積が限られていたためにこの状況が普遍的なものかあるいは特異なものかの判断はつきかねる。現時点ではこの問題は保留しておき、今後の類例の増加をまちたい。

C)茅の炭化材の出土については萱振遺跡のS I - 2で良好な状態で検出されている。茅は住居端の壁際から内に遺存しており、調査担当者が壁溝とする溝より上位に位置していた。また同遺跡のS I - 1でも茅の炭化材が検出されている。このような状況から茅は屋根材として使用されていたものと考えられている。太田遺跡例は垂木材に覆いかぶさる状態で茅の炭化材が検出されているところから、萱振遺跡例と同様に屋根材として用いられたとすることが妥当だといえよう。さらに編み込んだ様な茅については雨水の侵入を防ぐための措置ではなかったかと推定される。D)の「落ち」について参考になるのは城山遺跡例と萱振遺跡例であろう。いずれも住居の壁に添って溝が巡らされていることが報告されている。幅の最も大きなものは城山遺跡 S B 1001で幅が0.5 ~ 0.9mある。小さなものは萱振遺跡 S I - 2の幅0.2 m前後である。断面形状はU字形あるいは逆台形とされている。しかし、用途については見解が異なっている城山遺跡では溝埋土に炭化物がみられないことから基礎工事時の湿気抜きのための溝としており、萱振遺跡では壁板を固定するための壁溝としている。太田遺跡例では溝の全容を検出しておらず、とくに壁側がどのようになっているのかは不明である。しかし、埋土や肩部に若干はあるが炭化物がみられたことから壁溝の可能性が強いと考えている。

E)出土遺物については完形の高杯1点のみであり、遺構検出面より直上部層でも遺物は出土していない。だが、高杯は原位置を動いておらず、直上部層でも遺物がみられないということは建て替えがされていないものといえる。このため完掘していれば当時の土器組成の一端が判明するものと思われる。

以上、他の遺跡の焼失住居との比較を行った。太田遺跡例は他と比べても良好な状態で遺存しているものと思われる。現時点では掘削せずに保存することになっているが、それでも多くの情報を提供できたものといえよう。

6. 備 考

今回の調査では第1調査区で古墳時代後期とみられる遺構面を、第2調査区では古墳時代後期の溝と土坑、そして製塙炉の可能性をもつ焼土坑を検出した。第3調査区においては弥生時代末期から庄内式期の住居跡と考えられる遺構を確認した。太田遺跡はこれまで古墳時代後期と中世の遺構が検出されている。本調査地の南東170mの地点ではM T15型式併行期の祭祀遺構と推定される遺構が検出されておりまた、東180 mの地点では11世紀後半の井戸と溝が検出されている。こうしたことから本調査地でも古墳後期と中世が中心となると予測されたが、思わぬ結果となつた。今後十分な注意が必要であり、また古墳後期の遺構についても資料の増加をまって、確かな位置づけを行っていかなければならない。

(消)

7. 参考文献

芋本隆裕「鬼塚遺跡」「鬼塚遺跡Ⅱ」、若江遺跡発掘調査報告書 東大阪市教育委員会 1979.3

上林史郎他『城山(その2)』(財)大阪文化財センター 1986

原田昌則「萱振遺跡第6次調査(KF88-6)」「萱振遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会 1996

吉田野々「太田遺跡(93-81)の調査」「八尾市内遺跡平成5年発掘調査報告書」八尾市教育委員会1984

4. 恩智遺跡（96-408）の調査

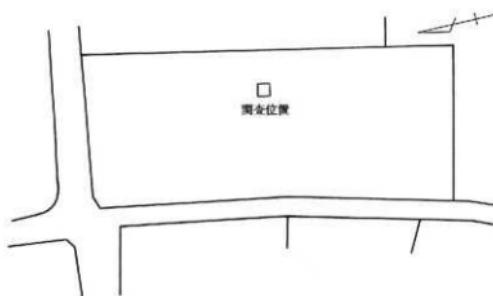
1. 調査地 恩智南町2丁目87-1
2. 調査期間 平成8年9月25日
3. 調査方法 事業予定地内に2m×2mの調査区を1ヶ所設定し、地表下約2.8mまで機械と人力掘削を併用して遺構確認調査を行った。
4. 調査概要 盛土層及び旧耕土以下、地表下0.85m～1.25mまでは、土師器片を含む暗茶褐色小レキ泥粘質土層が続く。おそらく、中世ごろの遺物包含層と考えられる。
そして、青灰色微砂層の直下、地表下2.5mより、弥生土器片を含む暗灰色砂泥粘土層を検出した。出土遺物から弥生時代中期ごろの遺物包含層であると考えられる。層厚は、少なくとも約0.3m以上は続くと推測されるが、今回の掘削深度内では、その範囲は確認できなかった。
5. 出土遺物 図化したのは、1の壺底部1点のみである。調整は、外面・底部をヘラミガキを施し、内面はナデを施す。焼成は良好で、色調は、一部黒変を受けているが、暗黄褐色を呈す。
6. まとめ 今回の調査では、地表下2.5mという深度での弥生時代中期の遺物包含層の検出にとどまり、その包含層の層厚や遺構面は把握できなかった。しかし、現「天王の森」周辺を中心とする恩智遺跡の集落域が、南にも広がることを示す資料の一つとなりうるだろう。今後の調査で、該期の集落域の広がりを把握することによって、恩智遺跡の性格がより明らかになることを期待したい。 (藤井)

[参考文献]

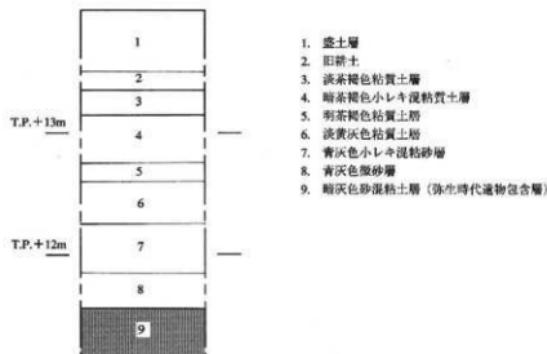
瓜生堂遺跡調査会 1980『恩智遺跡I・II』



第16図 調査地周辺図 (1/5000)



第17図 調査区設定図 (1/800)



第18図 土層断面図 (1/40)



第19図 出土遺物実測図 (1/4)

5. 久宝寺遺跡（95-719）の調査

1. 調査地 久宝寺5丁目36の一部
2. 調査期間 平成8年6月6日
3. 調査方法 住宅建築に伴う調査であり、今回は $1.5m \times 1.5m$ の調査区を設定し、地表下2mまでの土層を確認した。
4. 調査概要 本調査地は久宝寺遺跡のほぼ中央に位置している。また、16世紀に成立した久宝寺寺内町の出屋敷と呼ばれる部分に相当する。このため、近世の遺構面と弥生後期～古墳前期の遺構の存在が予想された。

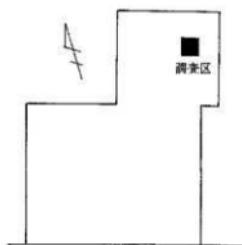
地表下0.75mの暗褐色小礫混粘砂層までは磁器片などが含まれる近世～現代の堆積層であり、暗褐色班灰色粘質土上面、調査区西側で落ち込みを検出する。埋土は暗褐色班灰色粗砂混粘砂で、遺物は出土していない。

次に地表下約1mで水田面とみられる褐色班灰色粘砂を検出した。ここでは高さ11cm、幅約35cmの畦畔状の高まりを検出する。時期は上層の暗褐色班灰色粘質土中には瓦器・土師器・青磁片を確認しており、中世とみられるだろう。

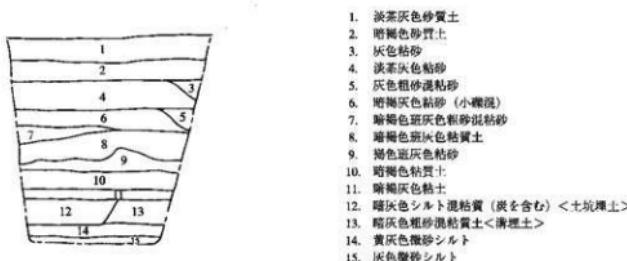
そして、地表下1.4mの暗黄褐色微砂混粘質土上面で、溝と考えられる一方の肩とこれを切っている土坑を検出する。いずれも調査区外に広がっているため全容は不明である。溝は検出部分で深さ25cm、暗灰色粗砂混粘質土を埋土とする。遺物は出土していない。土坑は深さ約30cm、暗灰色シルト混粘質土を埋土とし、炭化物が含まれていた。土坑からは布留式期の土師器が出土している。

また、地表下1.7mにある灰色微砂シルト中で弥生土器後期の土器片がみられることがから確認はできなかったが同時期の遺構面の存在が推定されよう。

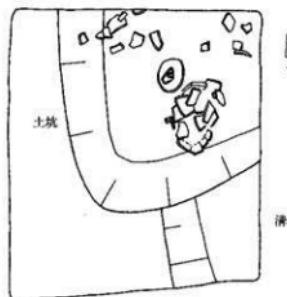




第21図 調査位置図 (1/400)



第22図 東壁土層断面図 (1/40)



第23図 造構平面図 (1/20)

5. 出土遺物

包含層から出土した遺物は1・2で1は6層から出土した炮烙で外側に肥厚した口縁と短い釣をもつ。2は15層から出土した弥生時代後期の甕底部で、突出した平底を有している。

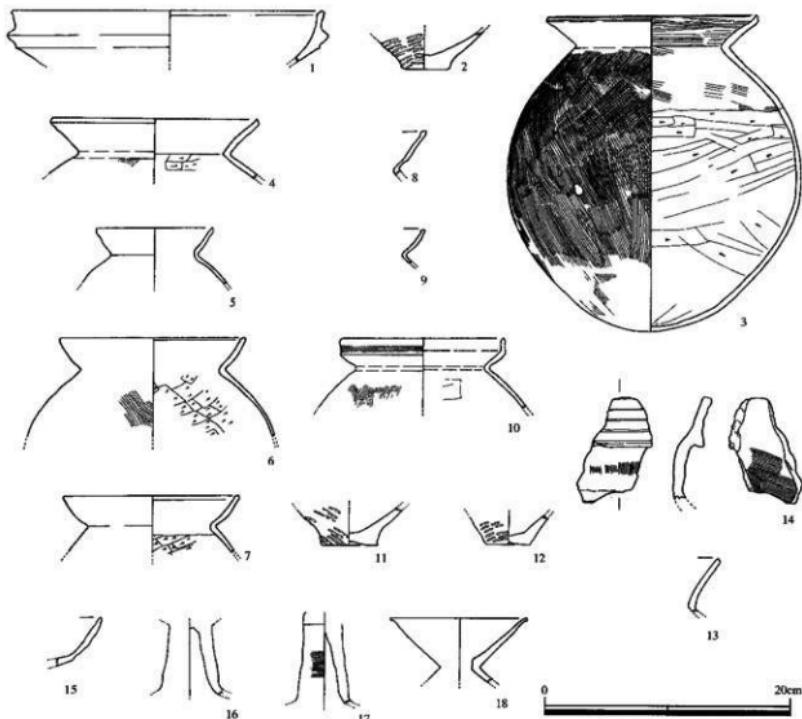
2～17は土坑から出土した遺物である。3・4は庄内甕で、3は唯一完形の遺物で体部最大径が中位以下あり、側面に穿孔を行っている。体部外面は右上がりのタタキの後ハケを施している。内面は口縁から肩部までハケメがみられ、以下をヘラケズリしている。口縁端部に沈線を有し、色調は乳灰色を呈する。播磨型庄内甕。4は「く」の字に鋭く屈曲する口縁から外方に伸びる口縁を有し、端部は上方に摘まみ上げている。色調はいわゆるチョコレート色で河内型庄内甕である。5は布留傾向の小型の甕で、「く」の字状の頸部から口縁は上外方に直線的に伸び、端部は丸くおさめている。6・7は布留甕で、6は上外方に内湾しながら伸びる口縁をもち、端部は内面に肥厚し、内傾する端面を有する。ヘラケズリは頸部下方で止まっている。7は外上方に内湾しながら伸びる口縁をもち、端部は内面に肥厚し、内傾する端面を有する。ヘラケズリは頸部下方で止まる。8・9は布留傾向甕と布留甕で、8は上外方に直線的に伸びる口縁で、端部は丸みをもって肥厚する。9は内湾しながら伸びる口縁で、端部は肥厚し、内傾する端面を有する。10は吉備系甕。屈曲する頸部から外上方に伸びた後直立する口縁で、端部は丸く、外面に沈線が数条めぐる。11・12はV様式系甕の底部である。13は壺口縁。14は複合口縁壺とみられ、口縁外面に凹線が3条巡る。頸部には内外面ともハケメを施す。15は高杯の杯部。16・17は高杯脚柱部でいずれも中空である。18は小型の器台で表面は剥離しているが、内外面の細かいヘラミガキがわずかにみられる。

6. 土器の胎土からの2・3の問題

これらの出土遺物のうち、土坑出土の3～18の16個体についてについて、奥田尚先生に胎土観察をして頂いた。詳細については付論2「土器の表面に見られる砂礫」を参照していただきたい。ここではそこから得られた結果を整理して若干の考察を行ってみたい。

各器種の砂礫種から得られた胎土で河内のものは4の河内型庄内甕と11のV様系の甕底部のみである。最も多くの遺物が運ばれて来ているのは加賀南部で、固化できた布留系の甕6個体のうち5個体(5～9)を占める。布留甕の成立に際して加賀地方が重要な鍵となる可能性を示唆していると捉えることもできよう。なお残り1個体は播磨とされている。こうしたことから完形の播磨型庄内甕1がすでに庄内甕から布留系甕への移行が始まっているこの時期に存在していることは播磨が土器作りではやや遅れた地域となりつつあることを示しているといえよう。また高杯(15)や器台(18)などの精製された器種が土師里とされているのは次代の土器や埴輪などの生産を考えるうえで興味深い結果である。

さてこうしてみると、土坑出土の土器は器種によって、産地が異なっていることに気付く。庄内甕や布留甕といった甕類は河内產とされた1点を除いてすべて、畿内以外から持ち込まれている。これに対して、高杯や小型精製三種の一つである器台が土師里である。すなわち、多器種を一つの地域で生産して運び込むのではなく地域によって生産する器種を分けていたか、あるいは器種によって搬入する地域を限定していたものと推定することができる。



第24図 出土遺物実測図 (1/4)

これまで、述べてきたことはこの土坑から得られた情報をもとにして導き出した解釈である。これがすべての遺跡と合致した状況かどうかは、もう少し他の遺跡の事象が増加した後に再度検討してみたい。

7. 備 考

近世の遺構は明確なものではなかったが、ほぼ当初に予想した遺構・遺物が検出できた。寺内町ができるまでの中世段階には当地が耕作地として利用されていたことは興味深い結果である。また、周辺でも確認されている布留式期の生活面が拓がっていたことは、集落の位置を考える上でひとつの材料が提供できたといえる。特に土坑状遺構から出土した遺物は在地よりも他域産のものが多く、この時期、当地域への土器の搬入が器種によって分けられていたことは布留式期以降の体制を考えるうえで、貴重な資料が得られた。

(消)

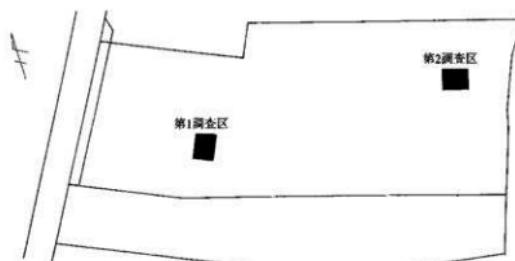
6. 郡川遺跡（96-275）の調査

1. 調査地 黒谷2丁目1391の一部、142の一部
2. 調査期間 平成8年9月12日
3. 調査方法 事業計画予定地に2m×2.5mの調査区を2ヵ所設定し、各々地表下0.6~0.8mまで掘削して遺構・遺物の有無を確認した。
4. 調査概要 第1調査区－表土（層厚約0.15m）を除去すると淡灰色微砂混茶灰色粘砂があらわれる。この上面で、土坑状遺構を検出する。遺構は大半が調査区外へ伸びるため全容は不明。検出長辺約1.27m、短辺約0.43mの長方形状で、西に向かうにつれ深くなり最深部は0.33mであった。遺物は北西隅にかたまって見つかっており、調査区外にも遺存していたが、底部より2個体以上があるものと推定される。壺(1)は弥生中期新段階に比定されるが、内外面とも剥離が著しく調整は不明。口径19.3cm、推定器高36.9cmで色調は灰白色を呈す。壺底部(2)も調整は不明。底径6.7cm。壺口縁部(3)は端部に刻み日をもつ。
- 遺構面以下は礫混粘砂が0.45m堆積し、さらにこの下部には微砂の堆積が確認できた。
- 第2調査区－山側に設定したため、第1調査区とは層序が異なり、礫混じりの層はみられない。地表下0.55mまでは微砂～シルトが谷方向へ緩い傾斜をえがき堆積している。以下、拳大の礫が混じる細砂層をはさみ、粘質土を確認するが、遺構・遺物はみられなかった。
5. 出土遺物 東部山麓では高安古墳群など古墳時代以降の遺跡は多く検出されており、弥生時代も後期が主体に検出されている。しかし、山麓全体の遺跡の性格については大規

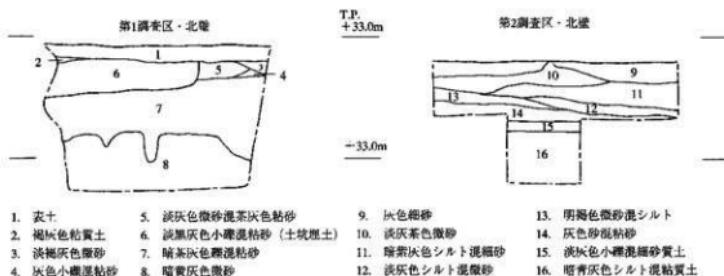


第25図 調査地周辺図 (1/5000)

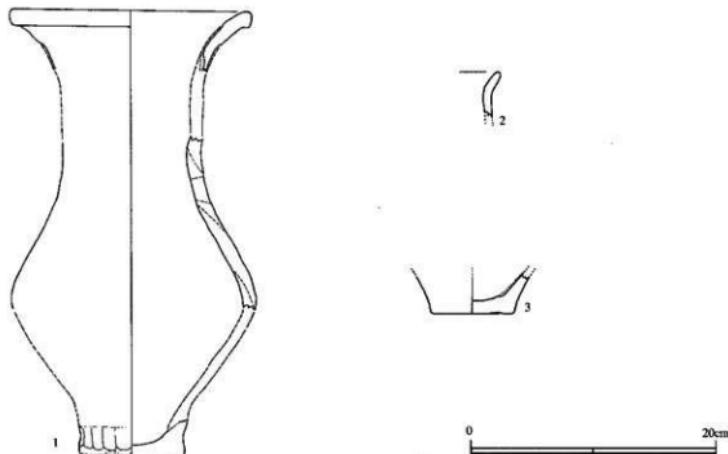
模な調査が少ないとこもあってかならずしも明確ではない。これまでも弥生中期の土器は遺跡内では出土していたが、調査地周辺では確認されていなかった。今回は小面積ではあるが遺構を検出できたことは成果であった。
(消)



第26図 調査区位置図 (1/500)



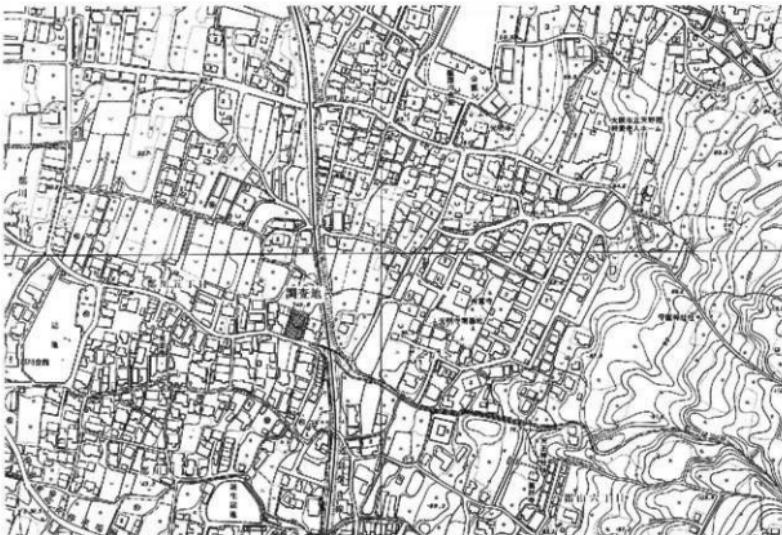
第27図 土層断面図 (1/40)



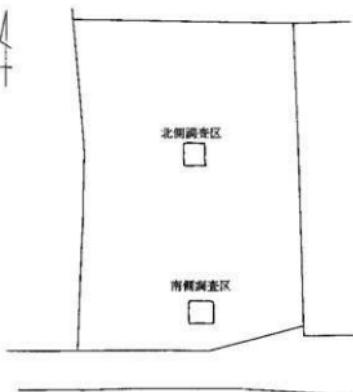
第28図 出土遺物実測図 (1/4)

7. 郡川遺跡（96-497）の調査

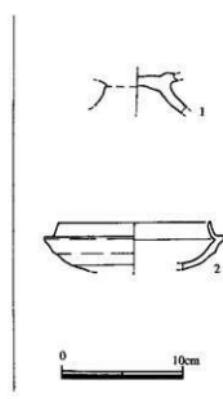
1. 調査地 八尾市郡川5丁目7~10
2. 調査期間 平成8年10月29日
3. 調査方法 排水管の埋設に伴い、施工予定地の北と南に約2m四方の調査区を設定し、地表下1.0m前後まで、重機と人力を併用して掘削した。
4. 調査概要 北側調査区では地表下0.3m前後の茶灰色小礫混砂質土層上面で、厚さ0.2m前後の茶褐色斑淡灰色砂層を埋土とする遺構を検出した。この遺構の埋土には須恵器片、土師器片、瓦器片が含まれ、鎌倉時代の遺構とみられる。さらにこの下の茶灰色小礫混砂質土層には須恵器片、土師器片、瓦器片が、さらにこの下の灰白色粘質土層にも土師器片が含まれていた。南側調査区では、地表下0.6m~1.07mで須恵器片、土師器片、瓦器小片を含む、灰色大礫混粘性砂層を確認した。
5. 出土遺物 1は南調査区の灰色大礫混粘性砂層で出土した、須恵器の短脚高杯の脚部片である。残存高は3.2cmを計る。調整はロクロナデで、坏部内面には仕上げナデを施す。色調は灰色~淡暗灰色を呈し、焼成は硬質、胎土は砂粒を含み粗い。2は北側調査区の茶灰色小礫砂質土層から出土した、須恵器の坏身である。口径12.4cm、残存高は4.0cmを計る。坏部は坏高の4分の1までにロクロヘラケズリを行う。色調は淡暗灰色を呈し、焼成は硬質、胎土は砂粒を含み粗い。2の坏身はTK10型式、6世紀中頃に位置付けられるものとみられる。
- 6.まとめ 本調査地では鎌倉時代の遺構面を確認した。また古墳時代後期の包含層が近辺に存在することを示唆する遺物が出土したことにも注意される。 (吉田野々)



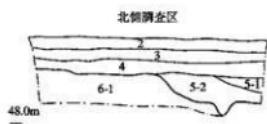
第29図 調査地周辺図 (1/5000)



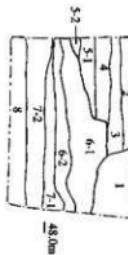
第30図 調査区設定図 (1/400)



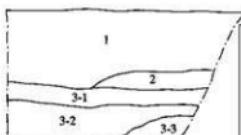
第31図 出土遺物実測図 (1/4)



北側調査区



南側調査区



- | 北側調査区 | 南側調査区 |
|--|---|
| 1. 灰色大理混砂 (現代カクラン) 2. 黄灰色粘土 3. 灰色粘性砂質土 4. 灰白色砂層 5-1. 茶灰色混砂灰白色砂] 道構造土 5-2. 茶灰色混砂灰白色砂 6-1. 茶灰色小礫混砂質土 (須恵黄片、瓦器片含む) 6-2. 茶灰色小礫混砂質土 (硬質、瓦器片含む) 7-1. 棕褐色灰白色粘質土 (Fe多) 7-2. 棕褐色灰白色粘質土 (植物遺体、炭化物混入) 8. 灰白色粘質土 | 1. 灰黄色砂 (腐土) 2. 灰色粘性砂質土 3-1. 灰色火葬混結性砂 (粘性多) (土師器片、須恵器片、瓦器片含む) 3-2. 灰色火葬混結性砂 (瓦瓦立状) 3-3. 灰色火葬混結性砂 (色調暗い、砂多) |

第32図 調査区土層断面図 (1/40)

8. 小阪合遺跡（95-735）の調査

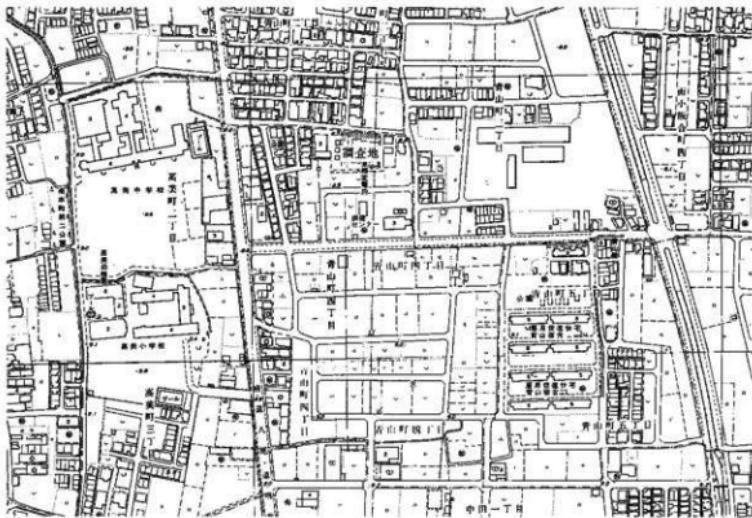
1. 調査地 八尾市青山町4丁目1番地5～6

2. 調査期間 平成8年7月22日

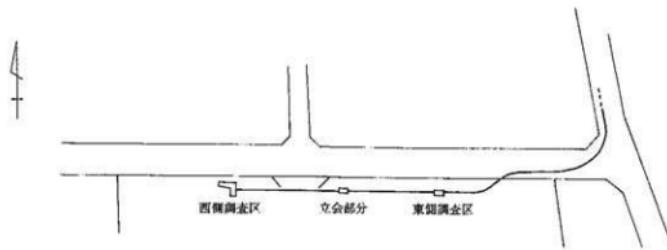
3. 調査方法 地中配電管路埋設に伴い、施工予定地の西と東に調査区を設定し、地表下1.7～2.0m前後まで、重機と人力を併用して掘削した。また調査区の中間地点で立会調査を行った。

4. 調査概要 西側調査区では地表下1.05～1.4m前後で、須恵器片、土師器片を含む茶灰色微砂質土、茶灰色砂質土層を確認した。さらに茶灰色微砂質土層上面、TP 7.8m前後で、深さ0.02～0.13m前後の南北方向の溝とみられる遺構を検出した。東側調査区では地表下0.85m～1.0mで土師器小片を含む茶灰色粘砂層、茶灰色粘質土層を確認した。またこれらの土層直下の淡黄褐色微砂質土層上面、TP 7.84mで、ピット及び土坑状の遺構を検出した。ピットは径0.1m前後、深さ0.04m前後を測り、埋土は暗灰褐色粘砂層である。土坑状遺構は南西のコーナーにかかる分を検出したのみだが、南辺は1.0m以上を測る。深さは検出部分で0.05mを測り、埋土は灰褐色粘砂層である。立会調査では地表下1.1m～1.4mで土師器片を含む暗灰褐色小砾混粘質土層を確認した。さらに地表下1.6m～1.8mの淡青灰色微砂質粘砂層中より庄内式期の高坏を検出した。

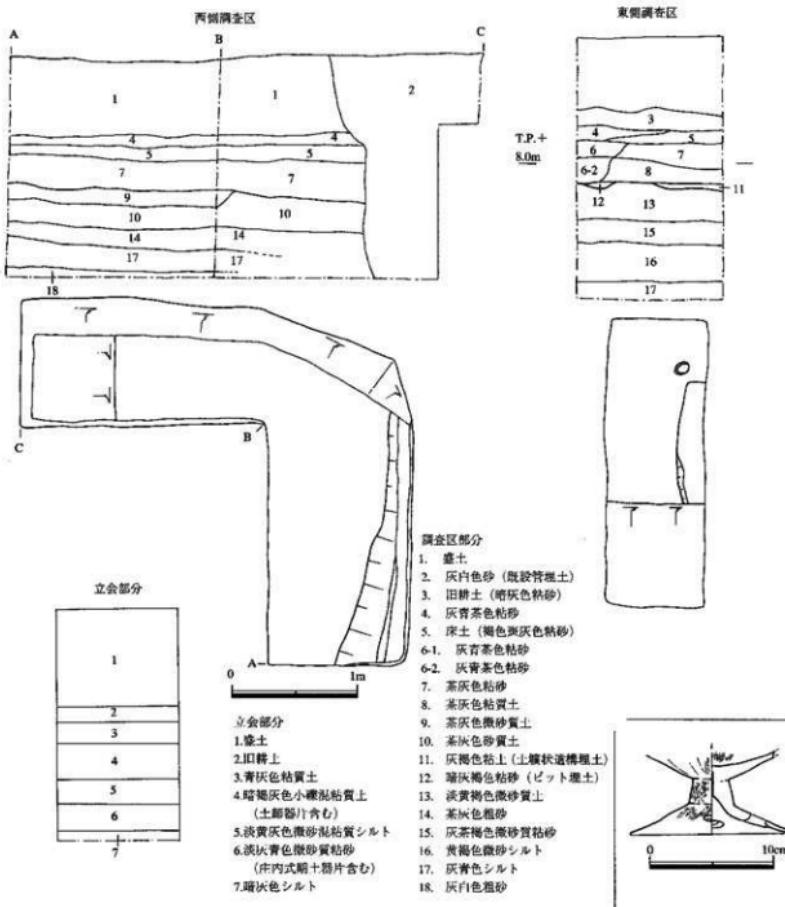
5. まとめ 今回の調査では、地表下1.0m前後で古墳時代中期以降の遺構面を、地表下1.6m～1.8mで庄内式土器を含む土層を確認した。本調査地周辺を含む周辺一帯は、古墳時代中・後期の集落域の拡がりが確認されており、本調査はその一端を検出したものとみられる。



第33図 調査地周辺図 (1/5000)



第34図 調査区設定図 (1/1000)



第35図 調査区土層平・断面図 (1/40)

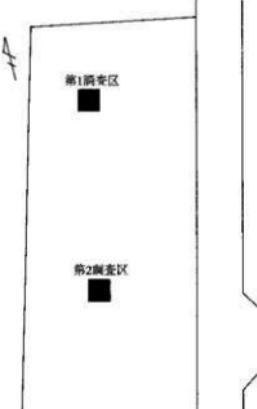
第36図 出土遺物実測図 (1/4)

9. 小阪合遺跡 (96-407) の調査

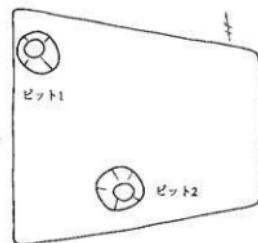
1. 調査地 青山町1丁目99・100番地
2. 調査期間 平成8年10月7日
3. 調査方法 事業計画予定地に2.6m×2.6mの調査区を2カ所設定し、それぞれ地表下2.2~2.5mまで掘削して土層を観察し、遺構・遺物の有無を確認した。
4. 調査概要 現況は水田として利用されており、道路地盤とほぼ同じレベルであった。表土は第1調査区で約0.45m、第2調査区で約0.4mあり、第2調査区ではこの下に旧耕作土(約0.1m)を確認している。
- 第1調査区 遺物は地表下0.67mの淡灰褐色粘砂からみられるが、プライマリーな中世の包含層は地表下約1.2mにある暗灰色粘土(層厚約0.18m)である。この層は上面で北から西方向への茶灰色粗砂を埋土とする流路があり、一部が削られている。包含層からは土師器小皿、瓦器輪(尾上編年II-2期からIII-1期)、羽釜に混じって須恵器片、サヌカイト片、弥生土器小片が出土している。中世遺構は地表下約1.45mで南壁付近で落ち込み状遺構が検出している。埋土は暗灰色砂混粘質土で、わずかに瓦器、土師器片を含んでいた。この中世期の遺構は灰色シルトを切り込んでいたが、北壁から西壁周辺では庄内期~布留期の遺物が出土しており、中世以降に同時期の土層が削平されていることがわかった。
- 地表下約1.3mには黄灰色シルト(層厚約0.05m)がある。この上面には炭混じりのやや粘質のシルトが極薄く(約0.02m)堆積しており、庄内期~布留期の甕、高杯脚柱部・杯部、壺などの破片が出土した。また、下部の灰色シルト(層厚0.04m)にも僅かに土器片が含まれていた。



第37図 調査地周辺図 (1/5000)



第38図 調査位置図 (1/600)



第39図 第2調査区遺構平面図 (1/40)

この炭混じりの堆積層は近世の流路と中世包含層に削平されてることから、本来の遺構面となるかどうかはここだけでは判断できないが、後述する第2調査区ではやや高いレベルで同時期の遺構面を確認しており、その可能性がある。

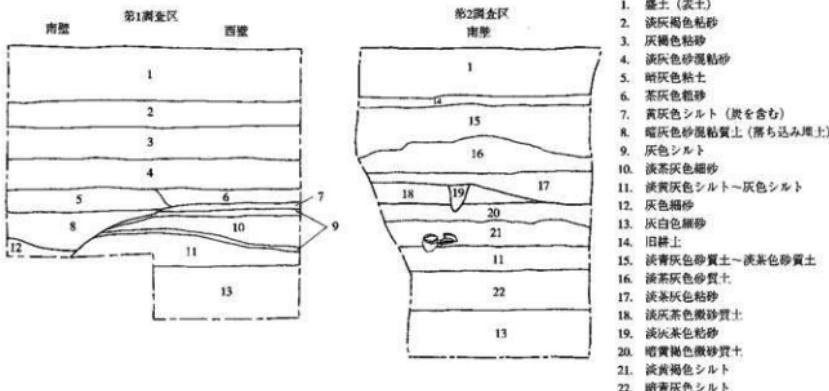
なお地表下1.4m以下では細砂～シルト～細砂が堆積しているが遺物などはみられなかった。

第2調査区 地表下1.03mの淡茶灰色粘砂では土師器片が見つかっており、この下部の地表下約1.1mの淡灰茶色微砂質土上面ではピット1基を検出した。その時期は、明確ではないが近隣の調査から中世と考えられよう。

また、ピット構築層（層厚0.18m）は布留式期の包含層であり甕口縁部などが出土している。そして、地表下1.25mの暗黄褐色微砂質土ではピット2基を検出した。このピットにはいずれも柱痕がみられた。ピット1は長径46cm×短径42cm×深さ31cmのほぼ円形を呈し、柱痕直径は17cmを測る。埋土は暗紫灰色シルト混粘土で、庄内甕片、高杯脚部片が出土している。ピット2は長径48cm×短径46cm×深さ33cmの円形を呈し、柱痕直径は16.5cmを測る。埋土は暗淡茶灰色粘砂で、土師器小片が出土している。2基の柱間は約1.75mであった。

さらに、この布留式期のベース層である暗黄褐色微砂質土中には庄内甕やV様式系の甕の小片が含まれている。しかし、下部の淡黄褐色シルト上面で遺構を検出することはできなかった。ただ遺構の切り込みはみられなかったが、層下半部で北島池下層式に位置づけられる甕がほぼ完形で3点が出土した。

いずれも完形に近いこと、2次焼成を受けた使用痕のある甕



第40図 土層断面図 (1/40)

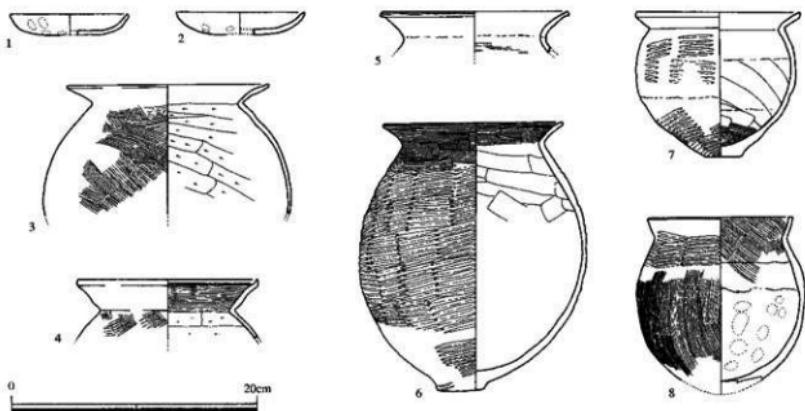
(8) の存在、またススの付着が顕著であること、そして層中から他の遺物が出土していないことなどから、住居跡内の土器とも考えられるがその痕跡を捉えておらず、可能性を指摘するに留め、ここでは土器集積としておきたい。この場合土器集積のベースとなるのは淡黄灰色シルトであろう。地表下約2.15m以下では細砂とシルトの互層となり、遺構・遺物は確認できなかった。

5. 出土遺物

ここでは、淡黄褐色シルト層より出土した完形に近い土器を中心に8点の土器を図化しておく。1～5が第1調査区出土、6～8が第2調査区出土遺物である。

1・2は中世包含層より出土した土師皿でいずれも外面をナデと指押さえの痕跡がみられる。1は復元口径10.4cm、器高1.85cm、2は復元口径9.3cm、器高1.7cmを測る。3・4の庄内甕は黄灰色シルト上面に堆積する炭混シルトから出土した。3は復元口径16.4cmで、胴部最大径は中位以下にあり、口縁は外上方に外湾気味にのびる。外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。淡灰褐色を呈す。4は復元口径14.6cmで、上外方にのびる口縁は端部が摘まみ上げられている。外面はタタキ後ハケ、内面は横方向のヘラケズリ、口縁部はハケである。暗茶褐色を呈す。5は灰色シルトから出土した甕口縁部で、復元口径15cm。口縁端部は沈線が巡る。外面はナデ、内面は頸部付近をヘラ状工具でナデている。

6～8は土器集積の甕である。6は口径14cm、器高21.9cm。胴部最大径は中半にあり、体部の球形化が進んでいることが窺える。底部は縁が丸みをもち、低い。体部外面はタタキ、内面はイタ状工具によるナデ調整。口縁部は布あるいは革を用いたナデ。胴部下半部の内外面ともにススが付着している。7は復元口径13.1cm、器高12cm。小型の甕で3分割成形であり、最大径は口縁部にある。頸部は「く」の字状に近い屈曲となっている。体部外面はタタキ、内面は底部はハケ、中位から頸部



第41図 出土遺物実測図 (1/4)

にかけてはイタ状工具による鋭いナデを施す。8も3分割成形による小型の甕であるが、6よりも球形化が進んでいる。底部の形状は加熱による剥離のため不明である。また、スヌの付着が確認できる。口縁部はタタキ出し技法によって頸部の屈曲を作り出す。外面は頸部付近はタタキ、中位から下はハケナデで指頭痕が残る。内面は口縁から頸部にかけてはハケ、体部は指頭痕がみられる。

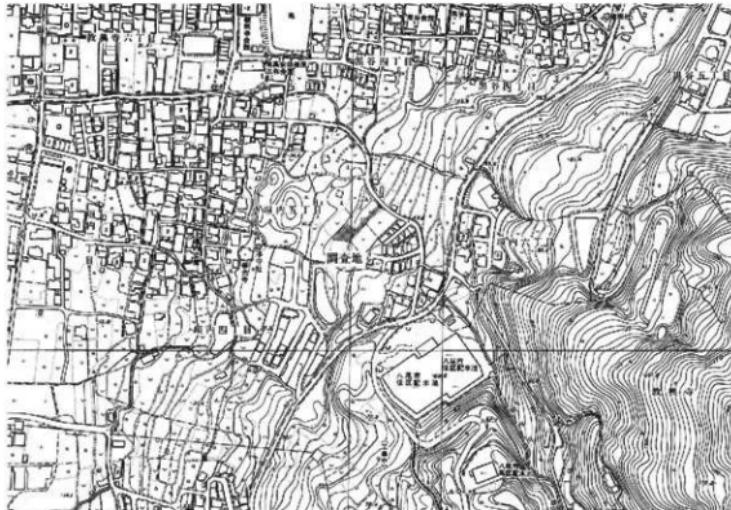
6. まとめ

今回の調査では、第1調査区で中世の落ち込み状遺構と庄内～布留式期の包含層を、第2調査区では中世に相当するピット1基、布留式期のピット2基、そして弥生末期の土器集積を検出した。本調査地に西隣では平成7年度の調査で、中世のピット群と溝・井戸、また古墳時代中期の土坑とピット、弥生末期の溝が確認されている。近隣の調査でも中世遺構面は検出される比率が高く、集落の一角を構成する地域である。古墳時代中期、特にTK23型式併行期の遺構が調査地より西で見ついているが、今回の調査ではこの遺構面は確認できなかったため、集落域から離れた場所であることが推定される。そして、古墳時代庄内～布留式期は、西側で方形周溝墓が検出されており、今回は柱穴とみられるピットが検出されたことから、その墓域に関連した集落であることが示唆される。さらに弥生末期の遺構もやはり西側で多くみられ、埋土に完形の土器を密に含み、土器を投棄したとみられる溝が検出されている。本調査では土器集積であり、その胎土から在地産とはいえないものを含んでいることから、溝との関連を押し進めることによって集落の成り立ちを考える資料となる。

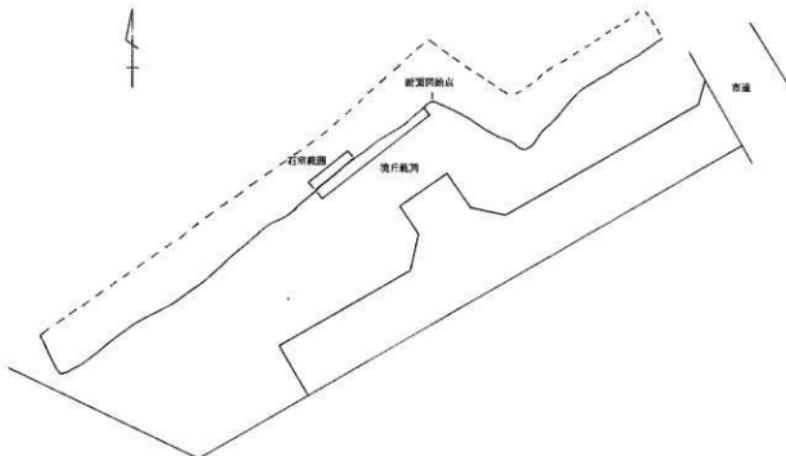
なお、遺物の一部について曙川小学校の奥田尚先生に胎土の鑑定をしていただきたい。詳しくは85頁の付論2「土器の表面にみられる砂礫」を読んで頂きたい。（消）

10. 高安古墳群 (95-586) の調査

1. 調査地 八尾市垣内5丁目63.65
2. 調査期間 平成8年1月30日.31日
3. 調査方法 施工予定地内の排水管設置部分の確認を行う予定であったが、現地に調査にはいったところ、既に施工予定地の北側が擁壁の施工に伴い、深さ2.6m、総延長約65mにわたっての切土がなされていた。このため急遽切土断面の精査を行ったところ、横穴式石室の一部とみられる石材と須恵器の甕等を確認した。切土工事は無届の状態で既に終了していたため、やむを得ずこれ以上の切土のないことを確認したうえで、土層断面図の作成及び遺物の採集を行った。
4. 土層断面 状況 地表下1.2m~1.3mまでは現代盛土層であり、この下に厚さ10cm前後の耕作土層、さらに下には厚さ10~30cm前後の床土とみられる褐色砂質土層がある。この下にはA地点から南西方向へ1.0~1.2m付近で、古墳の墳丘構成層とみられる茶灰色大礫混砂層、茶灰色中礫混砂層が存在する。この土層は断面図始点から南西方向へ約1mの地点で出現し、南西方向7.9mの地点で最も高くなる山状を呈している。A地点から南西8mの地点では、高さ1.0m、幅0.7mの石（以下側壁石材Aと称す）が露出しており、この石の南西側は幅3.6mにわたり、大礫や押圧された状態の土器の混入する暗黒灰色大礫混砂が堆積する。側壁石材Aの南西すぐ右手には倒れた状態の須恵器の甕があり（A地点）、またこの甕より0.35m高い位置の右手には土師器の壺が小礫中に混入した状態で出土した（D地点）。さらに側壁石材Aの南西2mの地点には長さ0.6m、幅0.4mの石（以下側壁石材Bと称す）がある。これの右手では押圧された状態の土器片群を2ヶ所（B地点、C地点）を確認した。さらに



第42図 調査地周辺図 (1/5000)



第43図 調査区設定図 (1/400)

側壁石材Bから南西方向へ3.6mの地点で暗黒灰大砾混砂層が、地山ともみられる墳丘構成層の明茶灰色粘砂層から切り込む部分を確認した。さらにこの土層は大型石材付近から南西方向に向かって低くなり、この上に中世の遺物包含層とみられる明灰茶色砂質土層、暗灰色砂質土層が堆積している。このことから当墳の石室は中世以前に削平され、擾乱を受けているものと考えられる。大型石材が現状を見るかぎりでは南西下方の方向に倒れているようにみえ、同じく大砾の長軸が南西下方の方向を向いている。このことから、石室は南西下方の方向に、力を受けて破壊されたものと考えられる。

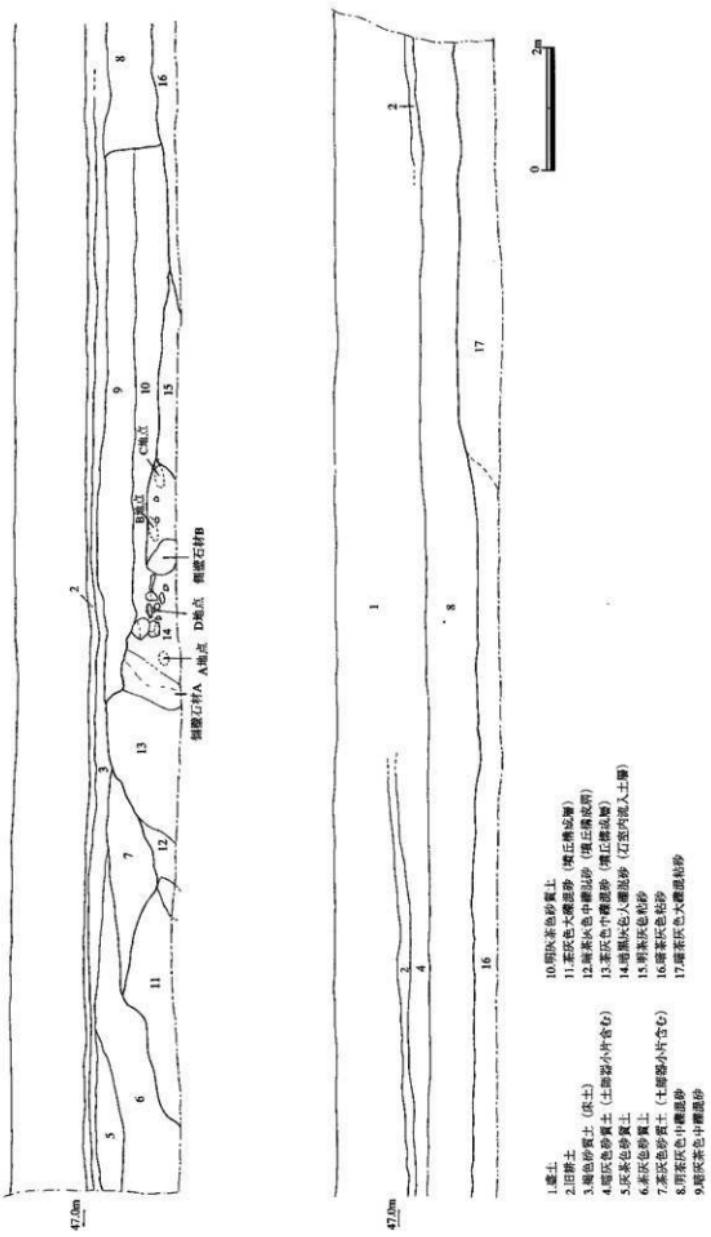
5. 出土遺物

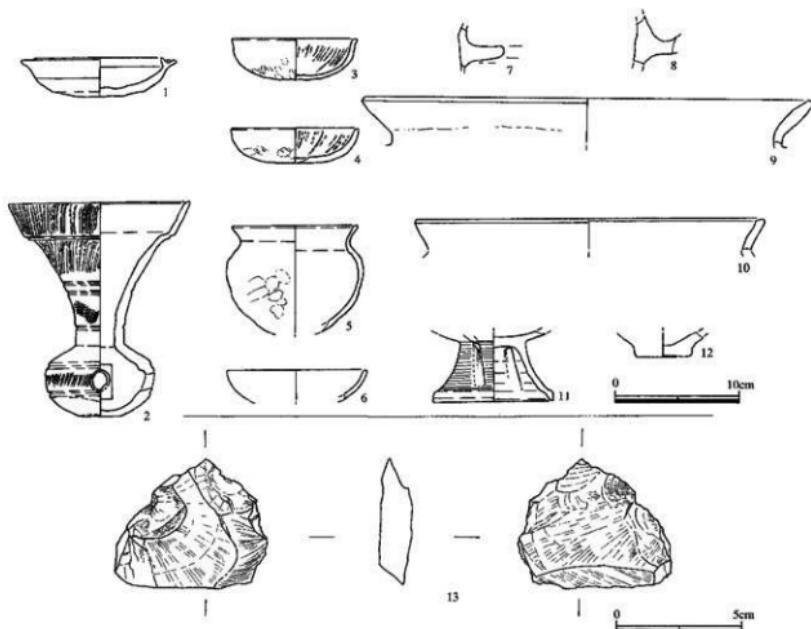
1～5はA地点から出土した。1は須恵器の坏身、2は須恵器の甌、3・4は土師器の坏、5は土師器の甌である。2の甌は石室側壁石材Aのすぐ南西側で、一部が断面に露出した状態であった。6はD地点から出土した土師器の坏、7はB地点から出土した土師器の羽釜の一部である。8～13は断面の石室付近から出土した。8は土師器の鍋片、9、10は土師器の羽釜片、11は須恵器の短脚高杯、12は弥生土器の底部片、13はサヌカイト製の石器の剥片である。須恵器の型式はおおよそTK209型式に位置付けられる。

6. まとめ

A地点から南西1.0mの墳丘構成層のたちあがり部分と側壁石材A・B間の中心部分との間の距離は約8.5mを測る。このことから墳丘の大きさは直径17m以上を測るものと考えられる。墳丘は断面の土層をみる限りでは地山の削りだしで築造さ

第44図 調査地土層断面図（1／80）





第45図 出土遺物実測図 (1~12、1/4、13、1/2)

れている。さらにまた側壁石材AとBが石室の両側壁とみなせるならば、石室の幅は約2mを測るものとなる。さらに出土した須恵器から当墳の築造時期は、6世紀後半頃とみられる。また現況の1/2500の地図等から、当墳は北北西にのびる尾根上に立地していたものと考えられる。調査地のすぐ東側の道は水路が通っており、谷状の地形である。当墳の南西の垣内墓地内にも古墳が確認されている。垣内の一带は北西方向に下る比較的緩やかな傾斜地形であり、ここにはかつて多くの後期古墳が築造されていたものと思われる。さらに石室付近からは弥生土器片、石器剥片が出土しており、弥生時代の包含層が周辺に存在するものと考えられる。また、中世段階で古墳を削平して、なんらかのかたちで利用されたこともわかった。

今回の調査は文化財課が現地に訪れた時点で既に無届着工による大規模な切土工事がなされた後であった。事前に試掘を行ができるれば、保存対策を講じることもできたものであり、はなはだ残念でならない。当古墳を含む高安古墳群は全国で有数の群集墳でありながら、近年、激減している一途を辿っている。今後、埋蔵文化財の保存に対する理解を求めていくとともに、今回のようなケースを未然に防ぐための保存対策の強化の必要性を痛感するものである。
(吉田野々)

| 番号 | 出土地点 | 種類 | 器種 | 部位 | 法量 | 残存度 | 焼成 | 色 滴 | 胎土 | 調 整 | 備 考 |
|----|------|----------|-----------|------|----------------------|--------------|---------|-------------|-----|--|-----------|
| 1 | A 地点 | 須恵器 | 杯身 | | 口径: 10.0 器高: 3.2 | 1/8 (口縁) | 軟 | 淡灰色 | 良 | 外: 底から 1/2 ロクロヘラケズリ 内: ロクロナデのち仕上げナデ | |
| 2 | A 地点 | 須恵器 | 翫 | | 口径: 14.5 器高: 17.4 | ほぼ 完形 | 硬 | 灰色 | 普通 | 外: 上半、ヘラ状工具による線状文様 下半ヘラ描き列点文、底部 ヘラケズリ 内: ロクロナデ | |
| 3 | A 地点 | 土師器 | 壺 | | 口径: 10.2 器高: 3.4 | 完形 | やや 軟 | 淡暗褐色 | 良 | 外: ヘラケズリのちユビオサエ 内: 放射状暗文(口縁部ヨコナデ) | |
| 4 | A 地点 | 土師器 | 壺 | | 口径: 10.5 器高: 2.9 | 1/4 (口縁) | 軟 | 淡橙赤色 | 良 | 外: ユビオサエ、ヘラケズリ 内: 放射状暗文(口縁部ヨコナデ) | |
| 5 | A 地点 | 土師器 | 壺 | | 口径: 10.0 器高: 8.7 | 1/12 (口縁) | やや 軟 | 淡橙赤色 | 精良 | 外: 下半、ヘラケズリ(?)のちユビオサエ 内: 下半、ナデ(口縁部ヨコナデ) | |
| 6 | D 地点 | 土師器 | 壺 | | 口径: 11.4 残高: 2.4 | 1/5 (口縁) | やや 軟 | 乳白色 | 精良 | 外: ヨコナデ 内: ナナメナデ | |
| 7 | B 地点 | 土師器 | 羽釜 | 鋤部 | 残高: 3.2 | | やや 硬 | 暗茶褐色 | 粗 | 外: ヨコナデ 内: ナデ | |
| 8 | 石室付近 | 土師器 | 把手付 鍋 | 鋤部 | 残高: 4.0 | | 非常に軟 | 淡橙色 | やや粗 | 外: ユビオサエ 内: ナナメナデ | |
| 9 | B 地点 | 土師器 | 羽釜 | 口縁部 | 口径: 36.1 残高: 3.9 | 1/10 (口縁) | やや 軟 | 茶褐色 | やや粗 | 外: ナナメヘヨコナデ 内: ヨコナデ | |
| 10 | 石室付近 | 土師器 | 羽釜 | 口縁部 | 口径: 28.1 残高: 2.6 | 1/15 (口縁) | 軟 | 淡橙色 | 精良 | 外・内: ヨコナデ | |
| 11 | 石室付近 | 須恵器 | 短脚高 杯 | 壺～脚部 | 脚径: 9.9 残高: 5.7 | 1/4 (脚部) | 硬 | 灰色～ 淡暗灰色 | 普通 | 外: カキメ 内: ロクロナデ | 自然釉付 着 |
| 12 | 石室付近 | 弥生土 器 | 壺また は壺 | 底部 | 底径: 4.3 残高: 2.0 | 1/3 (底部) | 硬 | 暗赤橙色 | やや粗 | 外: ヨコナデ 内: 不明 | |
| 13 | 石室付近 | 石器 | 剥片 | | 最大長: 5.2 最大厚: 1.4 | | | | | | サヌカイト製 |

11. 高安古墳群（95-622）の調査

1. 調査地 郡川6丁目207.208.216
2. 調査期間 平成8年2月13日～21日
3. 調査方法 上記調査対象区域内において、遺構の有無を確認する目的で1.5m幅のトレンチを4本設定し、機械掘削を行った後精査を実施し、トレンチ断面図の作成及び写真撮影を行い、検出遺構については詳細に記録を作製し、遺物の取り上げを行った。また、調査に並行して現況の地形測量も合わせて実施した。
4. 調査概要 第1トレンチ：調査地南側で、南北方向に長さ9mの調査区を設定した。調査区北側では、表土下60cmで地山に達し、この地山面は、南へなだらかに下がっていく。第2トレンチ：調査地南側で、東西方向に長さ25mの調査区を設定した。調査区東側では、表土直下地山となり、東端より7m西側で地山面が急激に落ち込んでいる。また、調査区西側では、南壁の断面に土器を伴う遺構が見られたため、拡張を行って精査を実施した。その結果、銅付壺棺を中心に石室状に配石した遺構らしいことがわかつた。この遺構は、北半分を調査による機械掘削により破壊してしまったが、小石で幅が40cmの石室状の空間を作った後銅付壺を据えている。残念ながら壺の上部の状況は明確に出来なかったが、機械掘削の上げ土より二個体分の銅付壺の口縁部を確認出来ることから、合わせ口の壺棺であった可能性が高い。また、上げ土より須恵器の壺蓋が検出され、副葬または供獻品であったと考えられる。
第3トレンチ：調査地北側において、東西方向に長さ29mの調査区を設定した。調査区の東側は、旧の宅地造成による搅乱層の直下が地山となっており、調査区西側旧宅地の外は、地形に沿って急傾斜で下がっていく。第4トレンチ：調査地北側

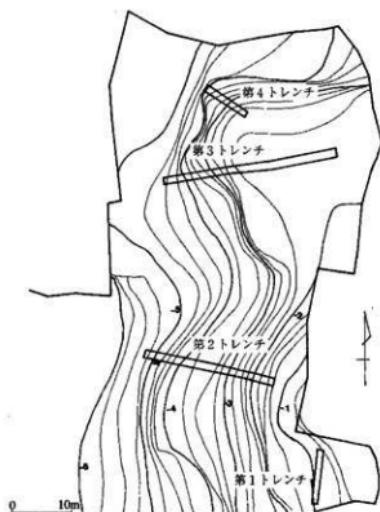


第46図 調査地周辺図 (1/5000)

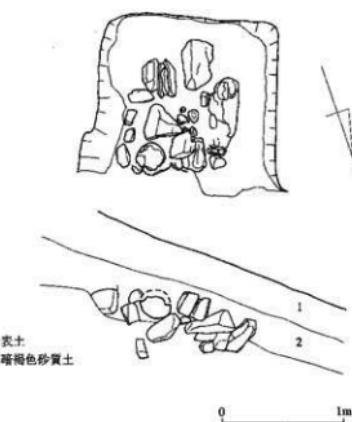
において南北方向に長さ8mの調査区を設定した。急傾斜で落ち込む地山上に旧宅地造成時の流入土が厚く堆積する。

5. 調査結果

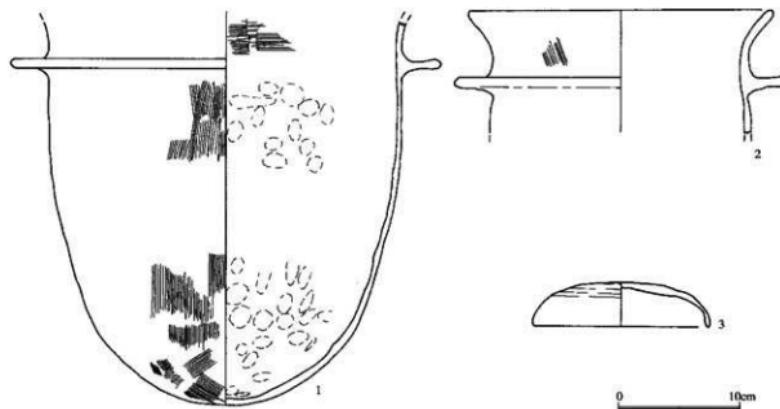
4箇所の調査区4で確認した遺構と言えるものは、第2トレンチで検出した古墳時代後期の合わせ口の壺棺と思われるものではあるが、時期的に調査地周辺に分布する古墳群の時期に一致している。また、東の隣接地に横穴式石室を有する古墳が確認できるが、それに伴うものとしては、位置が離れすぎており、敷地内にもかつて破壊された古墳が存在している可能性は否定できない。
(米田)



第47図 地形図 (1/800)



第48図 遺構図 (1/40)



第49図 遺物実測図 (1/4)

12. 東郷遺跡（96-683）の調査

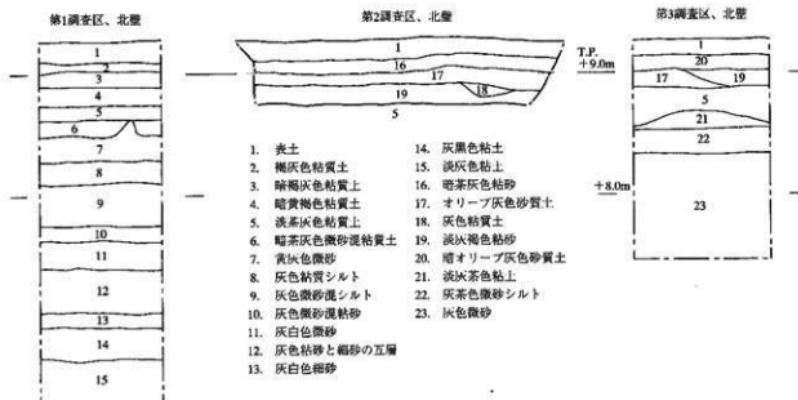
1. 調査地 東本町4丁目26-1の一部、35-3
2. 調査期間 平成8年3月7日
3. 調査方法 事業計画地に第1調査区（3m×3m）と第2調査区（2.5m×2.5m）を設定し、遺構の検出に努めた。この結果第2調査区で土器溜まりを検出したため、その拡がりを確認するため、さらに第3調査区（2m×1.5m）を設定した。
4. 調査概要 現況は水田として利用され、付近道路地盤より、0.6～0.7m低くなっていた。第1調査区－表土（層厚約0.15m）を除くと褐灰色～暗黄褐色粘質土があり、この層間約0.45mで瓦器および土器師が細片であるが確認できた。そして下部の淡茶灰色粘土では遺物は含まれず、これより下では微砂～シルトが続くため、遺構は検出できなかったが淡茶灰色粘土が中世以降の遺構面であると推定される。
- 第2調査区－地表下0.35mの淡灰褐色粘砂層より遺物が確認でき、地表下0.55mの淡茶灰色粘質土上面で西南から北東方向に一列に伸びる庄内期の土器溜まりを検出した。
- 第3調査区－第2区より南へ6mの地点で、土器溜まりを検出した淡茶褐色粘質土の続きを確認するため設定した。地表下0.6～0.7mの淡灰茶色粘土・灰色茶色微砂シルトが同一層の可能性をもつが、第2区と比べるとやや低くなっている。また遺構・遺物などは検出できなかった。このためここで特に問題とする庄内期の面は統いていないものと考えられる。
5. 遺構について 土器溜まりは調査区北寄り中央部分から北壁東角に直線に伸びており、壁近くでは遺物は少なくなり、調査区外に伸びていた。遺物は少なくとも7個体が確認でき



第50図 調査地周辺図（1/500）



第51図 調査位置図 (1/800)



第52図 基本層序模式図 (1/40)

た。このうち壺と思われる淡赤褐色の体部をもつ土器 1 点を除いてすべて庄内甕であった。いずれも押し潰れた状態であったが、口縁部が下になっているものもあった。土器がほぼ直線に並んでいるおり、また近辺で周溝墓が検出されていることからここでも溝状の遺構の存在を想定したが、検出できなかった。北側断面には地表下約 0.2 m の淡灰褐色を切り込む溝がみられるが、層位的に合致しない。

6. 遺物について

ここでは出土した庄内甕のうち 4 点を図化しておく。1 は復元口径 19.6 cm で、左上がりのタタキを施し、口縁は外・上方に直線的に伸び、端部は小さく摘まみ上げている。暗茶褐色を呈す。2 は口縁部径 13.7 cm で、右上がりのタタキを施し、口縁端部は上方に強く摘まみ上げる。口縁内面にはハケメがみられる。淡乳褐色を呈す。3 は口径 13.0 cm で、口縁端部外面に 1 条の沈線が巡る。暗茶褐色を呈す。4 は同部最大径を中位以下にもつとみられ、外面は右上がりのタタキの後にハケを施す。暗茶褐色を呈す。

7. 備考

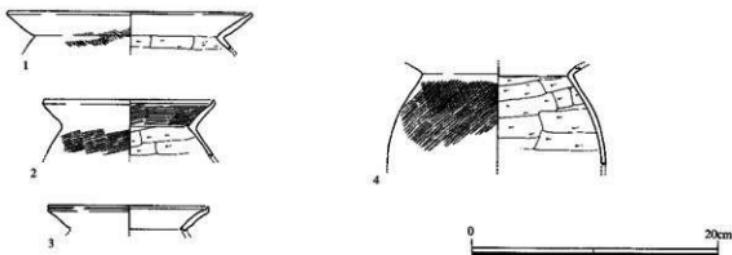
第 2 区で検出した庄内期の遺構は、他の調査区では確認できなかった。本調査地の西 10 m の地点で平成 6 年度に当教育委員会によって行われた八尾中央線築造に伴う遺構確認調査ではやはり庄内期の遺構は見られなかった。しかし、北に向かうにつれて庄内～布留期の遺構が検出された。また、本調査地から南へ 110 m にある都市計画道路平野中高安線拡幅部分を対象に行われた府教育委員会の 1 次調査ではマウンドは削平されていたが庄内期の周溝墓 1 基と井戸 4 基、土坑が検出されている。

このような状況から調査地周辺は庄内期～布留期にかけての遺構が希薄な地帯であり、言い換えれば東郷遺跡の集落と成法寺遺跡の集落の緩衝地帯であることが推定される。だが、第1区で瓦器・土師器片が出土しているため中世における削平の可能性も捨てきれないため、留保するべき問題といえよう。

(道)

8. 参考文献

- 吉田野々「八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ」八尾市教育委員会 1995.3
福田英人・米田敏幸・鴨村友子「成法寺遺跡発掘調査概要・I」大阪府教育委員会 1986.3



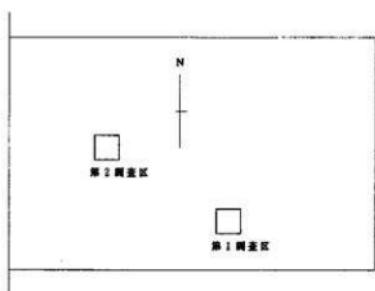
第53図 出土遺物実測図 (1/4)

13. 東郷遺跡（95-153）の調査

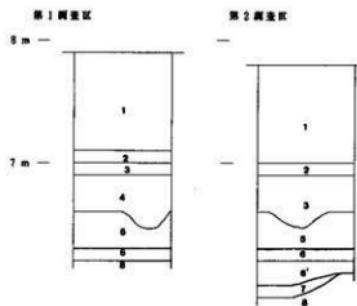
1. 調査地 桜ヶ丘1丁目16,19,20
2. 調査期間 平成8年6月25日
3. 調査方法 事業計画地内の東西に2m×2mの調査区を2箇所設定し、機械掘削により、表土除去の後、包含層を手掘りにより、精査し、遺物の取り上げと遺構の把握に努め写真撮影及び断面実測図を作成した。
4. 調査概要 東側の第1調査区では、盛土、耕土以下砂質土を除去すると、地表下約1.6m程度で、暗灰褐色粘質土内に須恵器片や土師器片を多量に含む遺物包含層を検出した。西側の第2調査区でも地表下1.5mで、同様の包含層にあたり、そこを0.2m程度掘り下げたところで、西側へ落ちる暗灰色粘土を埋土にする溝状の落ち込みを確認した。遺構6.2mを測り、堆積層の中より、棒状の木材を確認した。
5. 調査結果 本調査地で確認した須恵器、土師器を含む包含層と遺構の拡がりは、時期的に東郷遺跡の東側に拡がる古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺構群に対応するものであろうと考えられる。周辺の調査状況より、当該地もこれらの集落遺構の一角に位置することは間違いないと考えられる。 (米田)



第54図 調査区周辺図 (1/5000)

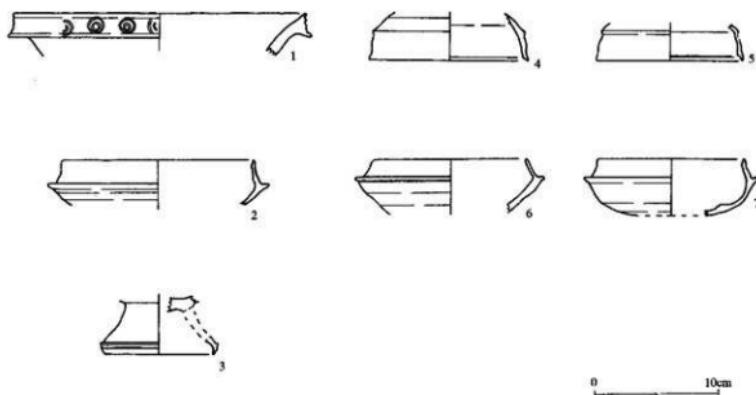


第55図 調査区設定図 (1/400)



1. 砂土
2. 団粒土
3. 黄褐色砂質土
4. 淡褐色粘砂土
5. 塗色粘砂土
6. 鑑灰色粘質土 (包含層)
7. 暗灰色粘質土 (遺構埋土)
8. 黄褐色シルト質砂質土

第56図 土層断面図 (1/40)



第57図 遺物実測図 (1/4)

14. 東郷遺跡（96-451）の調査

- | | |
|---------|---|
| 1. 調査地 | 桜ヶ丘1丁目88.89-90.1 |
| 2. 調査期間 | 平成8年10月9日 |
| 3. 調査方法 | 事業計画地に2.5m×2.3mの調査区を2ヵ所設定し、重機と人力を併用して遺構および遺物の検出を行った。 |
| 4. 調査概要 | <p>第1調査区－表土（約0.3m）を取り除くと遺物包含層（層厚0.13～0.2m）があり、土師器片・瓦器片が含まれている。しかし、この遺物包含層も暗黃褐色砂質土に削られておりまた、遺物量自体も少ない。第1遺構面はTP+7.17m淡茶灰色粘砂上面に遺存しており、ピット2基を検出した。埋土はいずれも暗灰色粘質土で炭化物を含んでいた。時期は明確ではないが中世以降と考えらるよう。</p> <p>さらに第1遺構面構築層と下部の灰黄色砂質土の2層が遺物包含層となり、上層では細片であるが土師器杯、羽釜（1）、黒色土器A類、須恵器が多くが出土している。下部の灰黄色砂質土では土師器、須恵器に混じって、古墳時代の複合口縁壺（2）や高杯片などがみられた。そしてTP+6.82mの暗黄灰色砂質土上面でピット3</p> |

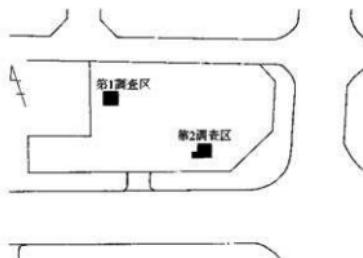
| 遺構名 | 形 状 | 法 量 | 埋 土・出土 遺物 |
|-------|-----|-----------------------------------|---------------------|
| ピット 3 | 円形 | 直 径 約 63cm × 深さ 28cm | 灰色粘砂・土師器片・須恵器片・庄内甕片 |
| ピット 4 | 不定形 | 長 片 約 64cm × 短 片 43cm × 深さ 11.5cm | 灰褐色シルト混粘砂・土師器片 |
| ピット 5 | 円形 | 直 径 約 50cm × 深さ 15.5cm | 灰褐色砂質土・土師器片 |

第2遺構面検出遺構一覧表

基を検出したことから、これを第2遺構面とした。各遺構の詳細については表にまとめた。これらのピットは、包含層及び埋土の出土遺物から8世紀～9世紀と考えられるが、一部古墳時代の土器が含まれており、付近に同時期の遺構が遺存している。



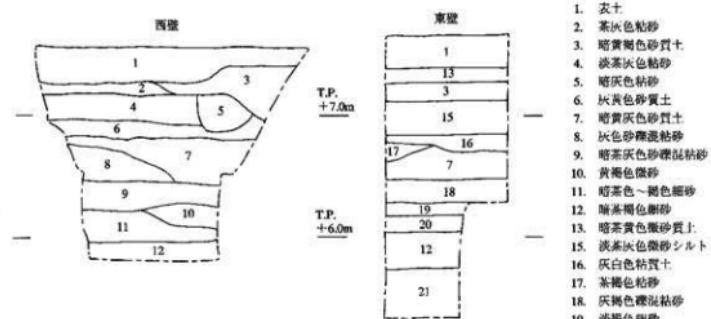
第58図 調査地周辺図（1/5000）



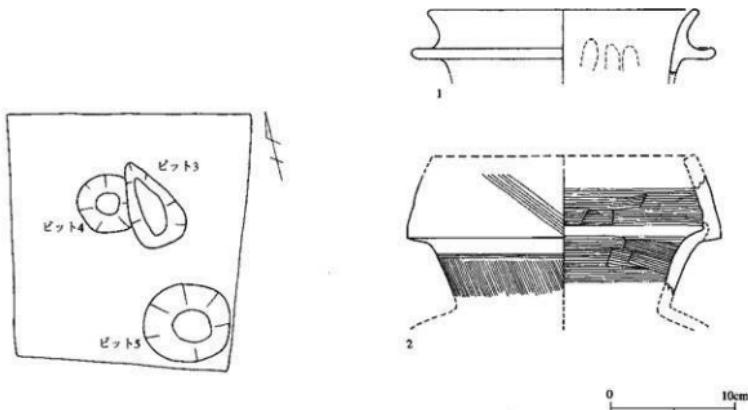
第59図 調査位置図 (1/800)

8世紀を中心とする東郷廃寺の寺域推定地であり、また北から西方向にかけては古墳時代中期の遺構と8世紀から9世紀の建物跡などが検出されている。今回の調査地には瓦片の出土がみられないことからやはり寺域からは外れるとみられ、8~9世紀の建物群との関わりが強いと考えらよう。

(消)



第60図 土層断面図 (1/40)



第61図 第1調査区、第2遺構面平面図 (1/40)

るものと推定される。

第2調査区-表土及び淡茶灰色微砂質土を除去した地表下0.4mの淡茶灰色粘土中に土師器片が僅かに含まれていた。また地表下0.8mの灰白色粘質土中にも細片であるが遺物がみられる。しかし、いずれも遺構を検出できなかった。地表下1mから砂礫が混じるようになり、1.4m以下では砂礫層の堆積となる。

5.まとめ

本調査地から道路を挟んで東には7世紀後半から

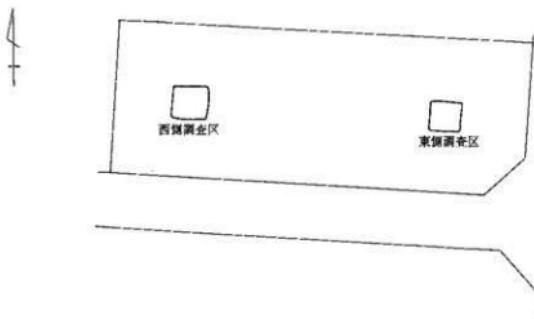
第62図 出土遺物実物図 (1/4)

15. 東郷遺跡（96-186）の調査

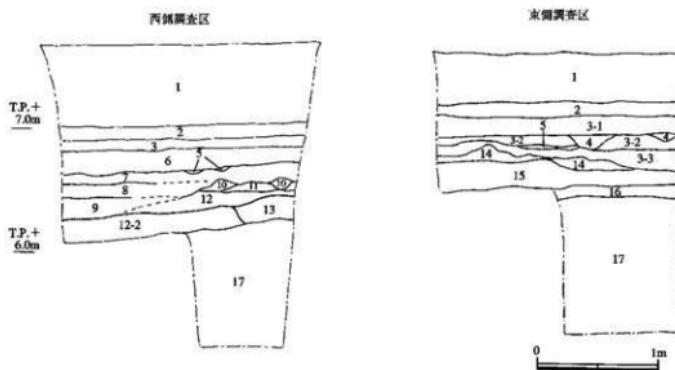
1. 調査地 八尾市北本町2丁目68、67-2
2. 調査期間 平成8年10月31日
3. 調査方法 施工予定地の西側と東側に2.5m四方の調査区を設定し、地表下2.3m～2.5m前後まで、重機と人力を併用して掘削した。
4. 調査概要 西側調査区では地表下1.05m前後、TP 6.6m前後の褐色微砂質粘砂層上面で、灰白色粗砂層を埋土とする足跡状の痕跡を確認した。平安時代ないし鎌倉時代の水田面とみられる。さらにこの下の地表下1.1m～1.6m前後、TP 6.07～6.5mで古墳時代前期の土師器片を含む褐色斑淡灰紫色炭混粘土層を確認した。この土層は微砂の混入の有無から2層に分けることができる。褐色斑淡灰紫色砂層上面で褐色斑淡灰紫色炭混粘土層を埋土とする土坑状の遺構を検出した。この遺構は深さ0.2m前後で、埋土内には古墳時代前期とみられる土師器の小片が含まれている。この下には灰色小疊混粗砂層が深さ2.5m以上続く。東側調査区では地表下0.75m～1.15m、TP 6.85～6.45mで土師器小片を含む青茶色粘砂層、茶灰褐色砂混粘質土層を確認した。この下は褐色黃色粘土をはさんで、灰白色粗砂層が堆積し、地表下2.3m以上続く。
- 5.まとめ 本調査地の東側に近接する地点でも古墳時代前期の遺構面と平安時代～鎌倉時代の水田面が、検出されている。今回の調査成果はこれと同一の遺構面の拡がりを示すものであり、東郷遺跡のありかたを考えるうえで重要である。 (吉田野々)



第63図 調査地周辺図 (1/5000)



第64図 調査区設定図 (1/400)



- | | |
|------------------|--|
| 1. 土上 | 11. 棕灰色纖維質粘性砂 |
| 2. 旧耕土(暗灰色粘砂層) | 12-1. 棕色斑淡灰紫色粘土(微砂混) 古墳前期 -2. 棕色斑淡灰紫色粘土 |
| 3. 灰青色粘土 | 13. 棕色斑灰紫色砂混粘土(灰混、遺構埋土) |
| 3-2. 灰青色粘質土(微砂質) | 14. 球灰青茶色粘砂 |
| 3-3. 灰青色粘質土(砂多) | 15. 球灰褐色砂混粘土上(土器小片含む) |
| 4. 灰青茶色粘砂層 | 16. 棕灰青色粘土 |
| 5. 灰青茶色粗砂層 | 17. 灰白色粗砂 |
| 6. 墓灰綠色粘砂 | |
| 7. 墓灰色微砂質粘砂 | |
| 8. 灰褐色粘土 | |
| 9. 淡灰茶色微砂質粘砂 | |
| 10. 墓灰色微砂質粘砂 | |

第65図 調査区土層断面図 (1/40)

16. 中田遺跡（95-470）の調査

1. 調査地 中田1丁目先
2. 調査期間 平成7年11月13,14日・11月27,28日・1月19日
3. 調査方法 配電管埋設に伴い、道路上に当初任意に4か所の調査区（北から1～4区とした）を設定して調査を行った。その結果、第2区とした地点において多量の遺物と杭1本が検出されたため、第2区の南側と北側に再度調査区（5・6区）を設定して遺構の拡がりを確認した。また、工事中に部分的に立会い調査を行った。

4. 調査概要

先ず、1区、3区、4区を概要し、次いで2区・5区・6区について述べる。

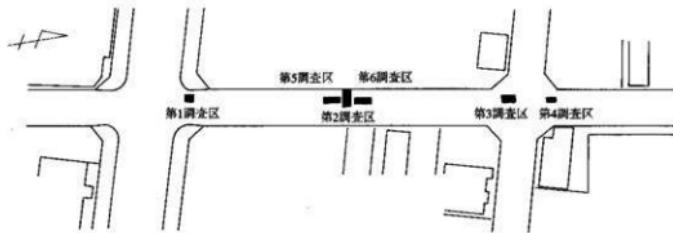
第1区（1m×1.2m）・・・ここは既に土層が攪乱されていたため、東北角でのみ土層の確認を行った。遺構は地表下0.75mの旧耕作土直下である灰色粗砂質土から切り込むピット状遺構を検出した。先述のように攪乱のため全容は不明だが深さ約27cmを測り、埋土は灰色粗砂混粘質土である。埋土より平底の突出している底部をもち、外面ナデ調整の土器（74）が出土している。地表下1.06m以下では粗砂～細砂が堆積している。

第3区（1m×1.8m）・・・現地表より旧耕作土まで約0.5mの盛土がされていた。本調査区では顯著な遺物包含層は確認できなかったが、暗褐色粗砂混粘砂層中で土師器片が1点出土している。また、地表下1.57mの暗乳灰色粘質シルトには炭化物が混じっていた。地表下2.1m以下では暗灰色粘土が堆積する。

第4区（1m×1.8m）・・・今回最も北に位置する調査区である。旧耕作土より約0.4mの盛土がある。地表下1.0mの暗茶褐色粘砂までは近現代の堆積とみられ



第66図 調査地周辺図（1/5000）



第67図 調査位置図 (1/1200)

る。第3区と同様に顯著な包含層はみられないが、地表下1.72mの淡緑灰色粘質シルトから土師器片が1点出土している。また、この下部層、すなわち地表下1.9m以下では炭化物が多く含まれている状況であった。

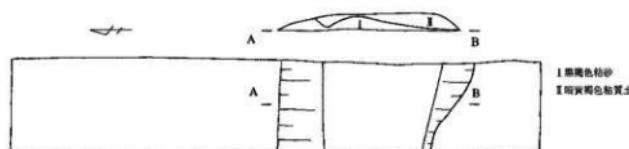
第2区 (1m × 2m) ··· 東西方向に長辺をもつ調査区。旧耕作土より約0.4mの盛土がされている。遺物は約0.8mにある灰色粗砂混粘土よりみられるが、最も多く含まれていたのは地表下約1.4mの暗灰色微砂混粘土以下である。

また下部の暗灰色粘土上面では杭を検出した。この杭より西側では砂をやや多く含む粘土であった。これらの暗灰色系の粘土中からは須恵器、土師器、製塙土器が多量に出土している。(13~19) が暗灰色微砂混粘土~暗灰色粘土出土遺物、(20~33) は暗灰色粘土出土遺物ある。

そして地表下1.7mの灰色粗砂上面では動物の骨片が見つかっている。粗砂以下はシルト層が堆積していたが、このシルト層中で庄内甕片を確認している。

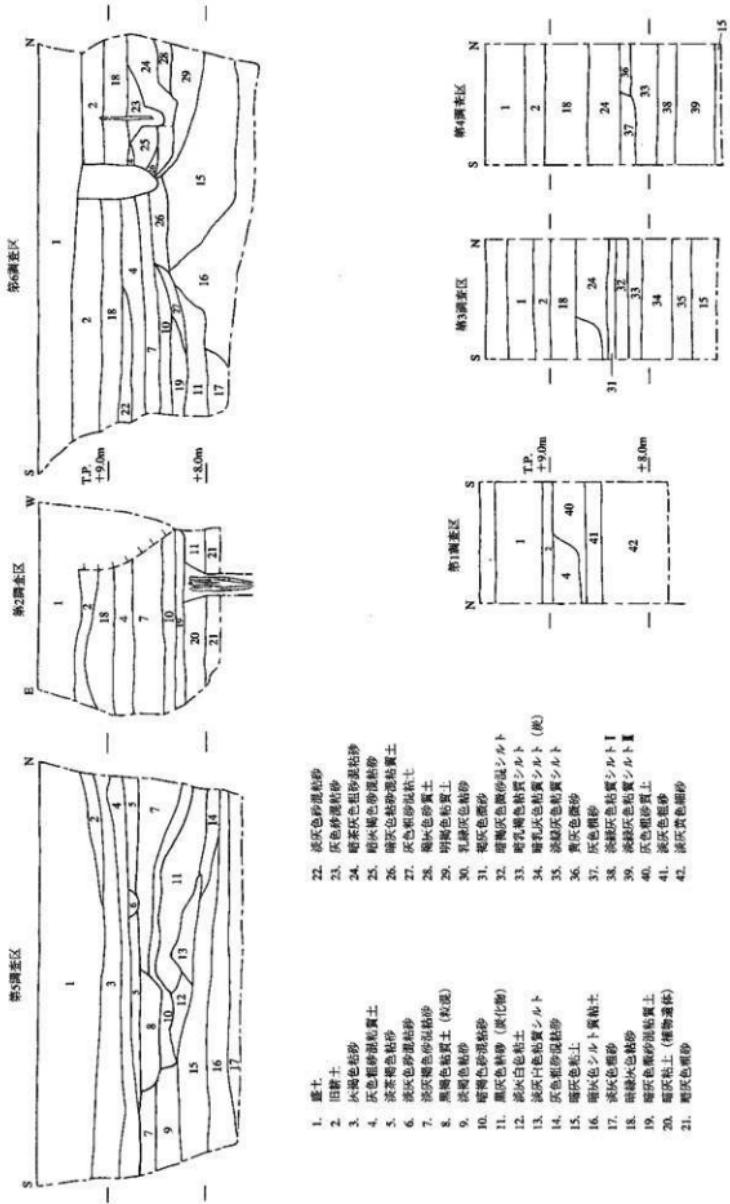
第5区 (4m × 1m) ··· 南北方向に長辺をもつ調査区。細かい遺物片は旧耕作土直下の灰褐色粘砂層からすでにみられ、地表下0.9~0.96m (TP + 8.5m前後) の淡茶褐色粘砂上面ではピット2基と土坑1基を検出する。時期は明確ではないが、層序関係から古墳時代後期以降とみられる。

そして、地表下1~1.05m (TP + 8.7m前後) の淡灰褐色砂粒混粘砂状面では東西方向に長辺をもつ土坑 (SK2) ができる。土坑は長辺は調査区外に伸びるが、短辺は1.25~1.57m、深さ0.15~0.2mで、黒褐色砂粒混粘砂と暗黄褐色粘質土の2層に分けることができる。出土遺物は土師器、須恵器、製塙土器に混じって粘土塊、そして馬齒や動物の大歯が見つかっているが、ここでは土師器甕、壺、高杯、鉢、



第68図 第5区土坑平面図 (1/40)

第69図 土層断面図 (1/50)



製塩土器（1～5）を図化している。

この第2遺構面から1層を挟んで地表下1.15～1.45m（TP+8.5～8.3m）の暗褐色粘砂は固く締まった土である。層厚は0.13m前後で、層中には脚台付壺（73）とともに多数の製塩土器片等が含まれていた。

暗褐色粘砂層と下部の黒灰色粘砂は、南から北に向かってレベルが下がっておりその高低差は最も大きい位置で上面で比べると約0.3mある。これらの層以下では炭化物と遺物が多量に包蔵されており、先述の2区あるいは次の6区の状況から遺構として捉えられるが、遺構の性格は不明な点が多く、後程2・5・6区を通して考えたい。ここでは、土層と遺物の出土状況を概要する。

この黒灰色粘砂層には木片や藁の炭化物が多量に含まれており、水気が強い。また遺物も須恵器蓋杯、高杯壺、壺、土師器杯や高杯、壺、製塩土器等が多く出土し、完形品も数点あった。（34～40）は層北側で、（41～59）が南側の最も低い位置付近で見つかったものである。

さらに黒灰色粘砂層下部で、南端に遺存する淡灰白色粘土中でも須恵器蓋杯や壺土師器杯、瓶の把手等（60～66）が出土している。また、（72）の河端の指頭痕の調整のみを行っている土師質の器台とみられる遺物は淡灰白色粘質シルトから出土していた。

以上が、黒灰色粘土を中心として北側へ下がる土層の状況と出土遺物である。しかし、さらに地表下1.7～1.8m（TP+7.95m前後）の暗灰色シルト質粘土からは土師器壺や壺、小型の壺、高杯（75～84）が出土している。布留壺（75）は口縁端部の肥厚が退化しており、内面に指頭痕が顕著であり、高杯脚柱部の調整がイタナデを主とすること等から須恵器導入前後の時期と考えられる。

そして、地表下1.95m（TP+7.8m）の淡灰色粗砂でもV様式系の壺や高杯、器台（85～89）が出土しており、近辺に遺構の存在を予感させる。

第6区（3m×1m）・・・南北に長辺をもつ調査区。遺物は地表下約1.0mの褐色粗砂質土から確認でき、淡灰色砂混粘砂では、土師器高杯脚部（70）や須恵器杯蓋（71）が出土している。特徴的なのはこの第6区では他の調査区で見つかっていない8世紀以降の遺物（67～69）が地表下0.95mの暗灰褐色粗砂混粘砂から出土している。この層は5世紀末～6世紀初頭の遺物包含層を切って堆積しており、遺構とみられるが北側を近世の杭穴に切られており、その性格は不明である。

地表下1.2m前後（TP+8.5m）で、検出長径1.43m、検出短径0.38m、深さ0.3mの土坑を検出する。埋土は暗黄灰色粘砂で、壺底部やV様式系の壺片が出土している。

また、この1.2mのレベルで調査区南側で、落ち込みを検出した。検出長約1.5m、深さ約0.5mで、埋土が4層に分けられ、いずれも2区と5区で遺物が多量に出土した暗褐色砂混粘砂～黒灰色粘土に対応していることから同のものと考えることができる。遺物は土師器壺、台付き壺脚部、高杯、須恵器蓋杯（6～12）等が出土した。この落ち込みより、北側では遺物の出土量は減少するが、それでも、（91～93）の土師器壺底部、須恵器蓋杯などが地表下1.8m付近で出土していることから、北側にも遺構の存在が推定される。

5. 出土遺物と 包含層について

以上のようにとくに2・5・6区を中心として5世紀末葉の遺物と、布留式期新相の遺物が出土している。また、V様式末期～庄内式期や8世紀後半の遺物も散見され、中田遺跡の複合的な性格が表れている。ここで出土遺物の中で最も多くの割合を示す5世紀末葉の時期を取り上げ、断続した調査であったため全容が捉えられない遺構について再考してみたい。

遺構が土層断面に表れているのは北側の第6区の落ち込みである。地表下1.2m (TP + 8.5m) の26層をベース層としている。埋土は10層の暗褐色砂混粘砂、27層灰色粗砂混粘砂、19層暗灰色微砂混粘質土、11層黒灰色粘質土（炭泥）で、出土遺物は11層が最も多い。ただし、2区や5区と比較すると相対的に少ない。

土師器高杯は杯部の口縁部が内湾し、杯部と脚部の接合部分が太い。須恵器は杯身は底が平らに近く、立上がりは長く内傾してのび、僅かに段がある。このようにみると、須恵器の編年でTK23型式併行期と考えてよいであろう。

次に2区をみよう。2区は東西2m×南北1mの調査区で、5区と6区の中間にあたる。このため遺構の中を掘り下げていたものとみられる。このため遺構として検出できたのは地表下1.47mの杭跡のみである。出土遺物の多くは地表下1.25mの(TP + 8.44m) 10層暗褐色砂混粘砂、19層暗灰色微砂混粘質土と11層黒灰色粘砂で、特に下部2層を中心である。19層からは(13～19)の遺物が出土している。

図化したものは須恵器壺が多い。口縁下部に凸帯があり、波状文を施すなど装飾性が残っている。高杯脚部は短く内湾して下り、透かしは施されていない。11層からは(20～33)の遺物が出土しており、製塩土器の多さが目に付く。土師器壺は体部のハケが斜方向に粗くストロークも短いものである。須恵器杯蓋は口縁がハの字形に下り、端部は丸い。杯身は立上がりが内傾して、端部は段を持っている。このように2区の遺物はTK208～23型式併行期とみられる。

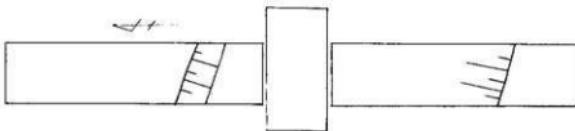
5区では北側に下がる土層を確認しており、やはり落ち込み状を成す。この肩は上部の土坑で切られていた。推定の肩のレベルは地表下1.15～1.2m (TP + 8.55m) で、9層をベースとする。埋土は5層に分けられ、2・5区でみられた10層・11層の下部に12層淡灰白色粘土、13層淡灰白色粘質シルト、14層灰色粗砂混粘質土が堆積している。11層は肩近くでは炭化物混じりというよりも炭化物の堆積といつよい状況であり、水気を含んでいた。遺物は11層と14層に顕著にみられた。(34～59)が11層、(60～66)が14層である。

土師器では壺と杯を図化している。壺は口縁が内湾して上外方にのび、端部は丸い。外面は縦方向のハケ、内面はナデの後に粗くヘラケズリを施す。杯は底部が丸くイタナデをするものと浅い凹状の平底の2種類がある。前者では口縁端部に内面にハケをするものがあり、後者は内面すべてにハケ痕が残る。また、製塩土器が多いのは2区と同じである。

須恵器は杯蓋は稜が鋭く、口縁がハの字形に下る。杯身は底が平らに近く、受け部も長い。立上がりは内傾し、端部の丸いものがある。高杯は無蓋高杯と有蓋高杯がある。有蓋高杯の蓋は摘まみを有し、口縁は長く内傾する段を成している。

以上の特徴からTK208～23型式併行期に比定できる。

こうして、各調査区の土層の堆積状況と遺物の時期をみてきた。その結果、2・



第70図 第2・5・6区土坑平面図 (1/80)

5・6区の落ち込みはひとつの遺構として捉えられることができ、遺存している遺構レベルはTP +8.4~8.5mとみられる。また、3つの調査区を合わせた遺構の幅は南北約5.3mと推定され、肩部と底面との差、すなわち深さは約0.7mとみられる。遺構の埋土には炭化物が多量に含まれていたことや固く締まった10層の存在などから、この遺構は土坑と考えておきたい。

その性格については推定の域をでないが2つが挙げられる。第1に土器の廃棄場としての土坑である。完形の土器も数点含まれるが、大半は破片であることからこれは妥当性が高い。第2に炭化物と製塩土器が多量にみられること、そして馬歯が上部層で見つかっていることから、製塩関係の焼土坑とする考えである。しかし、この場合、製塩以外の遺物の量の多さや土坑自体の焼成の痕跡が明確でないため、現状では第1の廃棄場としておきたい。ただ、この場合でも近辺に製塩関係の遺構が存在するものと推定される。

6. 他の 遺物

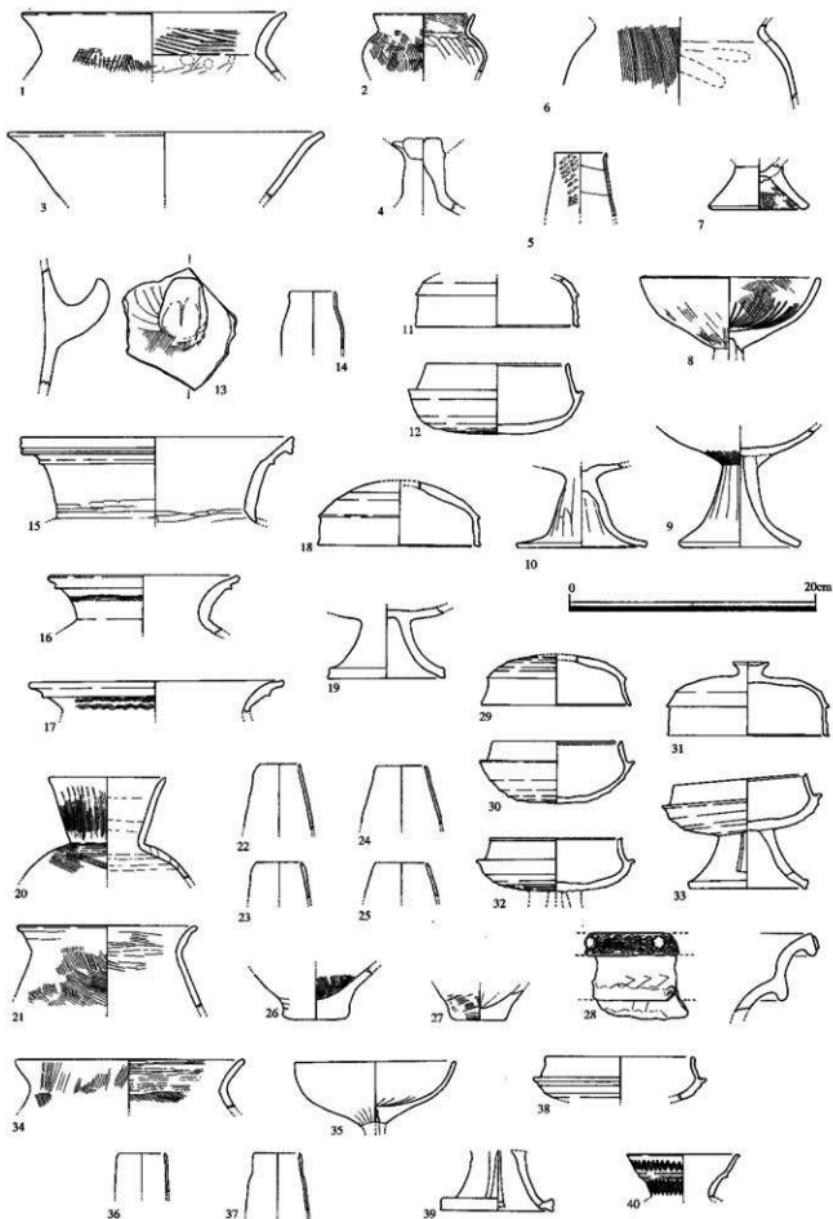
ここでは幾つかの特徴的な遺物を取り上げ概説する。

製塩土器・・今回最も出土量が多く、幾つかのタイプが存在する。(a) タイプ 口径は4cm前後。口縁は下膨れの体部をから内傾してのびた後直立する。胎土が精良で、砂粒を含まない。内外面ナデ、外面は掌の痕跡が明瞭に残る。淡乳白色 (b) タイプ 口径4cm前後。形態、胎土は(a)に似ている。内面ナデ、外面は貝殻条痕文。淡乳桃色。(c) タイプ 口径3.2~4cm。(a)や(b)よりも小さく、口縁部は内斜してのび、内湾する。内面ナデ、外面は掌の痕跡が明瞭に残る。胎土に砂粒を僅かに含む。(a)や(b)に比較すると堅致である。淡橙褐色。明らかに2次焼成を受け黒褐色を呈するものもある。(d) タイプ 口径4.2cm。形態は似て小さい。口縁部はナデ等の調整をせず雑な仕上げである。内面ナデ、外面は貝殻条痕文、暗橙褐色。

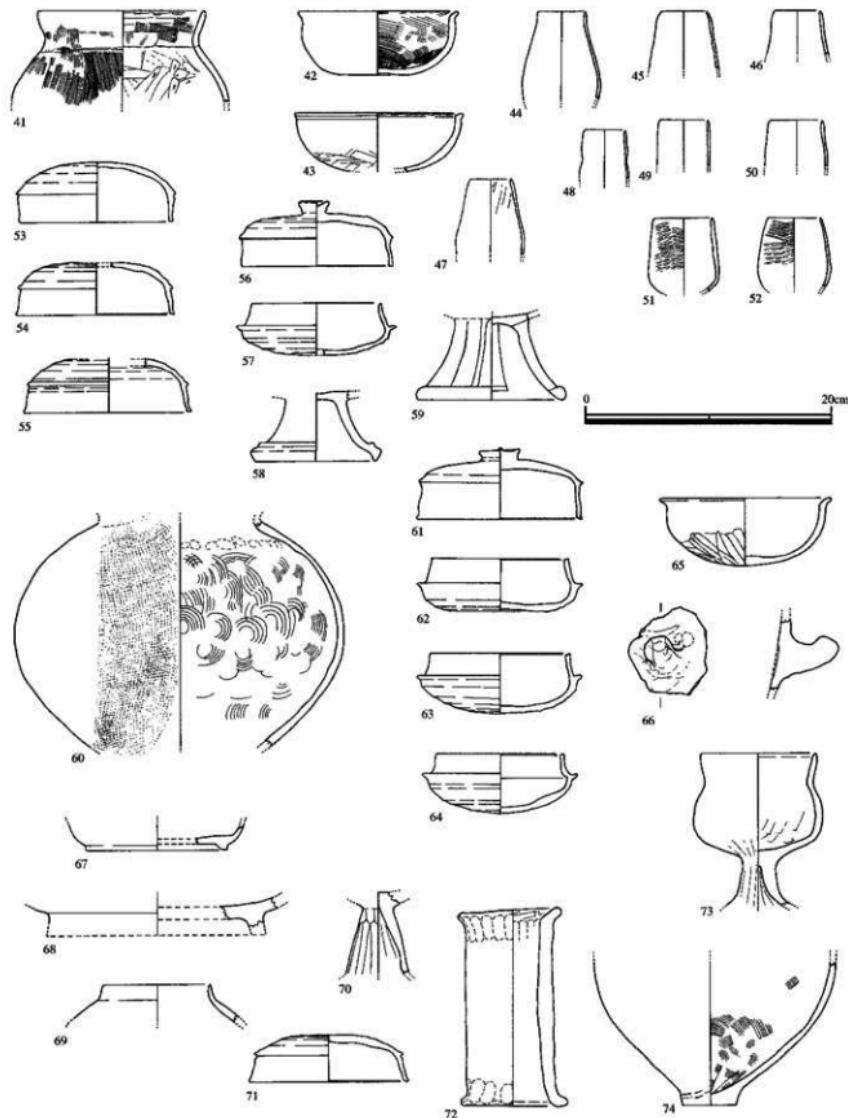
以上の4タイプがある。細片で明確な個体数は不明だが、その割合では淡乳白色~桃色の(a)及び(b)が多い。ただ、(c)は堅致なため。大きな破片が目立つ。このようなタイプの違いは製作者あるいは製作地の差異によるものと考えられ、異なる幾つかの地域から塩が搬入されていたと推定される。

粘土塊・・2・5・6区の土坑から出土した灰白色の塊で、大きさは4×2cm~1cm程の不整形なもので細い棒状の刺突痕が見られる。<図版15下段>

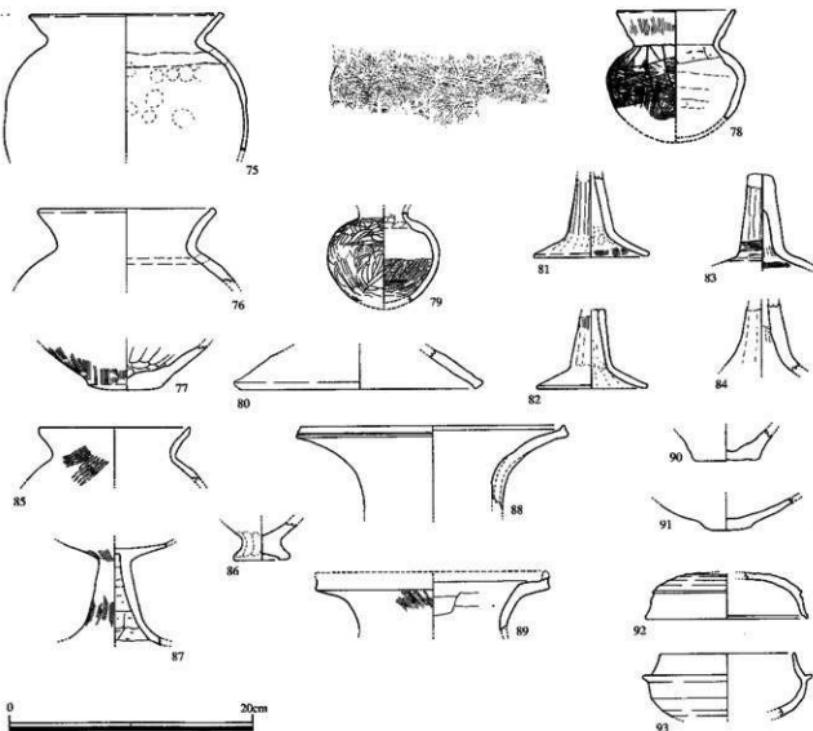
線刻土器・・5区の灰色粗砂混粘砂から出土した小型丸底壺(78)で体部にハケを施した後にヘラ状工具で、縦線と横線をひき、雑な格子形を描く。また、破損していく判然としないが頸部下の小さな楕円形の中に羽状の文様を描き、木の葉に似た文様を表わしている。形態や太いハケ痕から須恵器導入前後の時期とみられる。



第71図 出土遺物実測図 (1 / 4)



第72図 出土遺物実測図（1／4）



第73図 出土遺物実測図 (1/4)

7. まとめ

中田遺跡は昭和45年に行われた区画整理事業によって発見され、以後大阪府教育委員会、中田遺跡調査会、(財)八尾市文化財調査研究会、当教育委員会によって断続的な調査が実施されている。これまでの調査から弥生時代から中世まで連續と続く複合遺跡であることが判明しており、また遺跡内には由義宮推定地を包括するなど旧大和川の自然堤防状に位置する歴史的にも重要な地域であることがわかる。これまでも5世紀代の遺構が検出されており、木製儀仗などの特徴的な遺物も出土しているが、本遺跡内では大規模な調査は行われておらず、集落の位置などは明確ではない。しかし、今回の調査では小区画ながら、5世紀後半に比定できる土坑状遺構から多量の遺物が出土し、また製塙土器や馬齒や骨が見つかったことは同時期の集落の位置や、その性格に方向付けができるものといえよう。

(道)

出 土 遺 物 観 察 表

| 遺物番号 | 器種部位 | (cm) 口径 法量 器高 | 形態・調整等の特徴 | 色調 | 焼成 | 出土層 区・遺構 | 備考 |
|-----------------|--------------|-------------------|--|------|----------|------------------|--------|
| 1 土師器 | 壺 口～体部 | 23.4 5.0 | 外面調整は口縁はナデ、頸部はハケ。内面は口縁ハケ、頭部はイアナデで指頭痕跡。 | 橙褐色 | やや 軟質 | 5区 SK 2 | |
| 2 壺 口～体部 | | 8.4 4.8 | 調整は外面部ハケ、口縁はナデ。内面は体部を縱方向にユビナデ、口縁ハケ。 | 淡橙褐色 | やや 軟質 | 5区 SK 2 | |
| 3 鉢 口縁部 | | 25.6 5.5 | 上外方にのびる体部から口縁はやや外反する。測離のため調整は不明。 | 淡茶褐色 | やや 軟質 | 5区 SK 2 | |
| 4 土師器 | 高杯 脚柱部 | 残 5.9 | 表面剥離により調整不明。 | 淡茶褐色 | やや 軟質 | 5区 SK 2 | |
| 5 製塙土器 | 口～体部 | 4.2 5.2 | 外面は貝殻痕が残り、内面はナデ。粘土の繊維目がみられる。 | 乳白色 | 軟質 | 5区 SK 2 | (b)タイプ |
| 6 土師器 | 壺 頭～体部 | 6.3 | 調整は外面縱方向のハケ。内面は指ナデ。 | 淡乳褐色 | やや 軟質 | 6区 19層・11層 | |
| 7 台付き壺 台部 | | 底径 7.4 残 3.7 | 調整は外面はナデ。内面はハケ。 | 暗乳灰色 | やや 軟質 | 6区 暗灰 19層・11層 | |
| 8 土師器 | 高杯 杯部 | 14.4 6.3 | 調整は外面ハケ後ヘラミガキ。内面はハケの後放射線状のヘラミガキ。 | 橙褐色 | やや 軟質 | 6区 19層・11層 | |
| 9 土師器 | 高杯 杯～裾部 | 底径 9.4 残 9.8 | 裾部は緩やかに開き、中空の脚柱から内清しながら杯は立ち上がる。柱部はイナデ。 | 淡橙褐色 | やや 軟質 | 6区 19層・11層 | |
| 10 土師器 | 高杯 杯～裾部 | 底径 10.3 残 6.8 | 裾部は平たく広がり、中空の短い柱脚柱を有す。外面は柱部イナデ、他はナデ。 | 淡褐灰色 | やや 軟質 | 6区 19層・11層 | |
| 11 須恵器 | 杯蓋 口～体部 | 13.4 4.1 | 口縁部は長く垂直に下った後に外反し、端部は内傾する段を成す。 | 暗灰色 | 堅致 | 6区 19層・11層 | |
| 12 須恵器 | 舟身 光形 | 11.6 5.7 | 立ち上がりはやや内傾してのび、端部は浅く内傾する凹面を成す。 | 淡灰色 | 堅致 | 6区 19層・11層 | |
| 13 土師器 | 壺 把手部 | 縱残 10.0 横残 9.3 | 調整は外面ヘラナデ、ハケ、把手部はユビナデ。内面は剥離により不明。 | 明灰褐色 | やや 軟質 | 2区 19層 | |
| 14 土師器 | 製塙土器 口～体部 | 4.2 3.6 | 口縁は内した後直立する。内面なで、外面は掌の痕跡が残る。 | 灰白色 | やや 軟質 | 2区 19層 | (a)タイプ |
| 15 須恵器 | 壺 口縁部 | 22.2 7.1 | 端部は下方に肥厚し、下部に凹縁が巡り、口縁下方には断面三角形の凸帯が1条巡る。 | 暗灰色 | 堅致 | 2区 19層 | |
| 16 須恵器 | 壺 口～頸部 | 15.6 4.9 | 外縁面部は上方に稜を成し、下方に断面三角形の凸帯が1条巡る。ハケ痕がみられる。 | 暗灰色 | 堅致 | 2区 19層 | |
| 17 須恵器 | 壺 口縁部 | 20.6 2.6 | 外上方にのび、口縁下方に断面三角形の凸帯が1条巡る。また2秒の波状文が巡る。 | 暗灰色 | 堅致 | 2区 19層 | |
| 18 須恵器 | 蓋杯 口～体部 | 13.4 5.2 | 天井ぶは3/4をヘラケグリする。口縁は垂直に下った後に外反し、端部は凹面を成す。 | 灰白色 | やや 軟質 | 2区 19層 | |
| 19 須恵器 | 高杯 杯～裾部 | 底径 9.7 残 5.9 | 下外方に下った後、裾部で水平に開き、外端面浅い凹面を成す。透かしは無い。 | 淡灰色 | 堅致 | 2区 19層 | |
| 20 土師器 | 直口壺 口～体部 | 9.6 8.4 | 調整は外面口縁はハケ後縱方向のヘラミガキ、体部はハケ後ヘラミガキ。内面はナデ。 | 暗黄褐色 | やや 軟質 | 2区 11層 | |
| 21 土師器 | 壺 口～体部 | 14.8 6.6 | 調整は口縁ヘラナデ、体部ハケ。内面はハケ。 | 橙褐色 | やや 軟質 | 2区 11層 | |
| 22 土師器 | 製塙土器 口～体部 | 3.1 5.4 | 2次焼成を受けており、調整不明。 | 黒灰色 | やや 軟質 | 2区 11層 | (c)タイプ |
| 23 土師器 | 製塙土器 口～体部 | 4.4 4.6 | 2次焼成を受けており、調整不明。 | 黒灰色 | やや 軟質 | 2区 11層 | (c)タイプ |

| 遺物番号 | 器種部位 | (cm) 口徑 法量 器高 | 形態・調整等の特徴 | 色調 | 焼成 | 出土層 区・遺構 | 備考 |
|------------|--------------|---------------------|---|------|----------|-------------|---------------|
| 24 上歸器 | 製塙土器 口～体部 | 残 2.8 | 2次焼成を受けており、調整不明。 | 黒灰色 | やや 軟質 | 2区 11層 | タイプ不明 |
| 25 上歸器 | 製塙土器 口～体部 | 残 2.9 | 2次焼成を受けており、調整不明。 | 黒灰色 | やや 堅致 | 2区 11層 | タイプ不明 |
| 26 弥生土器 | 壺 底部 | 底径 5.4 残 4.3 | 鈍く突出する平底で、外面はタタキ、内面はハケで調整する。 | 灰褐色 | やや 軟質 | 2区 11層 | |
| 27 弥生土器 | 壺 底部 | 底径 4.4 残 2.6 | 浅く凹面を成す平底で、外面はタタキ、内面はイタナデ調整する。 | 灰褐色 | やや 軟質 | 2区 11層 | |
| 28 弥生土器 | 壺 口縁部 | 6.5 | 複合口縁で、口縁は下方に肥厚し、波状文と円形浮文を飾る。擬口縁も波状文が巡る。 | 淡橙褐色 | やや 軟質 | 2区 11層 | |
| 29 須恵器 | 蓋杯 口～体部 | 12.2 4.1 | 口縁は外湾気味に下り、端部は内傾する面を成す。天井部へラケズリは5/6以上。 | 暗灰色 | 堅致 | 2区 11層 | |
| 30 須恵器 | 蓋身 | 10.6 5.0 | 立ち上がり内傾してのび、口縁は明瞭な段を成す。杯部へラケズリは3/4以上。 | 暗灰色 | 堅致 | 2区 11層 | |
| 31 須恵器 | 有蓋高杯 蓋部 | 13.2 6.0 | 摘まみ上面は凹状を成し、口縁は垂直に下り、外反する。端部は内傾する凹面を作る。 | 暗灰色 | 堅致 | 2区 11層 | 天井部は自然付着している。 |
| 32 須恵器 | 有蓋高杯 杯部 | 10.8 4.4 | 立ち上がり内傾してのびた後外反し、端部は凹面を成す。透かしは4方に有る。 | 暗灰色 | 堅致 | 2区 11層 | |
| 33 須恵器 | 有蓋高杯 | 10.9 9.3 | 口縁は内傾する段を成す。杯のヘラケズリは3/4以上。脚柱に長方形透かしが3方有る。 | 暗灰色 | 堅致 | 2区 11層 | |
| 34 土歸器 | 壺 口～頸部 | 19.0 4.1 | 外面調整はハケ、口縁はナデ。内面は口縁から頸部はハケ、頸部以下はヘラナデ。 | 淡橙褐色 | やや 軟質 | 5区 11層北側 | |
| 35 土歸器 | 高杯 杯部 | 13.2 5.3 | 外面調整はハケナデ、ナデ。内面調整は | 橙褐色 | やや 軟質 | 5区 11層北側 | |
| 36 上歸器 | 製塙土器 口～体部 | 3.7 3.8 | 内面はナデ、外面は掌痕跡が残る。 | 淡橙灰色 | やや 堅致 | 5区 11層北側 | (c)タイプ? |
| 37 土歸器 | 製塙土器 口～体部 | 3.6 4.8 | 2次焼成を受けており、調整不明。 | 黒灰色 | 軟質 | 5区 11層北側 | (c)タイプ |
| 38 須恵器 | 杯身 口～体部 | 12.2 3.5 | 立ち上がり内傾してのびた後直立し、端部は丸く、鈍い。ヘラケズリは受部下まで。 | 灰褐色 | 良 | 5区 11層北側 | |
| 39 須恵器 | 高杯 脚柱部 | 底径 9.2 残 4.9 | 端部は肥厚し、外端面は垂直な凹面をなす長方透かしが4方に有る。 | 暗灰色 | 良 | 5区 11層北側 | |
| 40 須恵器 | 壺 口縁部 | 9.2 3.7 | 口縁は1条の筋が巡り、2条の波状紋が巡る。端部は外に肥厚し、平坦な面をなす。 | 明灰色 | 堅致 | 5区 11層北側 | |
| 41 土歸器 | 壺 口～体部 | 13.6 7.5 | 外面は縱方向のハケ、内面は口縁は横方向のハケ、体部はナデ後ヘラケズリ。 | 淡灰褐色 | 軟質 | 5区 11層南側 | |
| 42 土歸器 | 杯 | 13.1 5.2 | 底部はやや円状を成す平底。外面調整は剥離しており、不明。内面はハケ。 | 淡茶褐色 | やや 軟質 | 5区 11層南側 | |
| 43 土歸器 | 杯 | 4.8 13.6 | 底部は丸底。外面は底部ヘラケズリ、他はナデ。内面は横方向のナデ、口縁はハケ。 | 淡茶褐色 | やや 軟質 | 5区 11層南側 | |
| 44 土歸器 | 製塙土器 口～体部 | 3.8 7.3 | 下彫れの体部からのびる口縁は直立する。内面ナデ、外面は掌痕跡が明瞭に残る。 | 淡乳褐色 | 軟質 | 5区 11層南側 | (a)タイプ |
| 45 土歸器 | 製塙土器 口～体部 | 3.2 5.4 | 下彫れの体部で、口縁部は強いナデにより内傾する。内面ナデ、外面は掌痕跡。 | 暗黄褐色 | やや 堅致 | 5区 11層南側 | (c)タイプ |
| 46 土歸器 | 製塙土器 口～体部 | 3.6 4.7 | 下彫れの体部で、口縁部は強いナデにより内傾する。内面ナデ、外面は掌痕跡。 | 暗橙褐色 | やや 堅致 | 5区 11層南側 | (c)タイプ |
| 47 土歸器 | 製塙土器 口～体部 | 3.4 6.2 | 2次焼成を受けており、調整不明。 | 暗橙褐色 | やや 堅致 | 5区 11層南側 | (c)タイプ |

| 遺物番号 | 器種部位 | (cm) 口径 法量 高さ | 形態・調整等の特徴 | 色調 | 焼成 | 出土層 区・遺構 | 備考 |
|------|--------------------|---------------------------|--|------|----------|-------------|-----------------|
| 48 | 製塙土器 | 4.6 残 3.4 | 口縁部は強いナデにより内傾する。内面ナデ、外面掌痕跡。 | 暗赤褐色 | やや 堅致 | 5区 11層南側 | (c)タイプ |
| 49 | 製塙土器 | 3.7 残 3.6 | 口縁を強くナデ、内面はナデ。外面は雑なナデと掌痕跡。 | 暗赤褐色 | やや 堅致 | 5区 11層南側 | (c)タイプ |
| 50 | 製塙土器 | 3.8 残 3.7 | 内面はナデ、外面は掌痕跡が明瞭に残る。 | 淡乳褐色 | 軟質 | 5区 11層南側 | (a)タイプ |
| 51 | 製塙土器 | 4.4 残 6.3 | 口縁は雑なナデで、径が整わない。内面は軽い指ナデ、外面は貝絹条痕。 | 暗褐色 | やや 堅致 | 5区 11層南側 | (d)タイプ |
| 52 | 製塙土器 土器器 | 4.2 残 4.2 | 口縁は雑なナデで、径が整わない。内面は軽い指ナデ、外面は貝絹条痕。 | 暗褐色 | やや 堅致 | 5区 11層南側 | (d)タイプ |
| 53 | 須恵器 蓋杯 | 12.4 4.9 | 口縁は垂直にとり、端部は丸い。稜は鈍く下方に浅い沈線を有す。 | 暗灰褐色 | 堅致 | 5区 11層南側 | |
| 54 | 須恵器 蓋杯～体部 | 12.8 4.2 | 口縁は下外方へ下った後外反し、端部は浅い凹面を成す。 ヘラケズリは4/5以上。 | 暗灰褐色 | 堅致 | 5区 11層南側 | |
| 55 | 須恵器 蓋杯 | 13.6 4.3 | 口縁は下外方を下った後外反し、端部は凹面を成す。 ヘラケズリは稜付近まで施す。 | 明灰色 | 堅致 | 5区 11層南側 | |
| 56 | 須恵器 有蓋高杯 蓋 | 12.3 5.3 | 摘まみは上面四凹を成す。口縁は外湾した後垂直にり、端部は浅い凹面を成す。 | 暗灰色 | 堅致 | 5区 11層南側 | 焼成時に柄部を上部に被せた跡有 |
| 57 | 須恵器 蓋杯 身 | 10.6 4.2 | 立ち上がりは内傾してのびた後直立し、端部は丸い。受け部は水平で底部は平らに近い。 | 暗灰色 | 堅致 | 5区 11層南側 | |
| 58 | 須恵器 高杯 脚柱部 | 底径10.6 5.7 | 外端面はカギ状に曲がり上部に後が巡る。透かしは無い。 | 明灰色 | 堅致 | 5区 11層南側 | |
| 59 | 須恵器 無蓋高杯 脚柱部 | 底径12.4 7.0 | 外端面は凹面状を成す。長方形透かしは4方に施す。 | 明灰色 | 堅致 | 5区 11層南側 | 透かしの分割線が残る。 |
| 60 | 須恵器 壺 体部 | 18.4 残 | 球形の体部で、外面は格子目のタタキ痕。内面は當て具痕で、頸部付近は指押さえ。 | 暗灰色 | 堅致 | 5区 14層 | |
| 61 | 須恵器 有蓋高杯 蓋 | 13.6 5.8 | 摘まみは上面凸状で、稜は断面三角形を呈し、口縁は垂直にのび外反する。 | 暗灰色 | 堅致 | 5区 14層 | 天井部に自然釉が付着する。 |
| 62 | 須恵器 蓋身 身 | 11.2 4.2 | 平らな底部で、受部は鋭く水平にのびる。立ち上がりは器高の1/2で、端部は凹状。 | 暗灰色 | 堅致 | 5区 14層 | |
| 63 | 須恵器 蓋身 身 | 11.6 4.9 | 平らに近い底部で、体部のヘラケズリは受部迄まで施し、立上がり端部は浅い凹状。 | 暗灰色 | 堅致 | 5区 14層 | |
| 64 | 須恵器 蓋身 身 | 10.4 4.9 | 丸みをもつ底部で、体部のヘラケズリは4/5以上で、立ち上がり端部は丸い。 | 暗灰色 | 堅致 | 5区 14層 | |
| 65 | 土師器 杯 | 14.0 5.5 | 底部は丸みを帯びており、口縁端部は外反する。外面底部はイタナデ、他はナデ。 | 淡橙褐色 | 軟質 | 5区 14層 | |
| 66 | 土師器 鍋 | 残概7.1 把手 残横6.3 | 把手部分はイタナデの後ナデ。 | 明灰褐色 | 軟質 | 5区 14層 | 内面にスヌ付着 |
| 67 | 須恵器 杯 | 底径11.4 底部 残 2.1 | 杯底部に高台が付く。 | 暗灰色 | 堅致 | 6区 25層 | |
| 68 | 須恵器 杯 | 推定底17.6 底部 残 3.0 | 杯底部に高台が付く。 | 暗橙褐色 | 堅致 | 6区 25層 | |
| 69 | 須恵器 短頸壺 口～体部 | 8.8 3.1 | 口縁は短く内傾してのび、端部は丸い。 | 淡灰色 | 堅致 | 6区 25層 | |
| 70 | 土師器 高杯 | 6.8 | 外面はイタナデ、杯接合付近はナデ。内面はシボリメ。 | 淡橙褐色 | 軟質 | 6区 22層 | |
| 71 | 須恵器 蓋杯 蓋 | 12.8 3.8 | 口縁は外下方にのび、端部は丸い。稜は鋭く下方に沈線が巡る。 | 淡灰色 | 堅致 | 6区 22層 | |

| 遺物番号 | 器種部位 | (cm) 口径 法量 器高 | 形態・調整等の特徴 | 色調 | 焼成 | 出土層 区・遺構 | 備考 |
|------|------|-----------------------|---|------|--------------------|----------------|----|
| 72 | 器台? | 8.4 16.2 | 中空の筒形で、上部と下部が外反する。外面ナデ、端部は指頭痕が顕著に残る。 | 淡茶褐色 | 軟質 5区 13層 | | |
| 73 | 台付壺 | 底径 9.4 口～脚部 残 12.4 | 壺の聞く脚部に直立する口縁をもつ小型の壺が付く。外面は不明。内面はイタナデ。 | 橙褐色 | 軟質 5区 10層 | | |
| 74 | 壺 | 底径 4.4 体～底部 残 11.7 | 外面は磨滅により不明。内面はハケ。 | 橙褐色 | 軟質 1区 ピット状遺構 | | |
| 75 | 壺 | 16.0 口～体部 残 11.4 | 口縁端部は外傾する平坦面を作る。頸部の屈曲は似ず区、指頭痕は頸部より下で顕著。 | 橙褐色 | 軟質 5区 16層 | | |
| 76 | 壺 | 14.6 口～頸部 残 6.1 | 口縁が上外方に聞く広口の壺で、内外面はナデ調整。 | 淡茶褐色 | 軟質 5区 16層 | | |
| 77 | 壺 | 6.3 底部 残 3.6 | 角が無い丸みを帯びた平底で、外面はハケ内面は指押さえの後ヘラケズリ。 | 淡茶褐色 | 軟質 5区 16層 | 内面にスス付着 | |
| 78 | 小型壺 | 9.8 口～体部 残 9.0 | 口縁部はハケ後ナデ、内面はナデ。体部はハケ後ヘラ条縫、内面はヘラケズリ。 | 淡茶褐色 | 軟質 5区 16層 | | |
| 79 | 小型壺 | 頸～体部 残 7.3 | 球形の体部で、外面ヘラミガキ、内面ヘラナデとナデ。 | 黑色 | 軟質 5区 16層 | 外面は良素板着で漆黒を呈す。 | |
| 80 | 器台 | 底径 20.4 底部 残 3.2 | 内外面ヨコナデ。 | 淡茶褐色 | 軟質 5区 16層 | | |
| 81 | 高杯 | 底径 9.4 脚柱部 残 6.6 | 外面ヘラミガキ、内面は指頭痕、縦部ハケ。 | 淡橙褐色 | 軟質 5区 16層 | | |
| 82 | 高杯 | 底径 9.0 脚柱部 残 6.4 | 外面は剥離しているが、ヘラミガキか。内面はハケ後ナデ。 | 淡灰褐色 | 軟質 5区 16層 | | |
| 83 | 高杯 | 7.5 | 外面縦方向のヘラミガキで、縦部は横方向のヘラミガキ、内面はハケ。 | 淡灰褐色 | 軟質 5区 16層 | | |
| 84 | 高杯 | 5.4 | 縦部は脚部から緩やかに広がる。内外面調整不明。 | 橙褐色 | 軟質 5区 16層 | | |
| 85 | 壺 | 12.2 口～体部 残 4.4 | 口縁部は上方につまみ上げる。外面タキ、内面はナデ。 | 淡灰褐色 | 軟質 5区 17層 | | |
| 86 | 台付壺 | 底径 4.6 脚部 残 3.1 | 底面は凹状を呈す。外面は指押さえで体部付近ヘラナデ。 | 淡褐色 | 軟質 5区 17層 | | |
| 87 | 高杯 | 7.7 | 縦部は脚部から緩やかに広がる。外面はハケ後ナデ、内面はヘラケズリ。 | 淡褐色 | 軟質 5区 17層 | | |
| 88 | 器台 | 21.4 受部 残 7.0 | 口縁端部に沈線がめぐる。内外面ともにナデ。 | 淡橙褐色 | 軟質 5区 17層 | | |
| 89 | 器台 | 推定18.6 受部 残 4.5 | 外面はハケ後、ヘラミガキ、内面はイタナデ。 | 淡褐色 | 軟質 5区 17層 | | |
| 90 | 壺 | 底径 2.6 底部 残 5.6 | 平底の底部で、剥離により調整不明。 | 暗橙褐色 | 軟質 6区 土坑 | 外面スス付着 | |
| 91 | 壺 | 底径 2.6 底部 残 3.9 | 外面ヘラミガキ、内面ナデ。 | 軟質 | 6区 | | |
| 92 | 蓋杯 | 13.2 蓋 残 3.7 | 口縁はハの字に下り、縦部は段を有する。稜は鋭い。 | 暗灰色 | 堅致 6区 | | |
| 93 | 蓋杯 | 10.9 須恵器 身 残 5.2 | 体部はやや丸く、口縁は上外方にのげる。 | 淡灰色 | 堅致 6区 | | |

17. 中田遺跡（96-510）の調査

1. 調査地
2. 調査期間
3. 調査方法
4. 調査概要

中田1丁目28番地

平成8年11月8日 汚水枠設置に伴い約1.2m×1.2mの調査区を2箇所し、各々地表下1.3mまで重機と人力を併用して掘削を行い、土層観察を実施した。

現地表（TP +8.79m）は東側に接する道路とはほぼ同レベルであり、旧耕作土より約0.16mの盛土が成されていた。

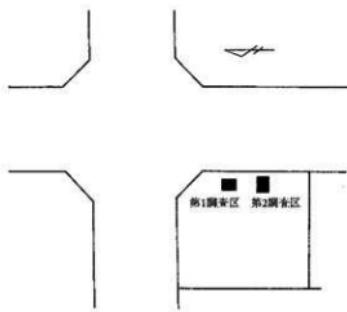
第1調査区・ここでは中世と古墳時代後期の遺構面と庄内式期の包含層を検出した。中世包含層は地表下0.35m前後の暗灰色粘砂（層厚0.18m）で、土師器や須恵器に混じって瓦器がみられた。包含層下部の暗黄灰色粘砂上面（TP +8.25m）ではピット2基が見つかった。いずれも暗灰黄色粘砂を埋土とし、ピット1は深さ6cm、ピット2は深さ28cmを測る。

また、中世遺構面ベース層は古墳時代後期の包含層（層厚0.15m）であり、土師器や須恵器片を包蔵している。古墳時代後期の遺構面は地表下0.7m（TP +8.09m）の暗黄褐色粘砂で、ピット1基（ピット3）を検出している。ピット3は灰色粘砂を埋土とし、深さ23cmを測る。

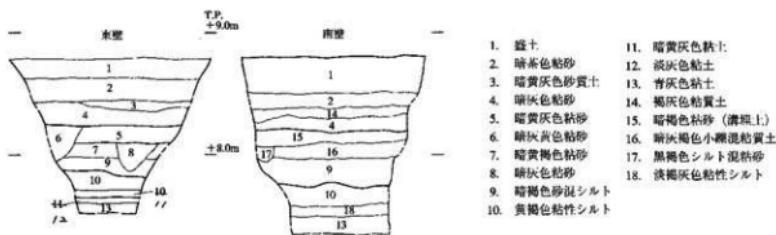
そして、地表下0.93m（TP +7.86m）の黄褐色粘性シルトとその下部層である暗黄灰色粘土の特に西壁で、庄内式期の甕が押し潰れた状態で出土した。また甕の側で甕の口縁部が見つかった。遺構等の切り込みは確認できなかったが、これら土層中には少量の炭化物が混じり、シルト層上面にも黒色の炭化物が約2cmの厚みで堆積していたことなどからみて遺構とみて間違いないであろう。



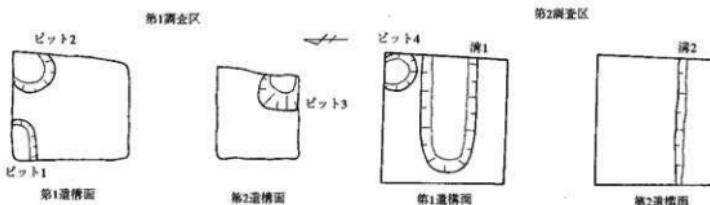
第74図 調査地周辺図（1/5000）



第75図 調査位置図 (1/500)



第76図 土層断面図 (1/40)



第77図 造構平面図 (1/40)

第2調査区・・この調査区では、中世の遺構面と庄内式期の遺構面を検出している。これは、第1調査区とはほぼ同様の結果である。

中世の遺構面は、地表下約0.6m (TP+8.2m) の暗黄灰色粘砂層をベースとして、溝1とピット4をそれぞれ検出している。両遺構とも、深さは約10cmで、埋土も暗黄灰色粘砂層の單一層であった。溝1の出土遺物としては、瓦器・土師器・須恵器・瓦の破片がある。さらに、地表下約0.65mにおいて、東西方向の溝2の一部を検出した。埋土は、暗褐色粘砂で、瓦器・瓦質土器・土師器・須恵器片が出土している。出土遺物と遺構の切り合い関係から、上面の溝1とほとんど時期差はないと考えられる。

そして、地表下約1.0m (TP+7.8m) の黄褐色粘性シルト層直上より台付壺やV様式系壺の体部片が出土している。遺構の性格はとらえることができなかつたが、何らかの遺構に伴うことは間違いないだろう。

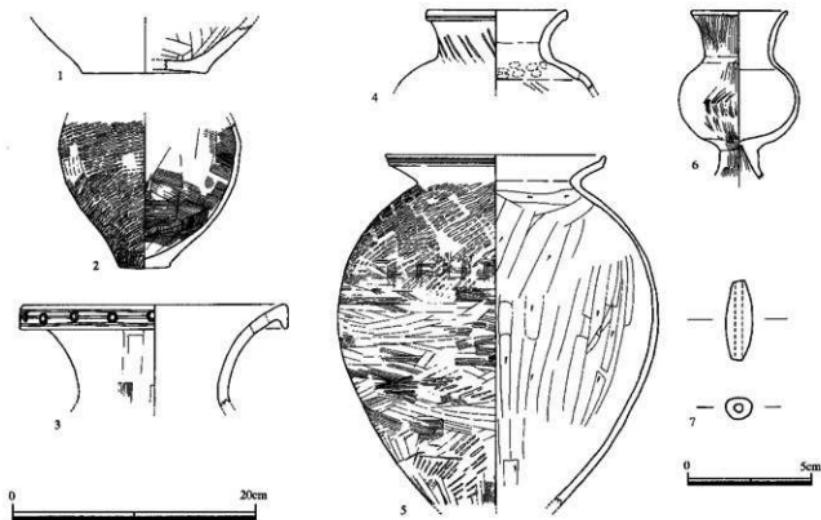
5. 出土遺物について

図化できた遺物は第1調査区は5点、第2調査区は2点である。1は暗黄褐色粘砂上面出土の須恵器の壺とみられる底部で、底径10.2cmを測る。2は暗黄褐色粘砂層中から出土した壺の体～底部で底径4.1cm、残存高11.9cmを測る。外面のタタキは細筋でナデ消している箇所がある。内面はハケを使用している。暗赤褐色を呈している。3・4は黄褐色粘質シルト上面で出土した。1は口縁端部を加飾している大型の広口壺で口径22cmを測る。垂下した口縁に3条の沈線を巡らし、竹管によるスタンプ文を施す。外面をハケ調整している。暗橙褐色を呈す。4も広口壺であるが、口径11.6cmと3よりもやや小さい。口縁端部は下に小さく肥厚し、1条の沈線が巡る。頸部から口縁にはヘラによる斜方向の線条痕がみられる。調整は不明瞭であるが、外面にはハケ痕跡が認められる。内面はナデ、頸部から体部にかけて指痕が残る。暗茶褐色を呈す。5は暗黄褐色粘質シルト～暗黄灰色粘土上面で出土した壺で、肩部に最大径をもち、口径18.2cm、残存高28.2cmを測る。「く」の字状に鋭く屈曲する頸部から外上方にのび、口縁端部は上にやや強く摘み上げる。端部外面に2条の沈線が巡る。外面はタタキの後にそれを板状工具で丁寧にナデ消しており、特に中位において顕著である。内面は頸部付近は横方向、他は縦方向のヘラケズリを行っている。暗茶褐色を呈す。6は台付き壺で、暗黄褐色砂混シルト質粘土層直上で出土した。脚部はほとんど残っておらず、壺部のみほぼ完存している。やや開きぎみであるが直立したやや短めの口縁で、外面は縦方向のヘラミガキを施している。色調は黄褐色を呈す。7は小型の土錐で、あげ土より出土しているが、おそらく6と同様に暗黄褐色砂混シルト質粘土層に帰属するものと思われる。大きさは約3cmの長さで、直径約1cmである。焼成はやや軟で、にぶい淡黄灰色を呈す。

6. 備考

図化した遺物のうち2～5の4点の胎土の砂礫を奥田尚先生に鑑定して頂いた。詳細については85頁にある先生ご自身が執筆された付論2「土器の表面に見られる砂礫」を読んで頂きたい。ここではその結果のみを記しておきたいと思う。

4点のうち壺2が河内恩智、壺3が河内平野と遺跡の近辺の胎土が使用されていたが、壺4と壺5は東部瀬戸内地域胎土が使用されているとの結果がでた。奥田先生の論文にもあるように胎土の採取地が製作地であるなら、土器の広範な移動を示す一例となる。本調査地の東北30mには中河内の庄内式土器編年の標識資料ともな



第78図 出土遺物実測図 (1/4) 土器 (1/2)

っている中田1丁目土坑があり、在地の土器に混じって山陰、阿波紀伊、北陸、攝津の他吉備など各地の土器が持ち込まれている。時期は庄内新段階であり、弥生末～庄内古段階の本資料と時期は異なるが、本調査地周辺が各地の土器を集積できる要素と状況をこの段階から備えていたことを示すものである。

本調査は極めて小さな面積を対象としたものであるが、中田遺跡の性格を伺い知るには十分な結果が得られたといえる。僅かな資料ではあるが、今後中田遺跡を考える際には貴重な資料となろう。

(第1調査区一消、第2調査区一藤井)

参考文献

奥田尚「中田1丁目出土土器の砂礫観察」・米田敏幸「中田1丁目39番地出土土器」「八尾市文化財紀要2」八尾市教育委員会 1986

18. 中田遺跡（96-487）の調査

1. 調査地 刑部2丁目177番地
2. 調査期間 平成8年11月14日
3. 調査方法 排水施設の人孔部分1ヶ所を対象として地表下約2mまで掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。
4. 調査概要 区画整理に伴うとみられる盛土層は約0.6mであり、地表下1.08mの微砂層（層厚7cm）を中心として微砂を多く含むやや不安定な土層である。

遺物が確認されるのは地表下1.2mの淡茶色微砂からで、地表下1.4mの暗灰色粘土（層厚18cm）では小片であるが瓦器、須恵器、土師器羽釜口縁部が出土した。

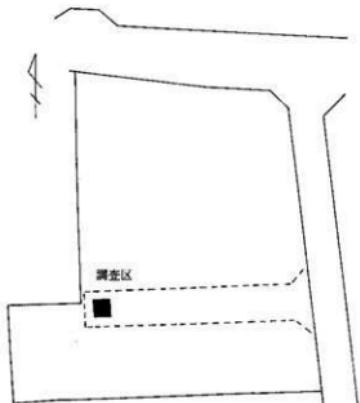
そして、この下部層である地表下1.57mの暗灰色粗砂質土上面で溝と土坑状遺構《この遺構は調査区東北隅で検出されたため、その性格が判然としないためここでは土坑状遺構とした。》を検出した。溝は幅約46cm、深さ約17cmで褐色斑暗灰色粘土を埋土としており、土師器小片が出土している。土坑状遺構は、この溝を切るような状況であった。深さ約13cmで、埋土は暗灰色粗砂混粘土である。遺構の肩で土師器壺（82図）が横になった状態でみつかった。壺は口径13.2cm、残存高16.1cmで、底部は尖り底を有するものとみられる。色調は暗茶褐色で、器壁は厚い。外面調整はナデであるが下半部にタタキ痕が残る。内面は丁寧なナデを行っている。

今回は古墳時代前期の遺構が検出されたが、本調査地では包含層出土遺物と検出遺構出土遺物の時期が異なることから、検出遺構面では幾つかの異なる時期の遺構が存在していると考えられる。今後、周辺の調査を行うことによってこのあたりの状況を明らかにしたい。

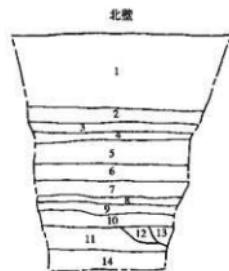
（沿）



第79図 調査地周辺図（1/5000）

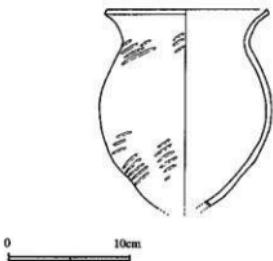


第80図 調査区設定図 (1/600)

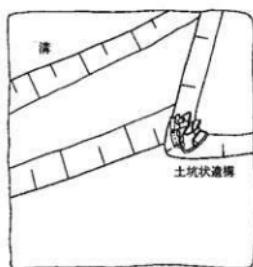


- | | |
|-------------|------------------------|
| 1. 黄土 | 8. 灰白色砂質土 |
| 2. 旧耕土 | 9. 暗灰色粘土 |
| 3. 棕色粗砂質土 | 10. 暗灰色粗砂混粘土 |
| 4. 暗茶灰色砂質土 | 11. 暗灰色粗砂質土 |
| 5. 淡茶褐色微砂質土 | 12. 雨色土、暗灰色粘土 (溝堤土) |
| 6. 淡褐色微砂 | 13. 暗灰色粗砂混粘土 (土坑状遺構埋土) |
| 7. 淡茶色微砂混粘土 | 14. 黄灰色細砂 |

第81図 土層断面図 (1/40)



第82図 出土遺物実測図 (1/4)



第83図 遺構平面図 (1/20)

19. 水越遺跡 (95-582) の調査

1. 調査地

服部川3丁目102番2

2. 調査期間

平成8年5月7日～10日・13日

3. 調査方法

本調査地は西向きの斜面になっており、現況は耕作地として利用されていた。当初、擁壁建設部分の工事に対して立ち会いを行った。この結果、東壁において地表下0.5～0.6mにある炭化物を含む灰黒色粘砂層より縄文土器と石鏃の出土を確認した。また西壁でも地表下約0.8mで炭、木片を含む灰黒色砂混粘土層から土器と石器が出土した。

これまで、本調査地周辺ではこのような縄文時代の遺構の存在は知られていなかった。そこで遺構の遺存状況を把握するために調査を実施した。調査区は、とくに多くの遺物が出土していた東壁の灰黒色粘砂層を対象とし、約5m×2mのトレンチを設定した。調査時点では既に盛土がされていたため、地表下1.5～1.7mまで掘削し、遺構面の検出を行った。なお、遺物の取り上げに際し、その位置を確認するために、第88図のように区分けして行った。

4. 調査概要

調査時点では旧地表から約0.8～1.0mの盛土がされていた。遺物包含層は地表下約1mの淡灰色細砂質土からで、この層から淡灰茶色細砂質土にかけては古墳時代の遺物も含まれている。断面で見る限りでは第7層の淡黄灰色微砂上面から切り込むピットが北壁でみられることから遺構が存在しているものと考えられる。

縄文時代のブリイマリーな包含層は第6層暗黄褐色砂質土と第8層暗茶灰色粘質土である。しかし、第8層は薄く遺物はほぼ遺構面上で多くが見つかっているため包含層の遺物と遺構面上の遺物の分離は明確ではなかった。

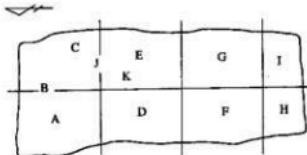
遺構面は地表下1.5m前後(TP+62.1m前後)の暗褐茶色砂質土がベースとなる。



第84図 調査地周辺図 (1/5000)



第85図 調査位置図 (1/600)



第86図 調査圧割図 (1/40)

遺構面上には土器と幾つかの拳大の石と、人頭大の石1個があった。検出できた遺構はピット6基と土坑状遺構2基である。

ピット1—東壁で検出したため、全容は不明。半円形を呈し、径は48cm以上で、深さ約7cmを測る。埋土は灰茶色微砂質土で、遺物は出土していない。

ピット2—不整円形を呈し、一部ピット3に切られている。長径約65cm、短径約40cm、深さ約11cmを測る。埋土は淡灰茶色粘砂で、遺物は土器片が5点が出土している。

ピット3—ピット2と土坑状遺構1を切るかたちで検出された。ほぼ円形を呈し、長径約35cm、短径約30cmで、深さ約14cmである。肩部で拳大の石がみられた。埋土は淡灰黒色で、土器片が9点出土している。

ピット4—ピット1と同様に東壁で検出したために全容は不明であるが、長円形を呈するとみられる。長径40cm以上、短径約50cmで、深さ約9cmを測る。埋土は淡灰色粘砂で、土器片が13点出土している。

ピット5—ピット4に切られ、ピット6を切るかたちで検出した。円形を呈し、径約24cm、深さ9cmを測る。埋土は灰黒色粘砂で、遺物は出土していない。

ピット6—ピット5に切られ、土坑状遺構1を切る形で検出した。梢円形を呈し、長径約50cm、短径約24cmで、深さ約11cmを測る。埋土は暗褐色砂質土で、土器片が6点出土している。

土坑状遺構1（SK1）—プランが方形あるいは長方形を呈すると考えられる遺構で、東側のコーナー部分を検出した。大部分は西にのびているが、既に西側は破壊されており、本来の形状は不明である。検出した一辺は約155cm、深さ約18cmを測る。埋土は2層に分けられ、上層は灰黒色粘砂、下層は灰色微砂質土で、炭化物を多量に含んでいた。拳大の石がコーナー付近でみられた。多くの土器片と石鎚及び石器剥片が出土している。

土坑状遺構2（SK2）—トレンチ北側で検出した。プランはやはり方形あるいは長方形を呈すると考えられるが、土坑状遺構1と接する南側は肩部から下場までが短く土坑状遺構1に切られていると考えられる。検出した一辺は約115cmで、深さ約10cmを測る。埋土は淡灰黒色粘砂で、土坑状遺構1ほどではないが炭化物を含んでいる。最も多くの土器片と石鎚、石器剥片が出土した。

5. 遺構について 遺構検出時にはすでに調査区は3.5m×1.4mと極小さな規模となっていたが、ビ

ット6基と土坑状遺構を2基検出することができた。しかし、これらの遺構がいずれも有機的に関連し合う状態での共時性をもっていたとは考えられない。土坑状遺構1は土坑状遺構2を切って構築されていると考えられ、また詳細は後述にゆずるが、出土遺物からみても中期末期に位置づけられる土器が多く含む土坑状遺構2は他の遺構とは時期が異なることは明らかである。土坑状遺構1については多くの遺物が出土しているが施文状況が判別する良好な資料は少ない。またピット3・6出土遺物は時期が明確となるものは少ないが、中期末期から後期前葉まで遺物を含んでおり、時期幅が存在している。

次にこれら遺構の性格であるが、やはり調査面積が小規模なことからそれは容易ではない。しかし、次の2点をもって住居に関連した遺構であるといえる。第1に土坑状遺構に多量の炭化物が混じっていたことである。これは明らかに人為的あるいは人が介在した偶発的な焼成の痕跡である。第2に遺構埋土や遺構周辺から石器作製時における細部調整の際に生じたチップが多く見つかっていることである。これは当地で石器を作製していたことを示す材料となる。このようなことから調査地点は居住域であることは間違いない、状況的にみて、住居に関連する遺構とみるとことは現段階では選択肢の一つとなり得ると考えている。

7. 出土遺物について

今回出土した遺物はすべて破片であり、完形に復元できるものはなかった。またその器形が明確に推定できるものもなかった。このため、施文方法や特徴から型式が判別できるとものとできないものを分け、前者は型式をもって、後者は施文方法や特徴から併せてここにグルーピングした。以下各特徴について述べていく。

I グループ（1～10）・・北白川C式属するものである。1～3は口縁部で、いずれも口縁端部下に横位の沈線を巡らしている。1・2は体部にも縦位の4条の沈線がみられる。また、2は口縁端部下の沈線に長梢円の刺突文をもち、体部の沈線の周位には縄文が確認できる。3は縦位のR L縄文が施されている。4～10は深鉢の体部とみられ、4～8は相対する3条の沈線で区画し、内に縦方向の縄文を施している。区画外は斜方向の縄文を施している。然りはR LとL Rの2種がある。9は3条の縦位の沈線を施し、これを半円あるいは長梢円とみられる沈線が切っている。11は深鉢の底部。

II グループ（12・13）・・北白川上層式に属するものである。12は端部が丸く、表面は無文である。13は深鉢の体部で、半截竹管による集合沈線がみられる。

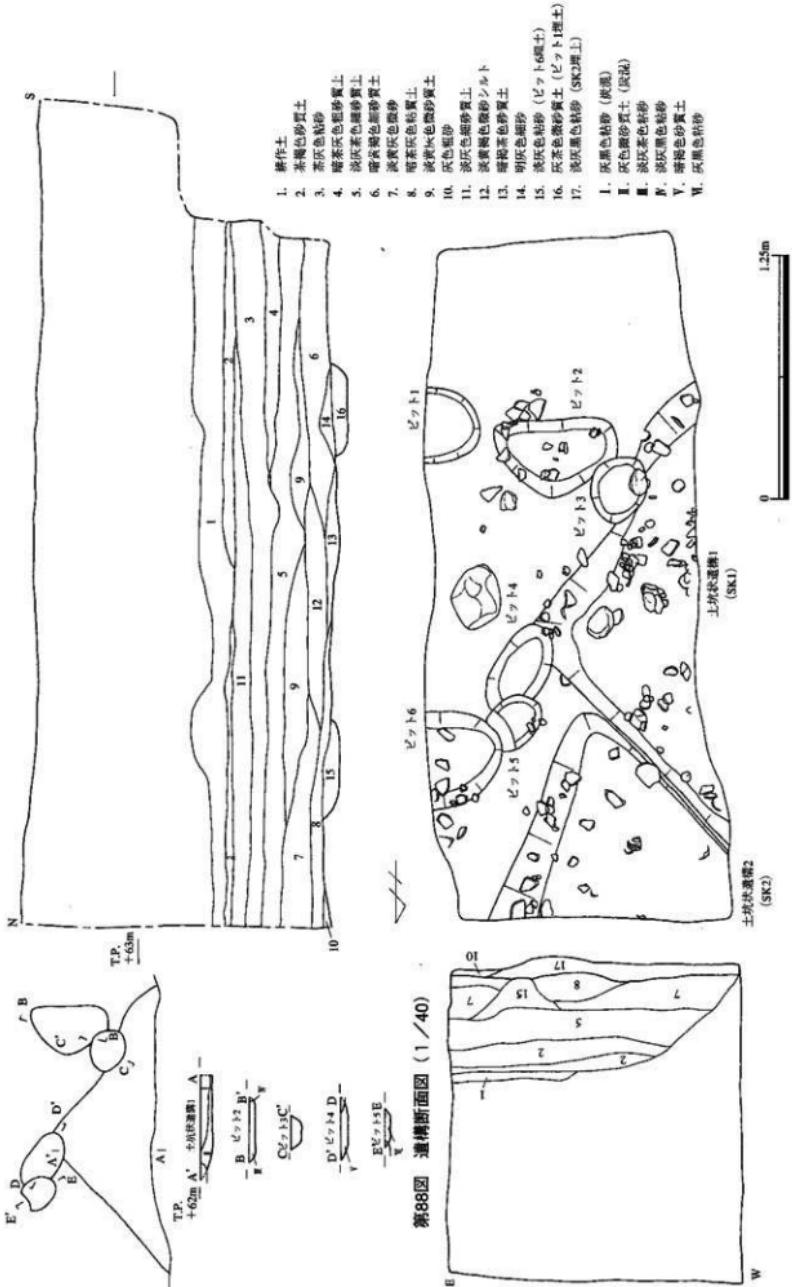
III グループ（14～16）・・北白川上層の可能性をもつものである。14は半截竹管を使用した可能性がある条線をもつ。15・16は長梢円の沈線を有するものである。

IV グループ（17）・・・深鉢とみられ、横位に無節の縄文を3段に施すもの。

V グループ（18）・・・R Lの縄文を施し、その下に1条の沈線が巡る。また卷貝による条痕文がみられる。

VI グループ（19）・・・元住吉I式へ一乘寺K式に属するもの。口縁端部はやや凹面をなし、体部は二枚貝条痕文がみられる。

VII グループ（20・21）・・口縁が波状形を呈すると考えられる深鉢で、棒状工具による3条の沈線と円形の沈線を施す。下部には横位のL Rの縄文がみられる。



第88図 遺構断面図 (1/40)

第87回 王脣断面及び構造圖 (1/25)

VIIグループ (22・23) ・・粗製土器。粗い胎土で作られており、条痕がみられる。次に小片のため上記の分類に当てはめられないものをIXグループ、特徴のある形をしているものをXグループ、そして底部のみをXIグループとした。

IXグループ (24~31) ・・24・25は条線を施している土器片で、13と同一の可能性がある。26は沈線を有する土器片。27は縄文を施す土器片。28は表面を磨いている土器片。29は貝殻による条痕をもつ土器片。30・31は同一個体と考えられ、条線を施している。

Xグループ (32~34) ・・32は把手部分とみられる土器片。33は土器の突起あるいは口縁部の装飾部分とみられる土器片。34は口縁部の装飾部分と考えられる土器片である。

XIグループ (35~37) ・・底部片。

以上、11のグループに分けた。時期的には幅があり、中期末から後期中葉を中心である。なお遺物の法量、出土位置については観察表にまとめてあるので参照してもらいたい。

石器は石鎌 (38~41) とサヌカイト剥片42、そして石錘43等が出土している。石鎌はいずれもサヌカイトを用いており、無茎の凹基式(38・39)と半基式(40・41)の2種類がある。凹基式の鎌は細かく打ち欠いて鋭利な刃部を作り出している。鎌身は2.0 cm ~ 2.5 cmである。重さは38が0.58 g、39が0.65 g、40が0.9 g、41が2.3 gである。凹基式の2点はいずれも軽く、遠くへ飛ばせない。近距離での使用に用いたものであろう。石錘43は砂岩を用いた打欠石錘で、両端を打ち欠いて紐掛け部をつくり出している。重さは21.2 gである。

8. 土器の胎土について

出土土器の胎土について八尾市立曙小学校教諭奥田尚先生に観察して頂いた。詳細については78頁の先生自身が書かれた付論1「縄文土器の表面にみられる砂礫」を読んで頂きたい。ここでは結果のみを記しておく。

図化した資料38点の中、30点について胎土を見て頂いたが、そのうち13点が河内恩智あるいは恩智と思われるもの、14点が高安山麓、播磨が2点、調査地点の河内水越が1点との結果がでた。資料には同一個体片が幾つか含まれていると考えられるが、それでも胎土採取地を土器の製作地とするならば、高安山麓周辺から恩智にかけてという在地ともいえる限られた範囲であることが分かる。言い換えれば、これが中期末から後期中葉にかけての縄文人の採取や土器作りなどの日常の活動範囲であったと考えることができよう。

9. まとめ

これまで八尾市では縄文時代の遺構・遺物を検出した遺跡は少なく、山賀遺跡、八尾南遺跡、田井中遺跡、そして恩智遺跡等が縄文時代の遺跡として知られている。このなかで前期から晩期まで連続と続いているのは恩智遺跡のみであり、山賀遺跡が中期から晩期、八尾南遺跡が後期から晩期、田井中遺跡は晩期のみである。こうした状況のなかで中期末から後期中葉にかけての遺構と遺物が検出されたことは八尾市の縄文時代を語るうえで貴重な成果だと思われる。

特に、生駒西麓の縄文時代の居住地域を考えるとき重要な意味をもっている。西麓でこれまで判明している中期からの遺跡は東から、東大阪市の繩手遺跡・馬場川

遺跡、八尾市の恩智遺跡、柏原市の大県遺跡がある。縄手遺跡と馬場川遺跡の距離は約1.0km、恩智遺跡と大県遺跡の距離が約2.0kmであり、恩智遺跡と馬場川遺跡の間が約4.5kmとやや離れている。これまで、郡川遺跡や大竹西遺跡、太田川遺跡などで、縄文晩期の遺物や包含層は確認されていた。しかし、中期末あるいは後期のものは見つかっておらず、恩智遺跡と馬場川遺跡とをつなぐ遺跡の存在が推定されていた。恩智遺跡と水越遺跡は約2.1km、水越遺跡と馬場川遺跡は約2.4kmであり、水越遺跡がこの空白地帯を埋める遺跡であることは間違いないであろう。これを明確にするためには遺物を比較研究することによって、両者にどのような相関関係があるか、あるいはいかが知ることが必要となる。また、遺跡の継続期間や中心となる時期を確定すること等、今後に残された課題も多い。

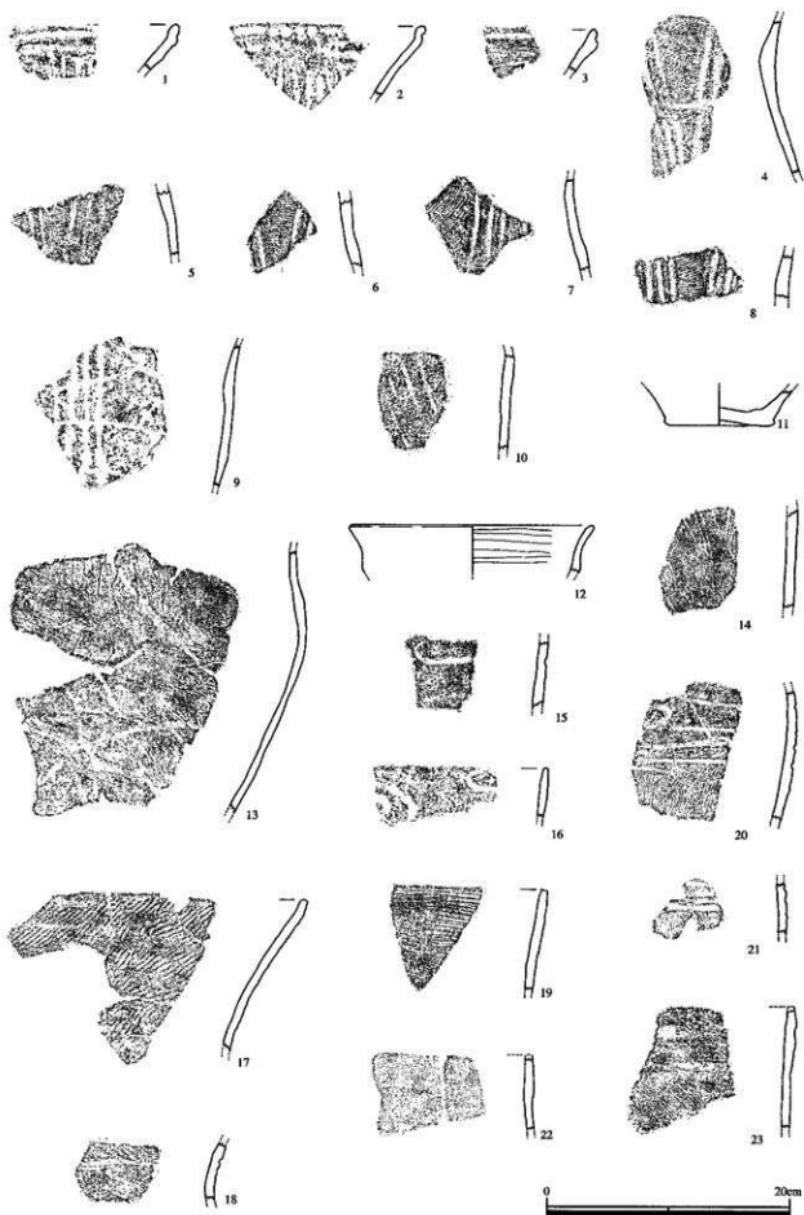
しかし、縄文時代の居住域の可能性をもつ遺構を検出したことは大きな意義をもつ。これまで縄文時代の良好な居住域として、中河内周辺では後期前半を中心とした11基の重複する竪穴住居跡と特殊石組遺構が検出した縄手遺跡と、硬玉を加工した住居跡や土坑墓、ピット群が検出されている馬場川遺跡が挙げられているが、水越遺跡もサスカイトの加工を行った居住域と考えられることから将来的な調査によつては住居跡の検出は無論、集落としても捉えることができるよう。そのためにも調査地周辺については十分な注意が必要となる。

(道)

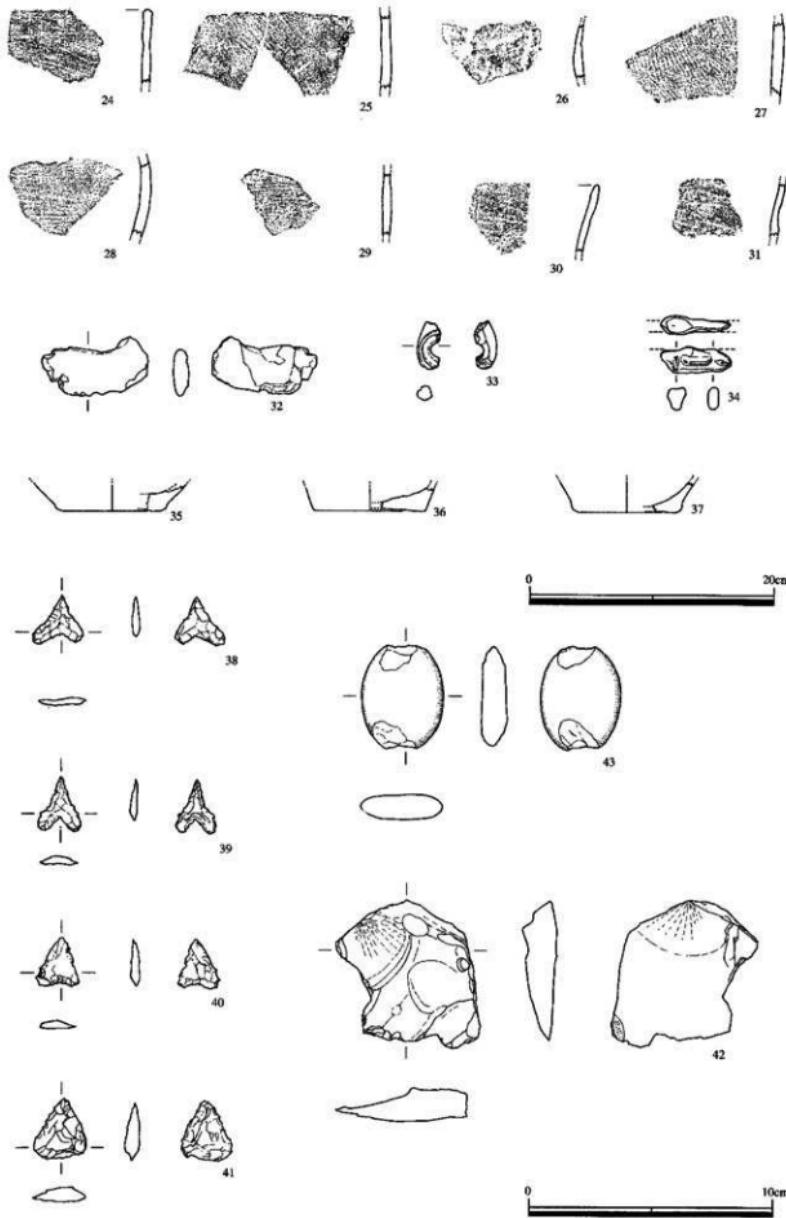
本報告に際して、大阪府教育委員会文化財保護課の大野薰氏から多くの御教示をいただきました。末筆ながら記さして頂き感謝いたします。

参考文献

- 『縄手遺跡Ⅰ』東大阪市教育委員会 1971
- 『縄手遺跡Ⅱ』東大阪市教育委員会 1976
- 『馬場川遺跡Ⅰ』東大阪市教育委員会 1977
- 『馬場川遺跡Ⅱ』東大阪市教育委員会 1971
- 『馬場川遺跡Ⅲ』東大阪市教育委員会 1975
- 『山賀遺跡(その1~6)』(財)大阪府文化財センター



第89図 出土土器実測図 (1/4)



第90図 出土土器実測図 (1/4)、(石器1/2)

土 器 觀 察 表

| 番号 | 器形 | 法量 (cm) | 施文・特徵・他 | 時期 | 分類 | 出土位置 |
|----|----|-------------|---------------------------------|-------|------|-------|
| 1 | 深鉢 | 縦4.5、横7.0 | 口縁下に横位の沈線、縱位沈線4条、2同一個体？ | 中期末 | I | SK 2 |
| 2 | 深鉢 | 縦6.8、横10.6 | 口縁下に横位の沈線と長楕円の刺突文4、縱位沈線5条 | 中期末 | I | SK 2 |
| 3 | 深鉢 | 縦4.0、横4.5 | 口縁下に横位の沈線、施門幅1.5~2 cmの縱方向のRLの繩文 | 中期末 | I | SK 2 |
| 4 | 深鉢 | 縦12.5、横7.0 | 縱位の沈線5条、縱方向LRの繩文、くびれ部分 | 中期末 | I | G |
| 5 | 深鉢 | 縦6.5、横9.0 | 縱位の沈線4条、縱方向LRの繩文 | 中期末 | I | G |
| 6 | 深鉢 | 縦7.0、横5.6 | 縱位の沈線3条、縱方向LRの繩文 | 中期末 | I | G |
| 7 | 深鉢 | 縦7.8、横8.7 | 斜方向LRの繩文、縱位の沈線3条、縱方向のLRの繩文 | 中期末 | I | G |
| 8 | 深鉢 | 縦4.0、横8.5 | 縱位の沈線6条、縱方向LRの繩文 | 中期末 | I | G |
| 9 | 深鉢 | 縦12.5、横11.2 | 縱位の沈線4条 | 中期末 | I | SK 2 |
| 10 | 深鉢 | 縦8.0、横5.5 | 半截竹管による沈線？ | 中期末 | I | |
| 11 | 深鉢 | 底径9.0、唇高3.0 | 底部凹状、調整不明 | 中期末 | I | SK 1 |
| 12 | - | 口径20.0、縦3.9 | 外面ナデ、内面は工具によるナデ | 後期~晚期 | II | ピット 3 |
| 13 | 深鉢 | 縦22.0、横16.0 | 半截竹管による集合沈線 | 後期前葉 | II | SK 2 |
| 14 | - | 縦8.0、横7.0 | 半截竹管による施文？ | 後期 | III | |
| 15 | - | 縦5.5、横6.0 | 曲線を描く沈線 | 中末~後中 | III | B |
| 16 | - | 縦5.0、横10.0 | 曲線を描く沈線2条、LR繩文 | 中末~後前 | III | B |
| 17 | 深鉢 | 縦14、横16 | 無筋のLR繩文 | 中期末 | IV | ピット 3 |
| 18 | - | 縦5.0、横6.7 | 横位の沈線、巻貝条痕文(カワニナ／ヘダタリ)、LR繩文 | 中末~後前 | V | SK 2 |
| 19 | 鉢 | 縦8.5、横7.0 | 二枚貝条痕文、口縁端部と内面をみがき、端部は水平になる | 後期中~後 | VI | |
| 20 | 深鉢 | 縦10.7、横7.5 | 棒状工具による横位の沈線5条、円形沈線、LR繩文 | 時期不明 | VII | |
| 21 | 深鉢 | 縦5.0、横6.0 | 棒状工具による横位の沈線4条、LR繩文 | 々 | VII | G |
| 22 | 深鉢 | 縦6.0、横8.5 | 粗製土器 | 後期中~ | VIII | |
| 23 | 深鉢 | 縦10.5、横8.4 | 粗製土器 | 後期中~ | VIII | |

| 番号 | 器形 | 法量(cm) | 施文・特徴・他 | 時期 | 分類 | 出土位置 |
|----|-----|------------|----------|------|----|------|
| 24 | 深鉢 | 縦6.5、横8.5 | 条線あるいは沈線 | 後中～ | IX | B |
| 25 | — | 縦14.0、横7.0 | 条線あるいは沈線 | 時期不明 | IX | ピット2 |
| 26 | — | 縦5.5、横7.5 | 沈線 | 夕 | IX | |
| 27 | — | 縦6.5 横9.0 | LR純文 | 夕 | IX | G |
| 28 | — | 縦6.5、横9.0 | 貝殻条痕文 | 夕 | IX | B |
| 29 | — | 縦6.5、横9.0 | 貝殻条痕文 | 夕 | IX | |
| 30 | 深鉢 | 縦6.0、横5.0 | 条線 | 夕 | IX | ピット3 |
| 31 | — | 縦4.5、横5.5 | 条線 | 夕 | IX | ピット3 |
| 32 | 把手部 | 縦4.8、横8.5 | ナデ | 夕 | X | C |
| 33 | 装飾部 | 縦3.8、横1.8 | ナデ | 夕 | X | |
| 34 | 装飾部 | 縦2.0 横5.7 | ナデ | 夕 | X | |
| 35 | — | 底径9.器高2.1 | 調整不明 | 夕 | XI | |
| 36 | — | 底径9.器高残1.9 | 調整不明 | 夕 | XI | |
| 37 | — | 底径9.器高残2.4 | 調整不明 | 夕 | XI | B |

付論1 「縄文土器の表面に見られる砂礫」

奥田 尚

1. はじめに

八尾市水越遺跡から出土した縄文時代中期末の土器片31資料の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。砂礫を肉眼で観察するのみであるため、粒が細かい砂や粘土の組成は識別できない。観察時、砂礫の種類、色、粒形、粒径、量等について配慮した。粒形は角、亜角、亜円、円に、粒径は目測により裸眼ではmm単位で、鏡下では0.1 mm単位で測定した。また、量については非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かの6種類に区分した。観察できた砂礫種を基に砂礫の源岩を推定し、同じような砂礫が遺跡近くで分布する地域を砂礫の採取地とした。

2. 砂礫の特徴

同定できた砂礫種は、岩石片として花崗岩、閃綠岩、流紋岩、砂岩、チャート、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、黒雲母、角閃石である。各砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色、灰色で、粒形が角、粒径が最大8 mmである。石英・長石・石英・黒雲母が噛み合っている。

閃綠岩：色は灰白色、灰色で、粒形が角、粒径が最大1 mmである。石英・角閃石・長石・角閃石・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。

流紋岩：色は灰色、暗灰色、褐色で、粒形が亜角、粒径が最大1 mmである。石基はガラス質で、黒雲母の斑晶があるものもある。

砂岩：色は褐色で、粒形が亜円、粒径が最大0.7 mmである。細粒砂からなる。

チャート：色は灰白色、灰色、暗灰色、灰褐色、赤褐色、赤茶色と様々である。粒形は亜角、亜円で粒径が最大5 mmである。

火山ガラス：無色透明で、粒径が最大0.3 mm、貝殻状である。

石英：無色透明で、粒形が角、粒径が最大3 mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石：白色、灰白色、灰白色透明、無色透明で、粒形が角、粒径が最大5 mmである。

黒雲母：金色、黒色で、金属光沢がある。粒径が最大6 mmで、粒状、板状をなす。

角閃石：黒色で、粒形が角、粒径が最大6 mmである。粒状、板状をなす。

3. 類型区分と傾向

砂礫種構成をもとに源岩を考慮して区分する。源岩を推定する場合、粒形が角で、石英・長石・黒雲母あるいは石英・長石・石英・黒雲母・長石・黒雲母、等と噛み合っていれば花崗岩や片麻状花崗岩、花崗斑岩等が碎かれた砂礫と推定し、他形の石英・長石・黒雲母等の砂礫も同様の源岩に由来するものと推定し、源岩を花崗岩質岩とした。閃綠岩質岩起源の砂礫と推定したものは、長石・角閃石・石英・角閃石・長石・角閃石・黒雲母・角閃石、等と噛み合っている岩石片や他形の角閃石・長石からなる砂礫構成を示すものである。また、花崗岩質岩起源の砂礫を主とする場合には他形の角閃石が含まれていても閃綠岩質岩起源の砂礫と推定した。流紋岩質岩起源の砂礫と推定したものは石英の斑晶が見

表1. 繩文式土器の表面に見られる砂礫（その1）

| 資料番号 | 器種 | 施 | 花崗岩 | 閃綠岩 | 流紋岩 | 30倍 拡張 | 安山岩 | 砂岩・泥岩 | チャート | 片岩 | 火山ガラス | 石英 | 長石 | 石英 | 母岩 | 焼成石 | 鉛 | 鉱物 | 陶器 骨片 |
|-------------|---------------|---|-----|-----|-----|-----------|-----|-------|------|----|-------|----|----|----|----|--------------------------|--------------------------|--------------------------|----------|
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 95-582-MK1 | L-縦 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-中 M-板 | M-中 M-板 | M-中 M-板 | |
| 95-582-MK2 | L-縦 角 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-縦 L-中 M-中 M-多 | L-中 M-多 | M-縦 L-板 板 | |
| 95-582-MK4 | L-縦 角 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-縦 L-多 L-中 L-板 | M-縦 L-板 板 | M-縦 L-板 板 | |
| 95-582-MK5 | L-縦 角 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-縦 L-縦 L-中 L-板 | S-縦 M-縦 板 板 | M-縦 L-板 板 | |
| 95-582-MK6 | L-縦 角 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-縦 L-縦 M-中 M-中 | S-縦 M-縦 板 板 | S-中 S-縦 板 板 | |
| 95-582-MK7 | L-縦 角 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-縦 M-多 E-縦 | L-中 M-縦 | S-縦 S-縦 板 板 | |
| 95-582-MK8 | L-縦 角 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-縦 L-縦 M-中 | S-縦 M-縦 板 板 | M-多 M-縦 板 板 | |
| 95-582-MK9 | L-縦 角 角 | | | | | | | | | | | | | | | L-縦 L-縦 L-縦 L-縦 | M-縦 M-縦 M-縦 M-縦 | L-非 L-縦 L-縦 L-縦 | |
| 95-582-MK10 | L-縦 角 角 | | | | | | | | | | | | | | | L-縦 L-中 L-縦 L-縦 | M-縦 M-縦 M-縦 M-縦 | S-縦 S-縦 板 板 | |
| 95-582-MK11 | L-縦 角 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-縦 M-縦 M-縦 M-縦 | M-縦 M-縦 M-縦 M-縦 | M-縦 M-縦 M-縦 M-縦 | |
| 95-582-MK12 | L-縦 角 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-縦 L-中 M-中 M-中 | M-縦 M-縦 M-縦 M-縦 | M-縦 M-縦 M-縦 M-縦 | |
| 95-582-MK13 | L-縦 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-縦 L-縦 M-中 M-中 | M-縦 M-縦 M-縦 M-縦 | L-縦 L-縦 M-縦 M-縦 | |
| 95-582-MK14 | L-縦 角 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-縦 L-中 M-中 M-中 | S-縦 M-縦 板 板 | S-縦 M-縦 板 板 | |
| 95-582-MK15 | L-縦 角 角 | | | | | | | | | | | | | | | L-縦 L-中 L-中 L-中 | M-縦 M-縦 M-縦 M-縦 | M-縦 M-縦 M-縦 M-縦 | |
| 95-582-MK16 | L-縦 角 | | | | | | | | | | | | | | | L-縦 M-縦 L-中 L-中 | L-縦 L-縦 M-縦 M-縦 | M-縦 M-縦 M-縦 M-縦 | |

表2. 繩文式土器の表面に見られる砂礫(その2)

| 資料番号 | 器種 | 石 | | | | | | | | | | 物 | | | | | 縄文型 片 |
|-------------|------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|----------|----------|-----|-----|---------------|----------|
| | | 花崗岩 | 閃綠岩 | 流紋岩 | 安山岩 | 砂岩・泥岩 | チャート | 片岩 | 火山ガラス | 石英 | 長石 | 斜長石 | 母岩 | 輝石 | 輝眼 | 輝石 | |
| 95-582-MK17 | L-傾角 | 30倍 鏡眼 | M-僅 E-滑 | L-僅 | M-僅 板 | M-僅 板 | S-微 | S-微 | I.b,d 河内恩智 | |
| 95-582-MK18 | L-傾角 | L-傾角 | L-傾角 | | | | | | | L-僅 L-中 | L-多 | M-僅 板 | L-多 | L-微 | L-微 | I.a 河内恩智 | |
| 95-582-MK19 | L-傾角 | | | | | | | | | S-微 | L-多 | M-僅 板 | M-僅 板 | L-中 | L-中 | I.b 高安山麓 | |
| 95-582-MK20 | L-傾角 | | | | | | | | | M-僅 L-多 | M-僅 S-微 | M-僅 板 | S-微 | S-微 | S-微 | I.a 河内恩智 | |
| 95-582-MK23 | | | | | | | | | | L-中 | L-僅 | M-僅 板 | L-僅 板 | M-微 | M-微 | I.b 河内恩智 | |
| 95-582-MK24 | L-傾角 | | | | | | | | | M-僅 M-中 | M-僅 M-中 | M-僅 板 | M-僅 板 | M-微 | M-微 | I.a 河内恩智 | |
| 95-582-MK25 | L-傾角 | | | | | | | | | L-僅 L-中 | L-僅 L-中 | M-僅 板 | M-僅 板 | M-微 | M-微 | I.a 河内恩智 | |
| 95-582-MK26 | L-傾角 | | | | | | | | | M-僅 M-中 | M-僅 E-滑 | M-僅 板 | M-僅 板 | M-非 | M-非 | I.a,d 恩智? | |
| 95-582-MK27 | L-傾角 | L-傾角 | L-傾角 | | | | | | | M-僅 M-中 | M-僅 E-滑 | M-僅 板 | M-僅 板 | M-中 | M-中 | I.b 高安山麓 | |
| 95-582-MK30 | L-傾角 | L-傾角 | L-傾角 | | | | | | | M-僅 M-中 | M-僅 M-中 | M-僅 板 | M-僅 板 | S-微 | S-微 | I.b 高安山麓 | |
| 95-582-MK31 | L-傾角 | | | | | | | | | M-僅 M-中 | M-僅 L-微 | M-僅 板 | M-僅 板 | S-微 | S-微 | I.b 高安山麓 | |
| 95-582-MK33 | L-傾角 | L-傾角 | L-傾角 | | | | | | | M-僅 M-中 | M-僅 L-微 | M-僅 板 | M-僅 板 | L-多 | L-多 | I.a 河内恩智 | |
| 95-582-MK35 | 斜刀彫り | L-傾角 | L-傾角 | | | | | | | M-僅 M-中 | M-僅 L-微 | M-僅 板 | M-僅 板 | L-中 | L-中 | I.b 河内恩智 | |
| 95-582-MK36 | L-傾角 | L-傾角 | L-傾角 | | | | | | | M-僅 M-中 | M-僅 L-微 | S-微 板 | S-微 板 | L-中 | L-中 | I.a 河内恩智 | |
| 95-582-MK37 | L-傾角 | L-傾角 | L-傾角 | | | | | | | L-僅 L-中 | L-僅 L-中 | M-僅 板 | M-僅 板 | M-微 | M-微 | I.b 高安山麓 | |

地圖 = 鋸びと砂礫 様相による分類: L = 粒径 2 mm 以上, M = 粒径 0.5 mm 未満, S = 粒径 0.3 mm 未満, 中 = 中等, 少 = 稀な場合がある, 多 = 複数ある, E = 自形, 共 = 共有。図は解説文の番号と同じ。調査区分は調査所の区分 (1992, 「内土器研究会」を参照)。

られる岩石片や白形の石英が含まれている場合である。更に推定される主とする源岩構成以外の砂礫種をもとにして源岩を推定して亜類型を設けた。

観察した土器の表面に見られる砂礫構成は、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするI類型と閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とするII類型、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とするIV類型である。細分すれば、Ib類型、Ibd類型、Ibg類型、IIa類型、IIad類型、IIag類型、IVagn類型となる。各類型の特徴について述べる。

Ib類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ibd類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ibg類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩やチャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IIa類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。角閃石を多く含むタイプを河内恩智、黒雲母を多く含むタイプを河内水越に区分される。

IIad類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IIag類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩やチャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVagn類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩やチャート、他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

類型に区分すれば、31資料中、I類型に属する土器片が14資料、II類型で河内恩智に属する土器片が13資料、II類型で河内水越に属する土器片が1資料、IV類型に属する土器片が3資料である。

4. 砂礫の採取推定地

土器が出土した水越遺跡は高安山の西山麓に位置し、当遺跡の東には生駒山から高雄山へと続く生駒山地がある。この山地に分布する岩石種には地域性がある。暗峠から高安山にかけては片麻状黒雲母花崗岩や斑状黒雲母花崗岩が分布し、高安山から南方の黒谷にかけては縞状をなす細粒の片麻状黒雲母花崗岩が分布し、その南に斑状黒雲母花崗岩が分布する。柏原市の高雄山から平尾山にかけては黒雲母花崗岩や斑状黒雲母花崗岩が分布する。このような分布の中に岩体として斑櫛岩や閃緑岩が分布する。生駒山付近から暗峠にかけて斑櫛岩が、八尾市樂音寺付近や高安山北方、恩智神社の東方、柏原市平尾山にはルーフペンダント状に閃緑岩の岩体が分布する。山麓には段丘が発達する。

以上のような岩石・地層の分布の影響を受けて、河川に見られる砂礫や沖積層の砂礫には特色がある。河川には後背地の岩石や地層の分布面積に関係した量の砂礫が供給されていると推定される。大東市から東大阪市の石切にかけては、花崗岩が媒乱した花崗岩片、石英、長石、黒雲母からなる砂礫を主体とし、僅かに他形の角閃石が含まれる。このような砂礫は八尾市の神立付近や高安山から平尾山にかけての山麓にもみられる。八尾市大窪や恩智付近では角閃石の量が多くなり、閃緑岩片や輝石がみられることがある。東大阪市客坊谷の後背地は斑櫛岩の分布地に相当するため、長石、角閃石、輝石を主とし、ごく僅かに橄欖石や黒雲母、石英が含まれる。生駒西麓の胎土として角閃石の量を挙げている場合が多いが、生駒西麓の胎土として客坊谷付近の砂礫と言おうとすれば、特徴として角閃石の量ではなく、他

形の輝石と橄欖石の有無を探り上げるほうがより的確である。大和川は奈良盆地周辺の山々を後背地にもち、比較的長い距離を流れているため、長石が少なく、石英が多い。また、チャートや自形の石英も僅かに含まれる。亀ノ瀬付近には安山岩が分布するが、柏原市船橋付近になればほとんど認められなくなる。石川と合流した後でも、長石より石英が多い。

このような砂礫分布を基にして、土器に含まれる砂礫とを比較する。

高安山麓とした砂礫は I b 類型、 I bd 類型、 I bg 類型に属するものに含まれる。砂礫構成は花崗岩質岩起源と推定される角ばった砂礫を主とし、比較的長石が多く、チャートが僅かに含まれる場合、自形の石英や他形の角閃石が僅かに含まれる場合がある。生駒山地の山麓には段丘が発達しており、山地から流れ出した砂礫と段丘の砂礫が山麓では混じり合うことから僅かの量であるがチャートや自形の石英が含まれる場合がある。大和川の砂礫となれば、長石の量が少なくなる。

河内恩智とした砂礫は II a 類型、 II ad 類型、 II ag 類型に属するもので、他形の角閃石が多いものである。河内庄内型甕にみられるような媒乱した砂礫ではなく、媒乱砂が流出した砂礫と花崗岩質岩起源の砂礫とが混じり合ったような砂礫である。八尾市恩智付近の砂礫と推定される。

河内水越とした砂礫は II a 類型に属し、黒雲母が多く、比較的石英が少ない砂礫である。八尾市水越ら大窪にかけての砂礫と推定される。

播磨とした砂礫は IVagn 類型に属するものである。石英が非常に多く、且つ、自形のものが多く、流紋岩質岩や花崗岩質岩の砂礫、チャート、砂岩、角閃石の砂礫が僅かに含まれる。加賀地方の流紋岩質岩起源の砂礫よりも播磨付近の砂礫に砂礫相的に似ている。

註

1. 奥田尚・米田敏幸「土器の胎土分析方法について」『古代学研究』99(1983)
2. 奥田尚「河川の砂礫とその類型」『庄内式土器研究Ⅱ』庄内式土器研究会(1992)

20. 矢作遺跡（95-739）の調査

1. 調査地

八尾市松山町2丁目4番地1～4

2. 調査期間

平成8年4月3日

3. 調査方法

施工予定地内の污水外設置部分の2箇所に約2m四方の調査区を設定し、地表下1.4～2.0m前後まで、重機と人力を併用して掘削した。

4. 調査概要

東側調査区では地表下1.35～1.65mで、平安時代頃の須恵器片、土師器片を含む茶灰色粘砂層を確認した。この土層からは須恵器の長頸壺の破片が出土している。この土層は当調査区の南壁で確認すると、地表下1.5mの褐色茶色微砂層上面から切り込む深さ0.2～0.3m前後の遺構になるかとみられる。西側調査区では地表下0.7m～0.95mで須恵器片、土師器片、瓦器片を含む褐色斑灰白色粘砂層を確認した。さらにその下の地表下0.95m～1.4mで、土師器片、須恵器片、及び製塙土器片を含む茶灰色粘砂層を確認した。西調査区で確認した茶灰色粘砂層は東側調査区でも確認しているが、西側調査区では0.4m近く高いレベルで確認しており、対応関係は判然としない。

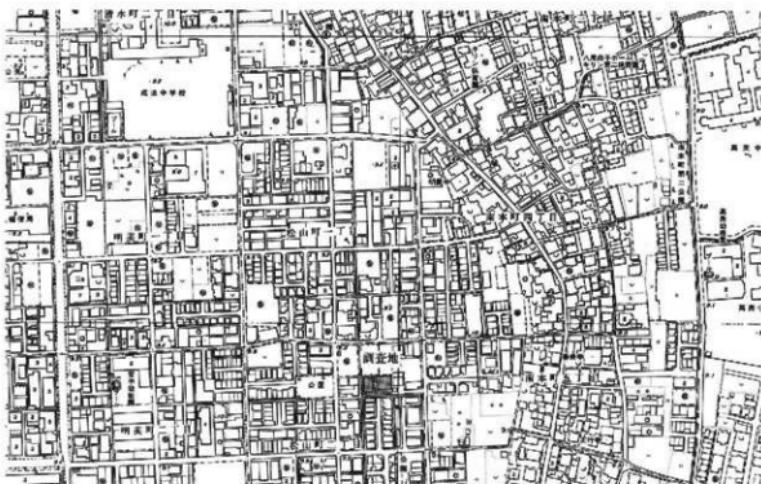
5. 出土遺物

1は須恵器の長頸壺である。残存高は9.2cm、肩部の径は17.0cmを計る。調整はロクロナデである。色調は灰色～暗灰色を呈する。焼成は非常に硬質で、胎土はやや精良である。2は土師器の手の字状口縁の皿である。口径は12.0cm、残存高は1.5cmを計る。調整はナデ調整である。色調は乳白燈色、焼成は軟質である。

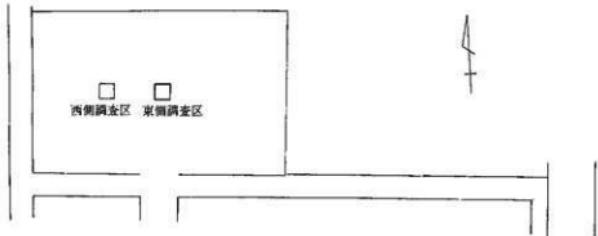
6. まとめ

今回の調査地では平安時代と鎌倉時代の包含層及び平安時代の遺構面を確認した。周辺では南本町8丁目で平安時代中期～後期の遺構、遺物を確認しており、これとの関連が注意される。

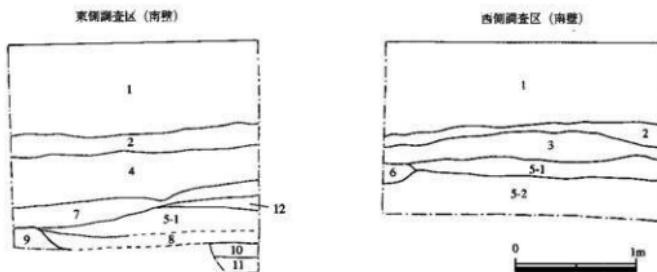
(吉田野々)



第91図 調査地周辺図 (1/5000)



第91図 調査区設定図 (1/600)



1. 暗灰茶色砂 (盛土)
2. 田耕土
3. 灰褐色灰白色粘砂 (土器碎片含む) (遺構埋土)
4. 灰青色粘砂
- 5-1. 茶灰色粘砂 (土器碎片、須恵器片含む)
- 5-2. 茶灰色粘砂 (粘性少、砂多)
6. 淡茶色粘質土
7. 灰茶色粗砂
8. 茶灰色微砂シルト (遺構埋土)
9. 暗灰茶色微砂
10. 茶灰色粘土
11. 灰青色粗砂
12. 灰茶色粘砂

第93図 調査区土層断面図 (1/40)



(1. 東側調査区 茶灰色粘砂 2. 西側調査区 橙色斑灰白色粘砂 出土)

第94図 出土遺物実測図 (1/4)

付論2 「土器の表面に見られる砂礫」

奥田 尚

1.はじめに

八尾市久宝寺遺跡、郡川遺跡、小阪合遺跡、中田遺跡等から出土した庄内式併行期の土器の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。⁽¹⁾ 表面に見られる砂礫を肉眼で観察するのみであるため、粒が細かい砂や粘土の組成は識別できない。観察時、砂礫の種類、色、粒形、粒径、量等について配慮した。粒形は角、亜角、亜円、円に、粒径は目測により裸眼ではmm単位で、鏡下では0.1 mm単位で測定した。また、量については非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かの6段階に区分した。観察できた砂礫種を基に砂礫の源岩を推定し、同じような砂礫が遺跡近くで分布する地域を砂礫の採取地とした。

2. 砂礫の特徴

同定できた砂礫種は、岩石片として花崗岩、閃綠岩、流紋岩、チャート、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。各砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大6 mmである。石英・長石・石英・黒雲母が噛み合っている。

閃綠岩：色は灰白色、灰色で、粒形が角、粒径が最大6 mmである。石英・角閃石・長石・角閃石・石英・長石・角閃石が噛み合っている。

流紋岩：色は灰白色、淡灰色、灰色、暗灰色、褐色、黒色、淡桃色、茶褐色、無色透明、灰色透明、淡茶褐色透明で、粒形が角、亜角、粒径が最大6 mmである。石基はガラス質で、石英や長石の斑晶があるものもある。

チャート：色は灰白色、灰色、暗灰色、褐色、黄褐色で、粒形が亜角、亜円、粒径が最大4 mmである
火山ガラス：無色透明、黒色透明で、粒径が最大0.7 mm、フジツボ状、貝殻状である。

石英：無色透明、赤色透明で、粒形が角、粒径が最大2 mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石：灰白色、灰白色透明、無色透明で、粒形が角、粒径が最大5 mmである。

黒雲母：金色で、金属光沢がある。粒径が最大1.5 mmで、板状をなす。

角閃石：黒色、茶褐色で、粒形が角、粒径が最大3 mmである。粒状、板状をなす。結晶面が見られるものの、自形をなすものがある。

輝石：黒色透明、褐色透明で、粒形が角、粒径が最大0.3 mmである。短柱状、柱状、粒状をなし、自形を示すものもある。

3. 類型区分と傾向

砂礫構成をもとに源岩を考慮して類型に区分する。源岩を推定する場合、砂礫構成から主とする源岩を推定して主類型を設定し、推定される主とする源岩構成以外の砂礫種をもとに源岩を推定して亜類型を設けた。

観察した土器資料は僅かに26資料であるが、表面に見られる砂礫種構成は花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするI類型と閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とするII類型、流紋岩質岩起源と推定

表1. 古式土師器の表面に見られる砂礫

表2. 古式土師器の表面に見られる砂礫（その2）

| 資料番号 | 器種 | 岩 | | 石 | | | | | | 物質 | | | | | | 総計 の骨片 |
|----------------|----|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-------------------|-------------------|-------------------|------------|------------|------------|---------------------|
| | | 花崗岩 | 閃綠岩 | 流紋岩 | 安山岩 | 矽岩・泥岩 | チャート | 片岩 | 火山ガラス | 石英 | 長石 | 雲母 | 角閃石 | 輝石 | 緑泥石 | |
| 95-275-K 図1 | 巖 | | | 30倍 糊眼 | 30倍 糊眼 | 30倍 糊眼 | 30倍 糊眼 | 30倍 糊眼 | 30倍 糊眼 | N e 褐色 |
| 95-275-K 図2 | 巖 | L-糊 糊角 | L-糊 糊角 | | | | | | | M-中 E-中 | M-強 M-強 | M-強 M-強 | M-強 M-強 | S-強 S-強 | S-強 S-強 | I b 高安山麓 河内温泉 |
| 95-275-K 図3 | 巖 | L-糊 糊角 | L-糊 糊角 | | | | | | | M-強 M-強 | M-強 M-強 | M-強 M-強 | M-強 M-強 | L-強 L-強 | L-強 L-強 | |
| 96-407-K 図6 | 巖 | | | | | | | | | M-多 M-少 M-少 | M-中 E-中 | M-強 M-強 | M-強 M-強 | S-微 S-微 | S-微 S-微 | N e 褐色 |
| 96-407-K 図7 | 巖 | | | | | | | | | M-少 M-少 M-少 | M-中 E-中 | M-強 M-強 | M-強 M-強 | S-強 S-強 | S-強 S-強 | N e 褐色 |
| 96-407-K 図8 | 巖 | | | | | | | | | M-少 M-少 M-少 | M-中 E-中 | S-強 S-強 | S-強 S-強 | S-強 S-強 | S-強 S-強 | M n 褐色 |
| 95-510-K 図2 | 巖 | M-糊 糊角 | L-糊 糊角 | | | | | | | M-強 M-強 M-強 | M-中 E-中 | M-強 M-強 | M-強 M-強 | S-強 S-強 | S-強 S-強 | T bd 河内平野 |
| 95-510-K 図3 | 巖 | L-糊 糊角 | L-糊 糊角 | | | | | | | M-強 M-強 M-強 | M-中 E-中 | M-強 M-強 | M-強 M-強 | M-中 M-中 | M-中 M-中 | I a 河内平野 |
| 95-510-K 図4 | 巖 | L-糊 糊角 | L-糊 糊角 | | | | | | | M-強 M-強 M-強 | M-中 E-中 | M-強 M-強 | M-強 M-強 | S-非 S-非 | S-非 S-非 | I a 東京港内 |
| 95-510-K 図5 | 巖 | L-糊 糊角 | M-糊 糊角 | | | | | | | L-強 L-強 L-強 | M-強 M-強 M-強 | L-強 L-強 L-強 | M-中 M-中 | M-非 M-非 | M-非 M-非 | I a 東京港内 |

される砂礫を主とするIV類型である。細分すれば、I b 類型、I bd 類型、I bdg 類型、I bg 類型、II a 類型、II ad 類型、II d 類型、IVan 類型、IVe 類型、Veg 類型、IVn 類型となる。

各類型の特徴について述べる。

I b 類型: 花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

I bd 類型: 花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

I bdg 類型: 花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

I bg 類型: 花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃綠岩質岩起源と推定される砂礫、チャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

II a 類型: 閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。角閃石には結晶面が見られるものもある。砂礫相的に河内恩智と讃岐に区分される。

II ad 類型: 閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

II d 類型: 閃綠岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVan 類型: 流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

IVe 類型: 流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、角閃石や輝石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。角閃石や輝石には自形を示すものもある。砂礫相的に播磨と加賀南部に区分される。

Veg 類型: 流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、チャートや角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。角閃石には自形を示すものがある。

IVn 類型: 流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、他形の角閃石や輝石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に播磨と加賀南部に区分される。

4. 砂礫の採取推定地

土器が出土した郡川遺跡は高安山の西山麓に位置し、他遺跡は平野部に位置する。生駒山地に分布する岩石には地域性がある。暗峰から高安山にかけては片麻状黒雲母花崗岩や斑状黒雲母花崗岩が分布し高安山から南方の黒谷かけては縞状をなす細粒の片麻状黒雲母花崗岩が分布し、その南に斑状黒雲母花崗岩が分布する。柏原市の高雄山から平尾山にかけては黒雲母花崗岩や斑状黒雲母花崗岩が分布する。このような岩石分布の中に岩体として斑櫛岩や閃綠岩が分布する。牛駒山付近から暗峰にかけて斑櫛岩が、八尾市楽音寺付近や高安山の北方、恩智神社の東方、柏原市平尾山にはルーフベンダント状に閃綠岩の岩体が分布する。山麓には段丘が発達する。

以上のような岩石・地層の分布の影響を受けて、河川に見られる砂礫や沖積層の砂礫には特色がある。河川には後背地の岩石や地層の分布面積に関係した量の砂礫が供給されていると推定される。大東市から東大阪市の石切にかけては、花崗岩が媒乱した花崗岩片、石英、長石、黒雲母からなる砂礫を主とし僅かに他形の角閃石が含まれる。このような砂礫は八尾市の神立付近や高安山から平尾山にかけての山麓にもみられる。八尾市大窪や恩智付近では角閃石の量が多くなり、閃綠岩片や輝石がみられることもある。東大阪市客坊谷の後背地は斑櫛岩の分布地に相当するため、長石、角閃石、輝石を主とし、ごく

表2. 器種と類型

| 類型 | 出土地点 | 久宝寺遺跡 | | | | 郡川遺跡 | | 小阪合 | | 中田遺跡 | |
|----------|---------|-------|----|----|----|------|---|-----|---|------|---|
| | | 甕 | 壺 | 高坏 | 器台 | 甕 | 壺 | 甕 | 壺 | 甕 | 壺 |
| I 類型 | b 高安山麓 | | | | | 1 | | | | | |
| | bd 河内平野 | | | | | | | | | 1 | |
| | bdg 土師器 | | | 2 | 1 | | | | | | |
| | bg 河内平野 | | 1 | | | | | | | | |
| II 類型 | a 河内恩智 | 1 | | | | | 1 | | | 1 | |
| | 東部瀬戸内 | | | | | | | | 1 | 1 | |
| | ad 吉備 | 1 | | 1 | | | | | | | |
| | d ? | | 1 | | | | | | | | |
| IV 類型 | an ? | | | | | | | | | | |
| | e 播磨 | 2 | | | | | | 2 | | | |
| | 加賀南部 | 4 | | | | | | | | | |
| | eg 播磨 | | | | | 1 | | | | | |
| n | 播磨 | | | | | | | 1 | | | |
| | 加賀南部 | 1 | | | | | | | | | |
| | ? | | | 1 | | | | | | | |
| | 小計 | 9 | 2 | 3 | 2 | 1 | 2 | 3 | 2 | 2 | |
| 合計 | | | 16 | | | 3 | 3 | | 4 | | |

僅かに橄欖石や黒雲母、石英が含まれる。大和川は奈良盆地周辺の山々を後背地にもち、比較的長い距離を流れているため、長石が少なく、石英が多い。また、チャートや自形の石英も僅かに含まれる。このような砂礫分布を基にして、土器に含まれる砂礫とを比較する。

高安山麓とした砂礫は I b 類型に属するものに含まれる。砂礫構成は花崗岩質岩起源と推定される角ばった砂礫を主とし、比較的長石が多い。山地から流れ出した砂礫と推定される。土器の出土地が郡川遺跡であることから遺跡付近の砂礫といえる。

河内恩智とした砂礫は II a 類型に属するもので、他形の角閃石が多く、閃綠岩質岩が媒乱したような砂礫である。八尾市恩智神社の東方付近が砂礫の採取地と推定される。

河内平野とした砂礫は I bd 類型、 I bg 類型に属するものに含まれる。花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするが、石英が多く、比較的長石が少ない。河内平野の西部になればチャートや砂岩、泥岩が比較的多くなる。久宝寺遺跡出土の甕(11)は遺跡付近の砂礫構成を示している。

土師里とした砂礫は I bdg 類型に属するものに含まれる。花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするが、石英に比べて長石が比較的多い。チャートや自形の石英が僅かに含まれ、砂岩や泥岩も僅かに含まれることもある。藤井寺市土師里遺跡付近の砂礫や東方の石川の砂礫に似ている。

東部瀬戸内とした砂礫は IV e 類型、 IV eg 類型、 IV n 類型に属するものに含まれる。石英が非常に多く、且つ自形の石英が多い。流紋岩質岩は灰白色、灰色をなすものが多い。稀に、チャートや砂岩、泥岩が含まれる。砂礫相的に市川から伊吹川にかけての付近の播磨地方の砂礫と推定される。

東部瀬戸内とした砂礫は II a 類型に属するものに含まれる。結晶面がある角閃石が多く含まれ、砂礫粒が水洗されたように美しい。閃綠岩質岩起源の砂礫と推定される。高松市岩出尾山南方付近の砂礫に似ている。

加賀南部とした砂礫は IV e 類型、 IV n 類型に属するものに含まれる。淡灰色、茶褐色、淡桃色、褐色

黒色等と色とりどりの流紋岩質岩粒や自形の石英が多く、角閃石や輝石が僅かに見られる。岩相的に加賀南部梯川流域の砂礫に似ている。

5. おわりに

僅か4遺跡、26資料しか観察していないが、観察した古式土師器に含まれる砂礫は遺跡付近の砂礫構成を示すものが僅かで、加賀、播磨、瀬戸内、吉備等と河内を中心とした各地の砂礫構成を示している。また、河内平野内でみれば、土師里付近や恩智と小地域内でも各地の砂礫構成を示している。砂礫の採取地が古式土師器の製作地であるとすれば、各地から古式土師器が運ばれていることになる。

註

1. 奥田尚・米田敏幸「土器の胎土分析の方法について」『古代学研究』99 (1983)
2. 奥田尚「河川の砂礫とその類型」『庄内式土器研究会Ⅱ』庄内式土器研究会 (1992)

報告書抄録

| ふりがな | やおしないいせきへいせい 8ねんどはくつちょうさはうこくしょ | | | | | | |
|--------|-------------------------------------|-------|------|-------------------|--------------------|--------------------------------|-------|
| 書名 | 八尾市内道路平成8年度発掘調査報告書Ⅰ | | | | | | |
| 圖書名 | 平成8年度国庫補助事業 | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 八尾市文化財調査報告 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 3 6 | | | | | | |
| 編著者名 | 米田敏幸・道義・吉田珠乃・吉田珠己・藤井淳弘 | | | | | | |
| 編集機関 | 八尾市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒581 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 ☎ 0729-91-3881 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦1997年3月31日 | | | | | | |
| 所轄道路名 | 所 在 地 | コ ド | 北 緯 | 東 緯 | 調査期間 | 調査面積 (m ²) | 調査原因 |
| | | 市町村 | 道跡番号 | | | | |
| 新都道跡 | 大阪府 八尾市 春日町 | 27212 | | 34° 36° 50° | 135° 35° 33° | 1996.12.12 | 21.78 |
| 老原道跡 | 八尾市 老原 | 27212 | | 34° 36° 15° | 135° 36° 25° | 1995.10.27, 30, 31 | 27 |
| 太田道跡 | 八尾市 太田 | 27212 | | 34° 35° 20° | 135° 35° 35° | 1996.09.27 1996.10.24 | 19.4 |
| 慈智道跡 | 八尾市 慈智町 | 27212 | | 34° 36° 15° | 135° 37° 50° | 1996.09.25 | 4 |
| 久宝寺道跡 | 八尾市 久宝寺 | 27212 | | 34° 37° 20° | 135° 35° 20° | 1996.06.06 | 2.25 |
| 鶴川道跡 | 八尾市 黒谷 | 27212 | | 34° 37° 25° | 135° 38° 45° | 1996.09.12 1997.01.10 | 10 |
| | 鶴川 | 27212 | | 34° 37° 10° | 135° 38° 35° | 1996.10.29 | 8 |
| 小坂谷道跡 | 八尾市 青山町 | 27212 | | 34° 37° 15° | 135° 36° 40° | 1996.07.22, 23 | 7 |
| | 青山町 | 27212 | | 34° 37° 20° | 135° 36° 45° | 1996.10.07 | 13.52 |
| 萬安古墳群 | 八尾市 墳内 | 27212 | | 34° 36° 45° | 135° 38° 25° | 1996.01.30, 31 | 230 |
| | 鶴川 | 27212 | | 34° 37° 00° | 135° 38° 45° | 1996.02.13~16 1996.02.19~21 | 160.5 |
| 東郷道跡 | 八尾市 東本町 | 27212 | | 34° 37° 25° | 135° 36° 25° | 1996.03.07 | 18.25 |
| | 桜ヶ丘 | 27212 | | 34° 37° 40° | 135° 36° 40° | 1996.06.25 | 8 |
| | 桜ヶ丘 | 27212 | | 34° 37° 40° | 135° 36° 45° | 1996.10.09 | 11.5 |
| | 北本町 | 27212 | | 34° 37° 40° | 135° 36° 20° | 1996.10.31 | 10 |

| 所取遺跡名 | 所 在 地 | コ 一 下 市町村 遺跡番号 | 北 緯 度 | 東 緯 度 | 調査期間 | 調査面積 (m ²) | 調査原因 |
|-------|---------|-------------------|---|--|-----------------------------|---------------------------|-------------------|
| 中田遺跡 | 八尾市 中田 | 27212 | 34° 37' 00" 34° 37' 00" 34° 36' 40" | 135° 37' 05" 135° 37' 00" 135° 36' 20" | 19951113,14 19952227,28 | 13.8 | 配電管路桿設工事に伴う遺構確認調査 |
| | 中田 | 27212 | | | 19961108 | 3.4 | 分譲住宅建設に伴う遺構確認調査 |
| | 別部 | 27212 | | | 19961114 | 4 | 宅地造成工事に伴う遺構確認調査 |
| 水越遺跡 | 八尾市 藤井川 | 27212 | 34° 37' 20" 34° 37' 35" | 135° 38' 35" 135° 36' 20" | 19960507~10, 19960513 | 10 | 専用住宅建設に伴う遺構確認調査 |
| 矢作遺跡 | 八尾市 松山町 | 27212 | | | 19960403 | 8 | 分譲住宅建設に伴う遺構確認調査 |
| 所取遺跡名 | 所取遺跡名 | 主な時代 | 主 な 遺 構 | | 主 な 遺 物 | 特記事項 | |
| 跡部遺跡 | 集落 | 弥生時代～古墳時代 | 土器集積 潟 土坑 包含層 | | 弥生土器 | | |
| 若原遺跡 | 集落 | 中世 | 井戸 潟 土坑 ピット 包含層 | | 土師器 瓦器 | | |
| 太田遺跡 | 集落 | 古墳時代 | 住居跡 焼土坑 滑状遺構 土坑 包含層 | | 土師器 須恵器 製塙土器 | | |
| 恩智遺跡 | 集落 | 弥生時代 | 包含層 | | 弥生土器 | | |
| 久宝寺遺跡 | 集落 | 弥生時代～古墳時代・近世 | 溝 土坑 包含層 | | 弥生土器 庄内式土器 布留式土器 土師器 福器 | | |
| 郡川遺跡 | 集落 | 弥生時代 | 土坑状遺構 包含層 | | 弥生土器 | | |
| | 集落 | 鍛冶時代 | 溝状遺構 包含層 | | 土師器 須恵器 瓦器 | | |
| 小阪合遺跡 | 集落 | 古墳時代 | 溝 土坑状遺構 包含層 | | 庄内式土器 土師器 須恵器 | | |
| | 集落 | 弥生時代～古墳時代・中世 | 土器集積 柱穴 落ち込み状遺構 包含層 | | 弥生土器 土師器 須恵器 瓦器 | | |
| 高安古墳群 | 古墳 | 古墳時代 | 横穴式石室 | | 土師器 須恵器 | | |
| | 古墳 | 古墳時代 | 石室状配石遺構 合わせ口墓棺 | | 土師器 須恵器 | | |
| 東郷遺跡 | 集落 | 古墳時代 | 土器溜まり 滑状遺構 包含層 | | 庄内土器 土師器 瓦器 | | |
| | 集落 | 古墳時代～飛鳥時代 | 溝状遺構 包含層 | | 土師器 須恵器 | | |
| | 集落 | 奈良時代 | ピット 包含層 | | 土師器 黒色土器 須恵器 瓦器 | | |
| | 集落 | 古墳時代 中世 | 水田面 土坑状遺構 包含層 | | 土師器 | | |
| 中田遺跡 | 集落 | 弥生～古墳時代・奈良時代 | ピット 土坑 犀跡 落ち込み状遺構 包含層 | | 庄内式土器 布留式土器 土師器 須恵器 製塙土器 | | |
| | 集落 | 古墳時代～中世 | 溝 土坑 包含層 | | 庄内式土器 土師器 須恵器 瓦器 | | |
| | 集落 | 古墳時代 | 溝 土坑状遺構 包含層 | | 土師器 須恵器 瓦器 | | |
| 水越遺跡 | 集落 | 縄文時代 | 土坑状遺構 ピット 包含層 | | 縄文土器 石器 刃片 | | |
| 矢作遺跡 | 集落 | 平安時代 | 包含層 | | 土師器 須恵器 製塙土器 瓦器 | | |

図版

老原遺跡

第4区 井戸検出状況



第5区

溝及び土坑土層断面



小阪合遺跡

土器出土状況

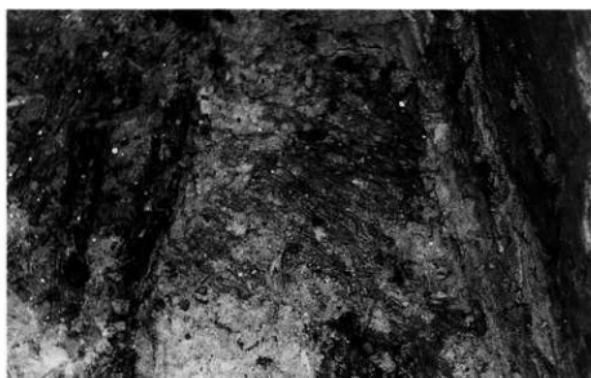


図版 2 太田遺跡（96—266）・久宝寺遺跡（95—719）

太田遺跡
焼失材検出状況
(北より)



焼失材・茅部分



久宝寺遺跡
遺構検出状況
(東より)



図版 3 郡川遺跡（96—275）・東郷遺跡（95—683・96—451）

郡川遺跡
遺物出土状況



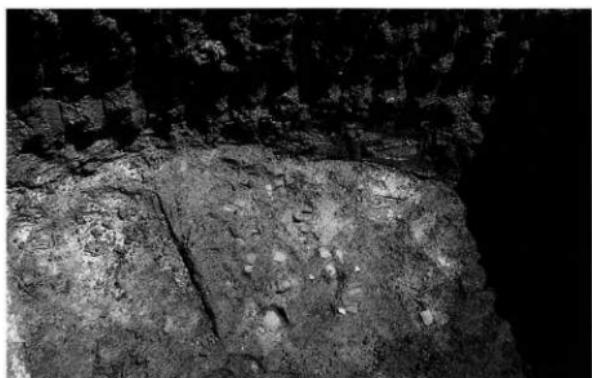
東郷遺跡（95—683）
遺物出土状況
(南より)



東郷遺跡（96—451）
第2構構面（西より）



第1調査区
土器包含状況



第2調査区
断面状況



第3調査区
遺構検出状況



第1 トレンチ全景



第3 トレンチ全景



第4 トレンチ全景



第2 トレンチ全景



妻棺検出状況



妻棺断面状況



石室部分断面
(北東より)



石室部分近景



石室部分
出土状況



図版 8 中田遺跡（95—470）

第5調査区
第1造構面
(北より)



馬齒出土状況



製塩土器出土状況





95—470
土器出土状況



96—487
甕出土状況



96—510

遺構検出状況
(北より)



土坑状遺構 1
(北東より)



土坑状遺構 2
・土層断面
(南より)



図版 11 太田遺跡（96—266）・久宝寺遺跡（95—719）・高安古墳群（95—586）・小阪合遺跡（96—407）・中田遺跡（96—487）



96-266-6



95-719-3



95-586-2



95-586-3



96-407-6



96-407-7

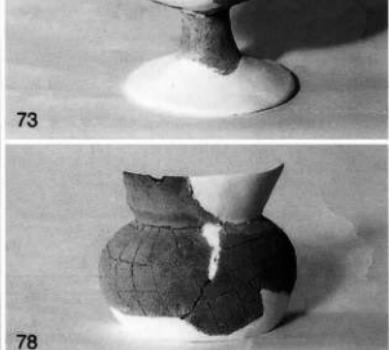


96-407-8

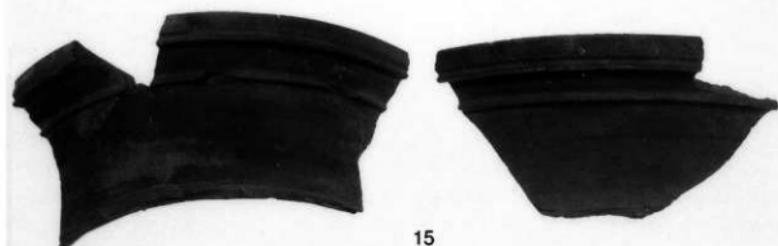


96-487

圖版 12 中田遺跡（95—470）出土遺物



圖版 13 中田遺跡（95—470）



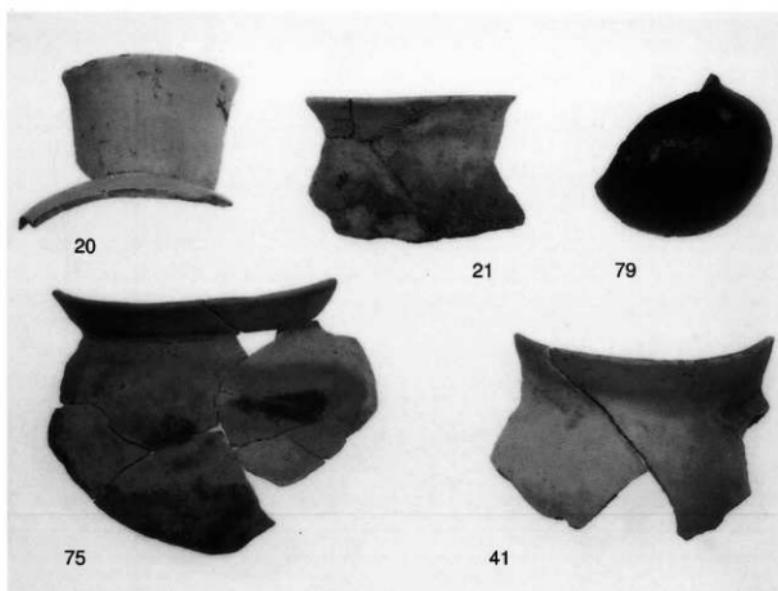
15

17



16

須惠器甕



20

21

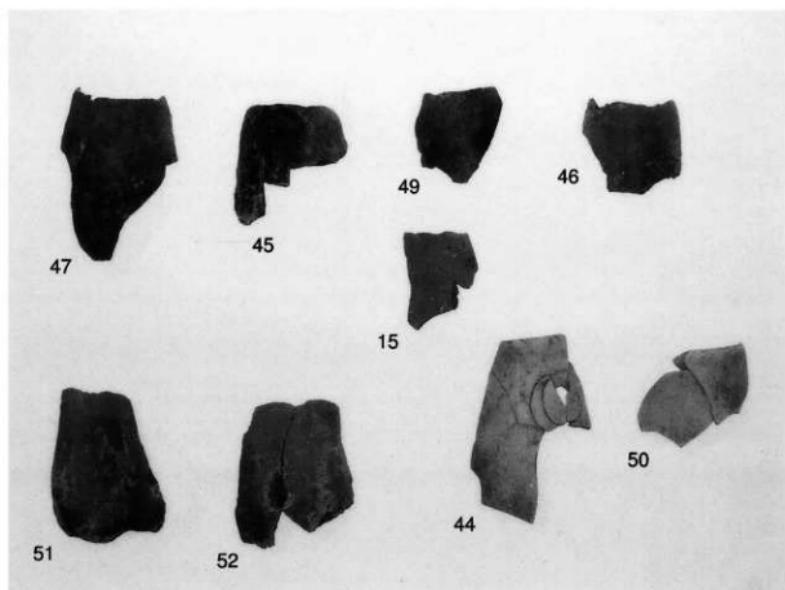
79

75

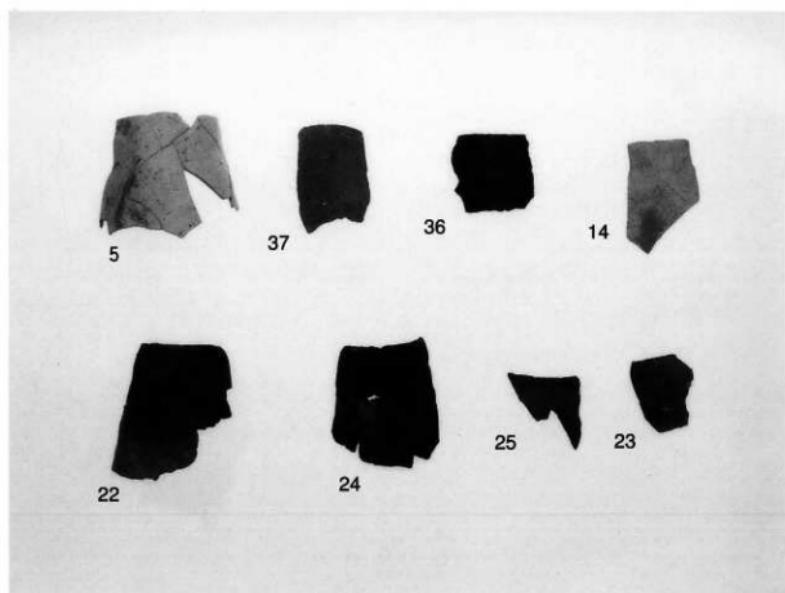
41

土師器甕

図版 14 中田遺跡（95—470）出土遺物



製塙土器



製塙土器

図版 15 中田遺跡（95—470）



馬歯および骨片

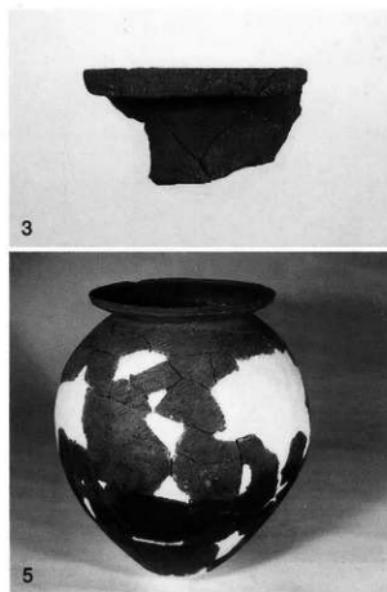


粘土塊

圖版 16 中田遺跡 (95—470·96—510)



95—470 製塙土器



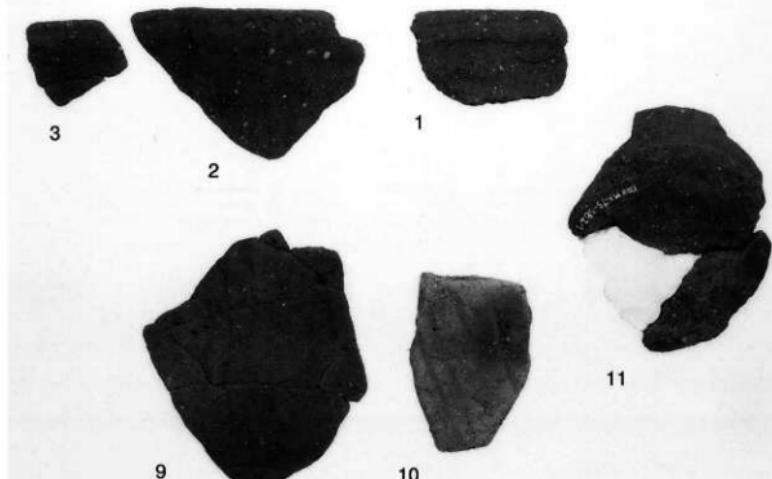
3



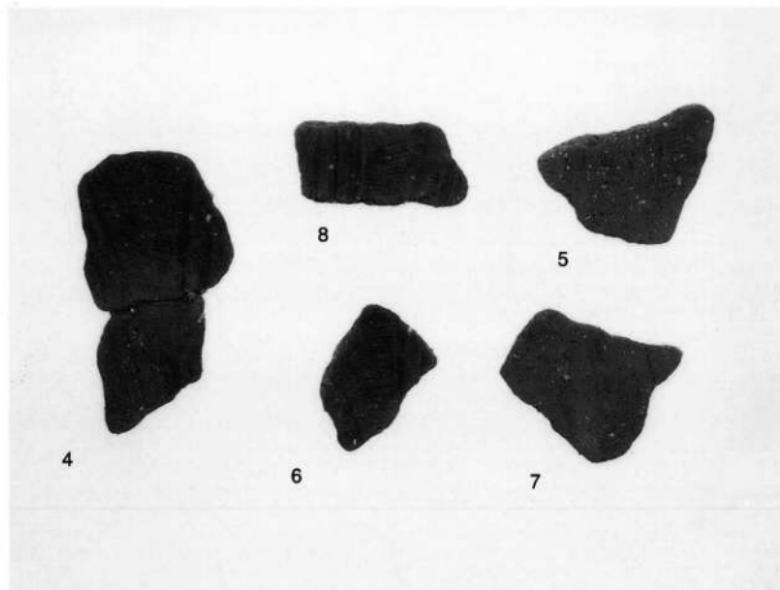
4

6

96—510 出土遺物



I グループ



I グループ

12



16



17



18

14



15

II・IIIグループ



19

24

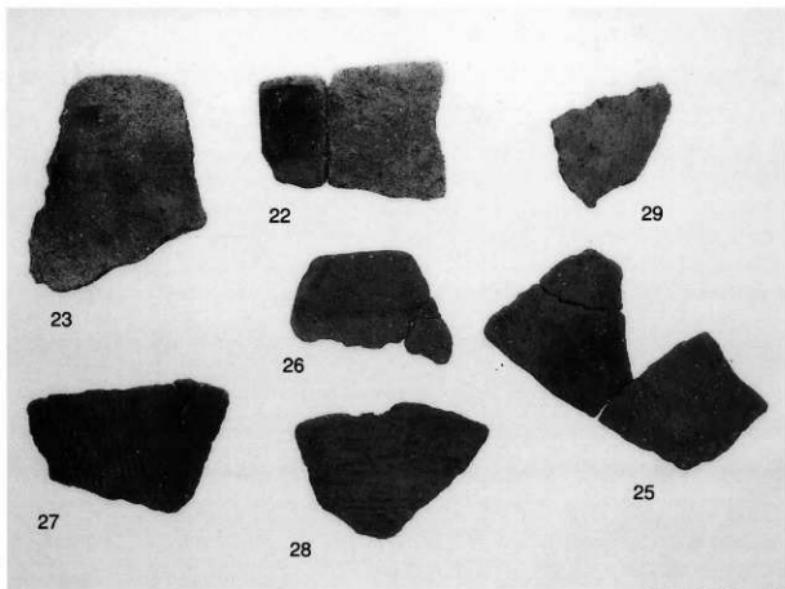
21



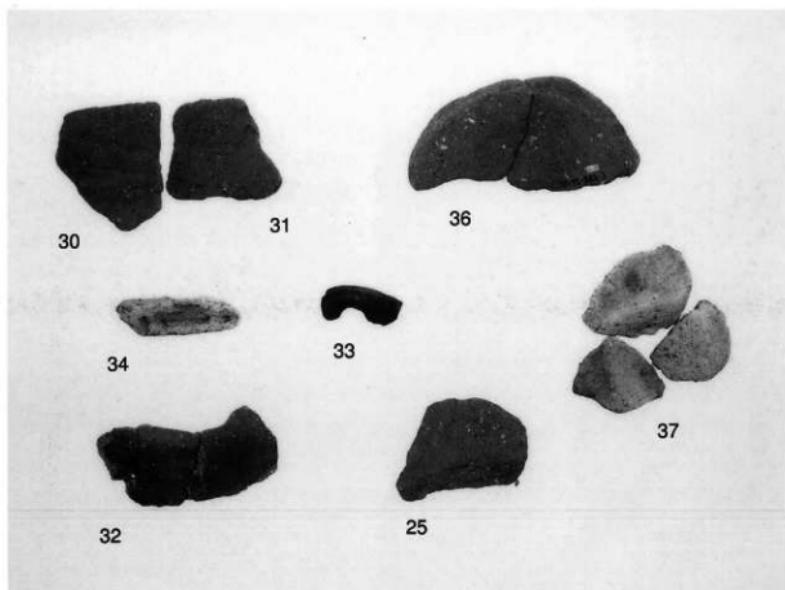
20

IV～Vグループ 及び IXグループ の1部

図版 19
水越遺跡 (95—582)



VIII・IXグループ



X・XIグループ

圖版
20 水越遺跡（95—582）



39



40



43

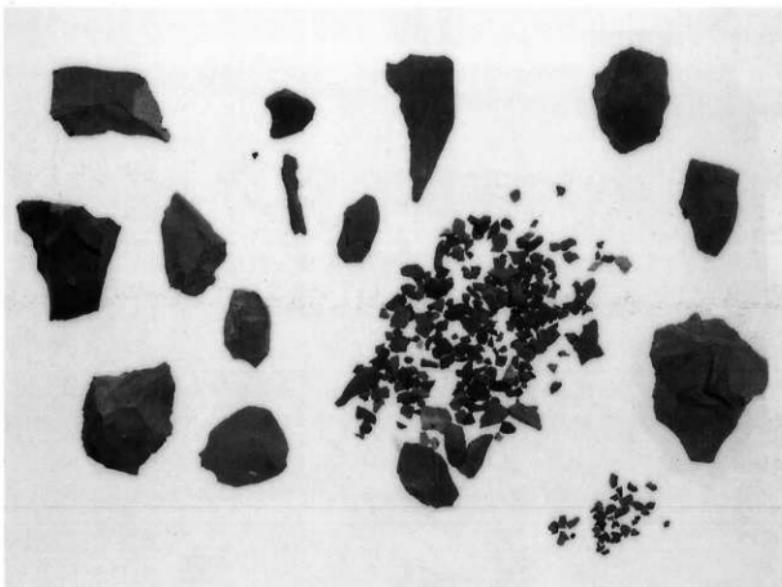


38



41

石鐵・石錘



石器剥片

**八尾市文化財調査報告36
平成8年度国庫補助事業**

八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告Ⅰ

発行日 1997年3月

発行所 八尾市教育委員会

印 刷 織近畿印刷センター

